弘安五年十月廿一日
　金剛三昧院老比丘良俊書
法華玄義　十帖（法華三大部ノ內）
卷七奧書
弘安第五曆暮冬十五日彼日紫賜之意樹
慾贖玄義之模本雖恥無張芝臨池之風體
唯因憶妙華瑤池之朝宗也而已
　權大僧都　親守
卷八奧書
弘安六年七月三日書寫畢
　從四位上藤原朝臣忠雄
卷十
弘安六年十一月四日書寫畢
　執筆　從五位下行修理亮安部雅遠
　願主　法印權大僧都承詮
華嚴經中一乘教分齊義　三帖
夫法界宏高圓宗玄邈僅預法席剩企弘通
仍勸有緣諸人遂開一部模板庶幾遐方終
古流演傳布而已
　弘安六年癸未九月八日沙門禪尒謹誌
像法決疑經　一卷
爲過去禪定聖靈寂圓出離生死往生極樂
所摺寫供養也
　願主　正六位上左衞門少尉平朝臣宗政
　弘安八年乙酉十月四日
　　平朝臣家政
　　尼　妙蓮
法華經疏記　二十帖（法華三大部ノ內）
卷一
弘安七年四月八日　宋了一敬書
卷二
弘安七年五月廿日　宋了一敬書
卷三上
弘安五年八月五日　前權中納言平時繼書
卷四下
弘安七年七月五日　權律師行從
卷六
弘安五年二月晦日　大法師親瑜

卷八
弘安八年四月卅日　始從一位良教公
卷十
弘安九年四月八日　終宋了一續書　開板
　願主　法印權大僧都承詮
天台教觀典　適畢模寫功
使後賢鑽仰　令來者弘通
三聖垂跡砌　神德陪尊宗
百王鎭護嶺　人法彌紹隆
過現恩所類　緇素結緣衆
恙離煩惱域　俱遊眞如宮
傳法正宗記　十二卷
日本國相州靈山寺續先師宴海末終願勸
進沙門寶積沙彌寂慧等謹題　今上皇帝
大皇大后　皇大后祝延聖壽　關東大將
軍家息災延命國泰民安開鏤大藏印板副
納內弘安十年丁亥九月日謹題
禪門寶訓集　二冊
此書有補於叢林久矣然本朝未有刊行輒
募衆緣鋟梓畢工今將此板捨入建長禪寺
正續裕廣印流通不惟傳揚古德之先言往
行古倫亦有少酬夙志矣弘亥中夏幹緣古
倫識
法華文句　十帖（法華三大部ノ內）
卷一
弘安五年九月七日　權少僧都宰圓七十三
卷三
弘安八年四月十八日　宋了一續筆
卷四
弘安七年六月十七日　宋了一敬書
卷五
弘安五年九月十七日　從三位平範賢
卷六
弘安五年六月廿七日　執筆源全
　願主　法印權大僧都承詮
卷七
正應五年夾鐘三五之日
右筆東寺門院金剛佛子源舜二十三

卷九
弘安四年七月十六日
正五位下行前越前守藤原親盛
釋摩訶衍論記　六帖
爲報佛恩酬祖德謹開印板傳之來葉矣
正應元年戊子六月　日　沙門慶賢
應庵語錄　一冊
應庵禪師振唱楊岐一宗提起虎丘正脈得他語於掌中欲弘通於遐代仍打施長財刊行流通伏願開拓人天祝延聖朝矣
正應元年九月下旬八日
三聖寺住持沙門湛海謹記
奉行　維那師元
三敎指歸　三卷
爲報佛恩酬祖德謹開印板傳之來葉矣
正應二年己丑六月三日　沙門慶賢
秘藏寶鑰　三帖
正應三年庚寅五月廿八日　沙門慶賢
金剛頂經大瑜伽秘密心地法門義訣　一帖
爲報佛恩酬祖德謹開印板傳之來葉矣
正應四年辛卯七月十八日
高野山於往生院沙門慶賢
中論　一帖
夫斯本頌者八万歲之骨髓十万頌之樞鍵也故存玄道於絕域領深不於無言是以西天翫斯論而作注釋者七十餘家東夏崇此宗兮致鑽仰者幾許處所哉今聊爲酬祖師式開印板冀玄心獨悟之慧風遍扇率土肅然物外之覺日更耀扶桑耳
時正應五稔壬辰南呂中旬於大安寺刊定流傳
三論宗幹緣沙門聚慶謹誌

法華義疏　十二卷
卷之三
永仁甲午姑洗盡日因中觀宗師之勸化彫
法華義疏之第三庶幾比丘尼正詳藤氏娘
幽儀乘此寶車直到淨刹乃至四恩三有利
潤無窮而已
都幹緣沙門素慶謹誌
之一二
自去永仁至同三年迸首尾三箇年之星霜
開義疏十二卷之印板訖即就澄禪宗師之
講肆事討論因聚南都北嶺之舊疏加刊定
加以擇統略新選之相亂斜文字點畫之紕
繆有宋本豈加旃新雕不聊爾哉尙恐庸愚
揆文英賢察足風聞焉鳴龍樹負貝葉於五
天也八不正觀之月獨耀震嶺提婆羅睺灑
法雨於三國也絕待妙法之華盛薰金陵從
爾以降漢家本朝專弘此宗異鄉邊方雖翫
斯數代屬米法從鑽仰無人時覃季澆書寫
莫處嗚呼從推古天皇御宇至當代七百餘
年相承僅傳宗綱將亂三論章疏一無印板
爰素慶幸逢難大乘忝聞宏宗宛似雪山
士爲半偈今投身相同香城薩埵求般若今
灑血留共緣緇素同志兄弟早翫非三非一
之妙乘速到非近非遠之寶所殊當卷檀那
清原氏女擬七又逆修顯如々妙理七世恩
所通自他三界群生豈善別然則發破邪顯
正之覺成革凡入聖之粧也
都幹緣沙門素慶處跋
再入宋沙門慧海謹書
彫刻諸人等勝弘明春
久信盛弘快賢嚴順
大乘玄論　二帖

永仁三年三月廿一日開板

菩薩戒比丘寂性

金光明最勝王經　十卷

夫今經者法性制底速入證悟之妙理王法正論攘灾招福之要術也弟子覺允宿執所催信心無貳脩行稍餘二十年轉讀已及一千部而世流布本於文字點畫紕謬是多疑殆不少爰或上人共比校數本具被閱義疏若訪內外之賢哲若勘和漢之字書研核之切磋之然間有一沙門詣于天川凝志誠祈宿願之處天女夢中告曰汝欲成所願者詣轉法輪寺感得最勝王經之證本可令轉讀之云云夢覺即來傳受轉讀丹祈方答素願忽成倩思大辨之證明不耐小僧之感歎以其證本彫此印板首尾五箇年就中起自同法一

兩輩之願念爲勸此經百萬部之將讀投一身之淨財願一部之妙文弘通普天利群生我深誓願設還三界六趣之間設墮三途八難之底手捧經卷口誦妙文在所々流傳生生世々頂戴而已

永仁三年乙未六月七日之畢沙門了信

沙門定信

轉法輪寺住持沙門覺了

禪林僧寶傳　三冊

嘗觀八十餘員老惡跡口堪向外揚底事傳爲希世寶重新拈出在搏桑義心禪者慕緣將唐本傳寶傳抄寫重新鋟古廣其傳貴後之覽者如獲司南之車可以追記古人之萬一庶眞風之不墮也時永仁乙未孟秋苾芻鏡堂叟覺圓書

大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多經理趣釋　一帖

永仁四年丙申正月　日

以槇斷開印板之　法眼行圓

金光明最勝王經　十卷

此經國土大珍寶　人天諸神所歸處
佛法依此經人住　王法依此經保護
而模柝損文字消　如失眼目無所見
若無能詮最勝文　依何知經所詮義
爲國爲法勵微力　更開模傳未來際
三界所有諸天神　隨喜守護佛王法
四恩爲初及法界　六道衆生得解脫

正安元年己亥六月　日

願主　南都興福寺僧覺性

敎誡新學比丘行護律儀　一帖

正安四年三月　日　大法師信重

梵網經古跡記　二卷

右形本者先師法橋實重依蒙貴賤之助成所修彫刻之微功年序移露點半消爰信重適睚傳正敎調卷之未曾修將來得果之勝業徒恥他請之名利更忌自行之善因方拭懺愧之淚專發熊悚之願且勸有緣之僧侶且勵無貳之心口開兩軸之板祈双親之菩提加之戒光照除弟子之擬暗法燈久排滅現當之苦塵凡願法界巨益普及而已

正安四年　願主　大法師信重

觀無量壽經　一帖

校合和漢數本勘定釋義意趣文字之有無次第之上下幷點畫闕行等取捨是非若有難辯者就多本用之所以恐錯謬於卒爾其

功歷年月願愚迷於寸心定以朋友談因爲弘通證本勘重刊板印矣
願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國

建保二年太歲甲戌二月初八日畢此部筆功大蒙　師誨敬寫印字比丘明信

奉請根本即是圓行將來正本請出由緣記新寫奧於根本文不審由在復無證本不能校合空積歲月無勘定期所以明信發願致請機敎相感當今正時披殘部文擬校合本及類五會終準經旨遂勘定功列板即本於是同志兩三三談一會加功成願證談所定記錄歷然順理應文補欠夷剩或來論章成其文義或引韻篇匡字音訓乃至字畫倭點假名次第讀談楷定證印寬喜二年四月三日酉終惣結首尾五日三月二十七日故首而三月小四月二日不作此功故五日也

倭漢之勘定光達古積其功魯魚之錯謬未學今有何疑仍捧彼證本重開此版印者也抑此印本者切取兩書生讀刪傳之字畫綴成三部大經觀經阿彌陀經之文典但於大經者染禿筆寫之其慇懃之志趣不遑具記矣

仁和二年辛丑九月四日所終功也　釋子仙才

貞永之初壬辰之歲依彼遺約置此版刊殊期一周擬終功績乃至平等施一切矣
二月三日立筆十月五日寫竟　釋子禽

去弘安年中行圓上人承　初願之旨被開一切經之印板而正安第二之曆林鐘下旬之天不終大功遂歸空寂今年依迎

第三廻之忌辰知眞爲謝彼恩德三部之妙典五部之要義抽懇棘開印板是偏所備彼追貴也雖弘一部於穢界之雲期再會於淨刹之月而已
願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國

正安四年壬寅六月廿一日　沙門知眞

御請來目錄　一帖
爲酬四恩廣德與三寶妙道寫大師御筆謹開印板矣

正安四年十一月廿日　高野山愚老沙門慶賢八十二

未來星宿劫千佛名經　三卷
爲令法久住滅罪生善謹開印板矣

德治三年戊申三月廿一日　行圓

虛堂新添　八冊　（一名虛堂語錄）

祖翁在世語錄二帙刊流天下宋咸淳五年晉之續錄後集已成三卷而　本朝未刊之先師常爲言而未果成也爲人之後者曷無勇爲乎仍搜遺逸新添數紙於後錄之尾鋟梓于龍翔正和癸丑開爐日拙孫宗卓敬書　沙彌宗哲等施財開版

梵網經古迹記　二帖

正和五年三月　日　宗英

敎誡新學比丘行護律儀　一帖

南京西大寺故空公宗師百箇日忌辰依當于五月八日各投少財開此印板摺寫一千卷敬施群集僧冀以衆僧一味合力之世珍翻成尊靈五分法身之望財威儀法水久湛乎四海皆完浮囊毗尼慧燈永挑乎一天悉

守油鉢乃至一闡提共得三胃地矣
正和五年三月　日

右奉爲尊靈自他二利行業成就又爲愚質現末兩世福智圓滿懃賾此印板偏擬今願望不顧後見之嘲誚唯呈中心之懇祈者

宗英書

辨顯密二教論　二卷

元應二年庚申二月　日　開之

鎭州臨濟慧照禪師語錄　一冊

元應庚申　妙秀鏤板

古文尙書孔氏傳　十三卷

學古神德筆法日下逸人貫書

右史記言之策者先王號令之書也廣擧宏綱密撮機要寔是啓道之淵府設敎之門樞立爲國經垂爲民紀六籍之冠萬古不刊者也今將弘其傳命工鋟梓莫謂尸祝治樽俎豈非見義而爲耶普勸學徒庶察吾志儒以知道釋以助才豈曰之小補哉

元亨壬戌南至日學三命宗業

沙門素慶謹誌

黑谷上人語燈錄　七卷

元亨元年辛酉ノ歲偏ニ上人恩德ヲ報ジ奉ランカ爲又モロ〳〵ノ衆生ヲ往生ノ正路ニ趣カシメンガ爲ニコノ和語ノ印板ヲヒラク一向專修沙門南無阿彌陀佛圓智謹疏沙門了惠感歎ニタヘズ隨喜ノアマリ七十九歲ノ老眼ヲノゴヒテ和語七卷ノ印本ヲ書之

元亨元年辛酉七月八日終

謹疏　法橋寺嚴卷頭

（『温知錄』に按黑谷法然上人語燈錄は文永十二年正月二十五日了惠が自序ありて倭語燈錄と稱す七卷あり漢語燈錄とゝもに寬永癸未孟春刊行せりもとは元亨元年印板を開ける也）

四分律比丘戒本　一帖

募諸人力彫木及梓酬茲微善證離邊眞

元亨二年正月　日

寓泉涌寺幹緣比丘會源

三部經　四帖

自建曆三年癸酉至正安四年壬寅版刊雖終度度之大功點畫漸及字字之欠闕智炬殆似幽慧燈恐可滅爰沙彌慈阿深信淨土門早辭娑婆界畢有先約訪後事因茲投彼遺財開此新板矣

元亨二年壬戌二月十四日　沙門知眞

阿彌陀經　四帖

相當樂生上人一百箇日之忌辰翻彼遺札摺寫此經以此因緣入一佛土耳

元亨二年八月晦日　向阿

詩人玉屑　一冊

茲書一部批點句讀畢胸臆之決錯謬多焉後學之君子望正之耳

正中改元臘月下澣　洗心子玄惠誌

春秋經傳集解　三十卷

右一部三十卷普勸學徒拮据經營重命工刊行以弘其傳焉

正中二年乙丑仲春　釋圓澄謹誌

安樂集　二帖

正中二年十月　日　比丘了延刻

選擇本願念佛集　二帖

正中二年十月　日　比丘了延刊之

寒山子詩集　二冊

正中歲次旃蒙赤奮若冬十月下澣禪尼宗澤捨心聊以刊之

隨求即得眞言儀軌　一卷

嘉曆二年丁卯六月二日　沙門承秀刊

佛果圓悟眞覺禪師心要　二冊

道證大師鏤佛果老人心要焉其用心之勤見於後序但彼后序偏述南北參禪與座禪之異匪遑縷羅此書之蘊故云以至見機而作今察以至兩字正思欲贊許禪定等何故治生產業猶可口出入諸禪自在世無礙哉蓋曹溪斥坐禪所以顯其性圓悟勸座禪所以治其病所謂禹稷顏回同道者耶時嘉曆戊辰寒食之日　比丘尼如淨謹跋

鎭州臨濟慧照禪師語錄　一冊

這箇冊子者當年臨際祖師巧作白拈賊家具子也今五百年之後有兒孫比丘尼印開流通而證之者且道是直躬者邪是不直躬者邪具眼勝流垂鑒察焉

嘉曆己巳仲秋日　比丘尼道證謹識

來來禪子集　一冊

辛未歲秋刊

于實相之閣

如是長語以余昔於鄉國酬應所出一時土且每因同遊者或見之必爲其所抄輒集成數帙復使諸名宿德爲題跋良由懲余之惡以誡於余誠余之益友乎人以離合不定而余又成東度遠涉故散失者十五一日檢線筐偶獲如許零亂後先翹英等爲得復編之

今且又入版是以昔小懲今其大誡歟可笑

辛未十月十五日四明梵僊書

○當時代刻現存古板木目錄

成唯識論述記
述義九本一卷模板十□枚御□講本承士之功所彫進之矣
建久六年乙卯八月廿九日□□僧　堯盛

大品經　三帙九卷
元亨三年六月六日　永　重

仁王經　上卷
元亨三年六月廿二日

大品經　一帙十卷
元亨三年九月十二日　嚴　順

華嚴經　三帙六卷
元亨三年十一月十一日

華嚴經　廿五帙七卷
元亨三年十二月廿二日

華嚴經　五帙八卷
元亨二年五月五日　重　舜

大品經　一帙六卷
元亨四年六月三日　永　重

大品經　二帙八卷
正中二年四月十一日　久　信

大品經　一帙七卷
元德二年七月廿一日

華嚴經　後分下四
建武元年十二月十一日

○室町時代

○戰亂の爲に開版事業の衰微せざりし理由○五山版—名稱の由來○臨川寺版—名稱の由來○朝鮮に於て正中刊詩人玉屑の覆刻○武人開版の隆盛—尊氏版—師直版○足利本—名稱の由來—足利學校開版說—足利所傳の活字と鏤長木活字と—駿閣版說○正平本論語—梓者道祐傳—正平本論語の種類並に其刊行年代の前後—正平本論語の臨寫本支那に流傳せし異聞○支那彫版工の來朝並に當時開版の困難○博多版(一)—寬永年間飜刻活字本—梓者俞良甫傳—好古日錄の訛傳—博多開版說—現存博多版は悉く嵯峨に於ける開版書—博多版に就ての臆說—博多と堺と—俞良甫の功蹟○五山開版の衰微と共に泉州堺薩州鹿兒島及防州山口に於ける私版の勃興○阿佐井野家の開版—本朝鑑鑑—南宗寺本論語○薩摩版—本朝朱子新註開版の濫觴—伊地知本大學—伊地知重貞と僧桂庵と○大內版(一)に山口本)—明朝印刷說—駿印刷說—補遺○當時代開版書跋錄○五山版書目錄

建武中興の偉業、有終の美を保つ事能はず、天下は南北兩朝に分れ、鬪爭する事五十有餘年、終に南風振はずして、天下の政權室町將軍の手に歸せ

戰亂の爲に開版事業の衰微せざりし理由

五山版

しと雖も、庸主相繼ぎ遊逸に流れ、内亂絶えず、諸雄其機に乘じて蹶起し、兵馬の權を爭ひ、世は所謂戰國時代となれり、されば此時代に於ける文學は萎靡として振はず、僅に五山の僧徒によりて其命脈を保たるゝに過ぎずと雖も、開版の事業これが爲に衰頽せざるのみならず、經文、語錄の開版益盛に、漢籍の覆刻亦少からず、蓋し戰亂は人をして無常迅速を感せしめ、來世の冥福を祈るに至らしむ、されば武人なほ經を誦し、法躰となるもの多く、戰歿せし者のため、或は自己罪障の消滅せん事を願はんが爲に、佛書を開版せし者多きと、當時漢文學は地を拂ひて、五山の僧徒にあらずんば外國の信事を解し、其交文を草する事能はざりしがため、外交の使節となり、所謂天龍寺船に乘じて、支那と往復頗繁なりし結果、彼が開版の盛なるに倣ひ、佛書、漢籍の覆刻、或は先師の遺稿を開版せしもの多きとによれり、

後世所謂五山版とは、是等五山の禪寺を始め、其系統を引ける諸寺に於て、開版せられし書籍を指すものにして、其名稱の唱出せられし年代明からずと雖も、『右文故事』（近藤正齋著）本に足利本、臨川寺版の目ありて、未だ五山版の名なきに、『典籍秦鏡』（書肆田口明良著）文化十年の序に至りて初めてこれあり、而し

禪儀外文集　一

疏

山門

圓悟住雲居

地靈雲居非石梁陳分九境世傳天上有山神常護法幢須彌魁罡之者年來轄英靈之衲子其人具竪出頂門之眼行全提祖令之權古覆太千入語言之三昧身入分刹海爲游戲之神通豈暇奪人境於笑中何止分賓主於句內顧垂巧便俯徇時機大震海潮之音用祝後天之算

璞老住東禪

同

寺近雙峰地連七澤觀今法席疑古叢林師門挺多開已

山谷詩集注卷第一

豫章黃庭堅

魯直

疏

山門

圓悟住雲居

地號雲居非石梁隔分凡境世傳天上有山神常護法幢須求魁聖之者年來轄英靈之衲子某人具竪立頂門之眼行全提祖令之權古覆太千入語言之三昧身分刹海爲游戲之神通豈暇奪人境於笑中何止分賓主於句內顧垂巧便俯徇時機大震海潮之音用祝後天之算

璞老住東禪

同

寺近雙峰地連七澤觀今法席號古叢林師門挺多開已

山谷詩集注卷第一

豫章黃庭堅　魯直

庭堅字魯直號山谷老人

古詩二首上蘇子瞻

前篇梅以屬東坡○東坡報山谷書云古風二首託物引類得古詩人如此故置諸篇首云

江梅有佳實託根桃李場

太山阿此句倣其體老杜有江梅詩又有詩云欲發照江梅吳淑事類梅賦云亦果中之嘉實文選趙景真與嵇茂齊書曰北土之性難以託根場圃寒山子詩昨

夢中問答集上

此集有両本
此本爲正

問曰。衆生ノ苦ヲスキテ。樂ヲアタフルコトハ。佛ノ大慈大悲ナリ。コカルヲ。佛教ノ中ニ。人ノ福ヲ求ヲ制スルコトハ何故ソヤ

答曰。世間ニ福ヲモトムル人。或ハ商賈農作ノ業ヲイトナミ。或ハ利錢賣買ノ計コトヲメグラシ。或ハ工巧伎藝ノ能ヲホトコシ。或ハ奉公給仕ノ功ヲイタス。其ヒワサハ。各コトナレトモ。其志ハ皆同ジ。其アリサマヲ見ニ。生涯タノシカラス。身心ヲ苦勞スルハカリニテ。其志ノコトクニ。求得ル

蒲室集

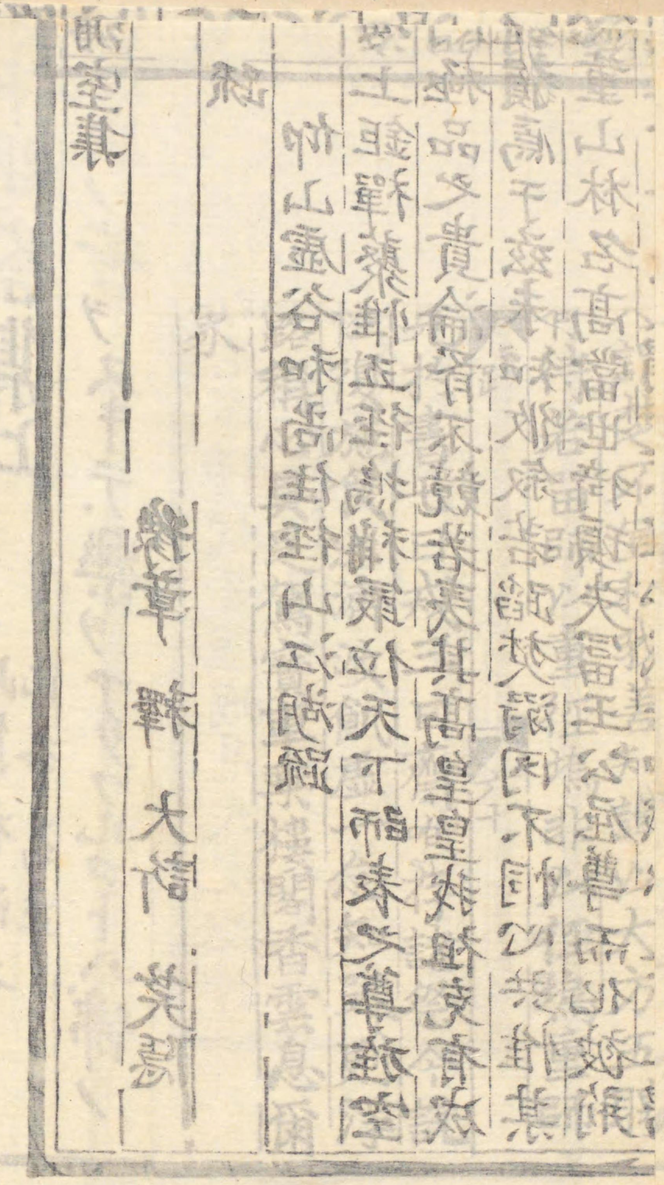
跋

仰山虛谷和尚住徑山江湖跋

海上鉅禪藂惟五徑鴿稱冠位天下師表之尊旌空門極品之貴淪胥不競若夷其高皇皇我祖克有成規瀕焉于茲未知攸叙若蹈焚溺罔不恫心共惟某德重山林名高當世猗頽失富王公屈尊而化被前輩三十年吳人謂楚不宜私我善知識以大方五聘猶不就天道有待若留師以重徑鴿非以徑鴿重師

大故鬼小空見於書七日戒三日齋嘗存諸祭令說法以開汝真性復施食以濟汝飢虛一念知歸則洋銅爲醍醐甘露稱心具足寶車乘樓閣香雲息爾塵勞入佛境界

保壽尼寺擅越菩薩戒尼大文摠持施貲命工刊行此版伏願人人肅清慧目个个開悟靈心息有報資然親融接延文已亥春雲居比丘妙葩題



臨川寺版

て『秦鏡』に五山版と稱するもの多くは梓行年代の不明なる漢籍、語錄の類にして、中には五山以外開版の書籍をも混入せり、因て思ふに五山版の名目は、文化の頃書僧等が唯古版と稱するのみにては紛れ易きを以て、便宜上僧徒の開版せし漢籍、語錄の類にして、梓行年代を記さずと雖も、當時代に刊行せしと推定せらるゝものを總稱してかく呼びしが、何時しか通稱となりしものなるべし、

當代初期に於て盛に書籍を開版せしは、僧疎石及其徒妙葩にして、世之を臨川寺版と稱す、臨川寺は疎石の開基なるを以てなり、而して疎石及妙葩は共に五山の僧徒なり、之を五山版と稱せずして、特に臨川寺版と稱するは怪しむべきに似たりと雖も、其名稱の起原頗る古くして、人口に膾炙せるのみならず、其開版する所亦頗る多きを以て、後五山版てふ新名稱の現れしに拘らず、特に其名目の今に存する所以なり、

人或はいふ、臨川寺版中、支那及朝鮮へ淨藁を送り、彼地にて開版せしめしものありと、然れども從來予が檢する所、未だかゝるものありしを見ず、これ恐らくは宋、元槧本或は韓本を臨川寺にて覆刻せしもの、或は臨川寺版

首楞嚴義疏注經卷第十之一

長水沙門 子璿 集

四破行陰三一盡未盡相
二一明區宇二〇一想盡益相△阿難彼善男子修
三摩提想陰盡者是人平常夢想消滅
寤寐恒一 想陰若存寤即想像寐即成夢今想陰
盡即無有寤夢以想陰是夢之元故寤寐
一者雖有寤寐以無想故寤
亦如寐寐亦如寤故云恒一 覺明虛靜猶如晴
空無復麤重前塵影事 圓明心體名爲覺明
離想浮動故名虛靜

朝鮮に於て正中刊詩人玉屑の覆刻を朝鮮にて飜刻せしものを誤つてかく傳へしものなるべし、

『經籍訪古志』第六、卷、詩人玉屑の條に、卷末記本云、竝書一部批點句讀畢、胸臆之決錯謬多焉、後學之君子望正之耳、正中改元蕤月下澣洗心子玄惠誌、又有三正統己未韓臣尹炯等跋、稱主上殿下、念二詩學之委靡一、欲三廣二布此書一、歲在二丙辰一、出二經筵所一レ藏一本一、命レ繕二之梓一、始刊二于清州牧一、臣炯覩二其舊本一、頗有二誤字一、即命二集賢殿一讎正以下云々、末列二署監校々正刻手等名銜一、以二跋文一攷レ之、此本韓臣奉二國主命一、依二玄惠校本一刊行者、凡 皇國所レ傳典籍、近日流二傳于海外一者僅數部耳、正中隔レ今殆五百三十餘年、而是書在二正統初一、韓人早已刊行、不二亦奇一哉、

武人開版の隆盛

武人開版の濫觴は弘安以前にあれども、秋田城之介泰盛、前越前守親盛等二三者に過ぎず、而して建武以降戰亂に起因し、武人の開版頗る多くして枚擧に暇あらず、就中足利尊氏開版の『大般若波羅蜜多經』六百帖、高師直開版の『首楞嚴義疏注經』十帖等は有名なるものにして、殊に後者は大部のものならざるが爲か、世に師直版と稱して好事家に十襲珍藏せらる、而して此經は宋槧本を覆刻せるものにして、古來巷說に銅版なりと傳唱せらるゝと雖も、其版式を熟視するに、字畫に缺損あるのみならず、漫滅せし箇所も亦少からざるを以て、全く木版なる事を明かにせり、されば巷說に

尊氏版、師直版

首楞嚴義疏注經卷第十之一

長水沙門 子璿 集

四破行陰三一盡未盡相
二一明區宇二〇一想盡益相 △阿難彼善男子修
三摩提想陰盡者是人平常夢想消滅
寤寐恒一 想陰若存寤即想像寐即成夢今想陰
盡即無有寤夢以想陰是夢之元故寤寐
一者雖有寤寐以無想故寤亦如寐寐亦如寤故云恒一 覺明虛靜猶如晴
空無復麤重前塵影事 圓明心體名爲覺明
離想浮動故名虛靜

師直熟思今生懺尤不可勝計是曉劫
罪障何以消除因茲謹開此
眞詮之板以救積業之根庶冀上報四恩
下資三有同出妄想昏域共入
楞嚴覺場
曆應二禩季春中澣武藏守高師直敬誌

銅版といへるは、其版式いさゝか銅版に類せるより、誤つてかく傳へしものといふべし、

古來室町時代の開版中、佛書に臨川寺版、儒書に足利本の名稱は、最も人口に膾炙せしものなり、然れども足利本の名稱は、古昔下野足利學校に於て、經書を印行せしことの傳說により、德川時代の中期に於て、活字版の經書を總稱し、漫然かく呼びしものにして、固より有名無實なるものなり、吉田篁墩の『活版經籍考』に其由來を叙して

活版の經書世人槩して名けて足利本といふ是下野州足利の學校にて刷せしことありしを傳へてかくはいふなり今も足利に活字印版數百枚殘れり友人日下部隅東氏其地に遊びし時數字を印揭し來りしを見しに字体縮少にして今存在せる諸書に合せず自ら別物なり足利學校は上杉安房守憲實が再興せしより學徒盛になりしよし鎌倉大草紙にしるしたれば經書を印せしこともありぬべしといへどもも流傳廣からぬにやたしかに足利本といへるものいまだ經見せず今なべて世に存して行はるゝ所のものは悉く洛京の舊本なり

足利所傳の活字と慶長木活字と

と、此活字今傳はらざるを以て、詳にしがたしと雖も、曾て其所傳の活字數箇を捨せしものを見しに、慶長活字本『東鑑』の活字と殆ど同形なり、因て思ふに駿河(木活字)版の開版監督者たる元佶が曾て足利學校第九世の庠主たりし所縁により、慶長木活字の幾部分を傳へしを見て、古くは經書を開版せしと訛傳せしものにあらざる乎、蓋し足利本の名稱は『七經孟子考文』(山井鼎著、享保十六年刊)に活版の經書を捜き、是を足利學校に於て印行せしものと誤認し、足利本と稱せしに初まり、『活版經籍考』なほ『考文』說を繼承してやゝ疑を存するに過ぎざりしが、『正齋書籍考附錄』に至り『考文』に足利本として引用せる活版の經書を以て、慶長前後の開版なる事を考證して之を駁せしは卓見といふべし、且古來足利學校事跡に關するの記錄世に多しと雖も、開版の事一として記せしものなきを見ても、其謬傳なる事を知るべきなり、

駿閣版說

元亭に『古文尚書孔氏傳』出でて漢籍開版の擧復活して、より、正中に『詩人玉屑』及『春秋經傳集解』貞和に『白氏文集』延文に『范德機詩集』等續出し、正平十九年に至り有名なる『論語集解』十卷開版せらる、道祐居士の梓行する所にして、世に所謂正平本論語これなり、道祐の傳は載せて『泉州志』一の卷西本願寺別院の條に在り、

正平本論語

當院者元道祐之所開基眞言寺也、道祐足利義氏之第四男俗名祐氏也、幼而喪父、其母來居于當津、薙髮號道祐、初學天台、後謁大谷本願寺覺如上人、爲一向專修念佛者、足利尊氏至任將軍、依同姓舊緣、除寺地租稅、納封田若干戶、曆應年中上人與道祐佛像聖敎等、今尚在矣

と、其歿年に至りては絕て知るに由なし、

今世に傳はる所の正平本論語に凡四通あり、一は卷尾に堺浦道祐居士重新命工鏤梓とある單跋本、一は右跋文の次行に學古神德楷法日下逸人貫書とある二跋本、一は二跋共に刪除せる無跋本、一は明應八年に至り單跋本を覆刻し、道祐跋を削り、西周平武道敬重刊と改めたる覆刻本等これなり、『正平本論語札記』(市野光彦著、文化年間刊)に其刊行年代の前後を論じて、單跋本は四種中最先出のものにして、無跋本は是を再揭せるものなりとし、且附記して

梓者道祐傳

正平本論語の種類並に其刊行年代の前後

一則卷尾有學古神德楷法日下逸人貫書十二字、學古神德楷法未知其

不教而殺謂之虐不戒視成謂之
暴 馬融曰不宿戒而責
日前成爲視成也 慢令致期
謂之賊 孔安國曰與民無
信而虛刻期也 猶之與
人也出内之吝謂之有司 孔安國
曰謂財
物也俱當與人而吝嗇於出内惜
難之此有司之任耳非人君之道
也 孔子曰不知命無以爲君子也
不知禮無以立也
孔安國曰命謂
窮達之分也

何義蓋日下其姓貫其名也、此即影正平本者、亦所希見也
といへり、然れども予の覩る所を以てすれば、『札記』に所謂影正平本なる
學古云々とある二跋本を以て、最先出のものとす、蓋し學古云々の十二字
は、正平に先つ事四十餘年、元亨二年開版する所の『古文尚書孔氏傳』巻尾
にも、學古神德筆法日下逸人貫書の十二字を記せり、或はいふ日下は京師
を指し、逸人は即ち隱逸の人、其名貫なるもの手鈔する所と、其然るや否や
を知らずと雖も、共に同筆にして元亨頃の人たるや明かなり、而して正平
本論語の跋に重新命工鏤梓の句あり、因て思ふに正平本の原版は、夙く『古
文尚書』等と共に開版せられしも、其書流傳稀なるを以て、正平に至り道祐
新に覆刻の際、原版のまゝ學古云々の十二字を存せしが、後書中の誤謬を
正し補刻せし時、其訂正新版たることを示さんが爲に、其記名を删除せし
ものなるべし、其誤謬を正せしことは、二跋本巻十末大名に、論語を誤つて諭
語に作れるを、單跋本以下皆訂正して論語と改めしを見ても、二跋本の單
跋本に先ちしを知るべし、無跋本に至りては之を單跋本に比するに、界欄、
字形皆是一樣にして即ち同版なり、而して帝室博物館所藏無跋本の古版

不教而殺謂之虐不戒視成謂之
暴馬融曰不宿戒而責
日前成爲視成也慢令致期
謂之賊孔安國
信而虧刻期也猶之與
人也出内之吝謂之有司孔安國曰與民無
曰謂財
物也俱當與人而吝嗇於出内惜
難之此有司之任耳非人君之道
也孔子曰不知命無以爲君子也
孔安國曰命謂
窮達之分也
不知言無以知人也馬融曰聽言
則別其是非
也堺浦道祐居士重新命工鏤梓

正平甲辰五月吉日謹誌

論語卷第十 経一千二百二十三字
注一千一百七十五字

諭 學古神德指法目下逸人貫書

正平本論語の版本

正平本論語の臨寫本支那に流傳せし異聞

木を觀るに、道祐居士の跋文削去の痕跡歴々見るべし、されば無跋本は單跋本の跋文を削去して再揭せしものなる事明かなり、

『岡本況齋筆記』に、正平本古版木兩面雕刻せるもの三十二枚市に出でしを、狩谷棭齋之を見て、須原屋茂兵衞に勸め購はしめしといへり、今帝室博物館所藏のもの即ちこれにして、維新後須原屋より購求せしものなり、

正平本論語其文字奇古にして六朝の風あり、曾て其臨寫本支那に流傳せしに、誤つて高麗舊鈔本なりとし、近時に至る迄其非を悟らざりし異聞あり、『讀書敏求記』清、錢曾著に

何晏論語集解十卷、童年讀史記孔子世家引子貢曰、夫子之文章可得聞之、夫子之言天道與性命弗可得聞也已、又讀漢書列傳贊引子貢曰、夫子之言性與天道不可得而聞已矣、竊疑古文論語與今本少異、然亦無從辨究也、後得高麗鈔本何晏論語集解、檢閱此句、與漢書傳贊適合、因思子貢當日寓嗟嘆意于不可得聞中、同顏子之如有所立卓爾故以已矣傳言外之微旨、若脫此二字、便作了語、殊無低徊未忍已之情矣、他如與朋友交、言

而不信乎等句、俱應從高麗本爲是、此書乃遼海道蕭公諱應宮、監軍朝鮮時所得、甲午初夏、予以重價購之于公之仍孫、不啻獲一珍船也、筆畫奇古、如六朝初唐人隸書碑版、居然東國舊鈔、行間所註字、中華罕有識之者、洵爲書庫中奇本、末二行云堺浦道祐居士重新命工鏤梓、正平甲辰五月吉日謹誌、未知正平是朝鮮何時年號俟續考之、

と、而して『皕宋樓藏書志』(清陸心源著　光緒八年刊)に至り、初めて『敏求記』の誤を正し、日本國開版の臨寫本なる事を考證せり、

論語集解十卷(日本舊鈔本、述古堂舊藏、魏何晏集解、何晏序、案書中遇吾字俱缺首筆、語字亦然、豈避日本諱耶、每卷終注經若干字、卷末有堺浦道祐居士重新命工鏤梓、正平甲辰五月吉日謹誌兩行、又有學古神德楷法日下缺三字、上一字似是逸字書一行、正平係日本年號、詳翁氏海村跋、卷首卷末俱有虞山錢曾遵王藏書印記、

黃氏手跋曰、何晏論語集解十卷、有高麗本、此見諸讀書敏求記者也、記云此書乃遼海道蕭公諱應宮監軍朝鮮時所得、甲午初夏、予以重價購之於公之仍孫、似遼王之言甚的矣、其實不然、余向於京師遇朝鮮使臣、詢以此書并述行間所註字、答以此乃日本書、余尚未之信、頃獲交翁海村、海村著有吾妻鏡補、舉正平年號問之、海村云、其年號正平實係日本年號、並非日本國王之號、是其出吉野僭竊其國號曰南朝、見日本年號箋、據之則此書出日本、轉入朝鮮、遼王但就其得書之所、故誤認爲高麗鈔本耳、此書向藏碧鳳坊顧氏、余曾見之、後歸城西小讀書堆、今復散出、因亦以重價購得、展讀一過、信如遼王所云、似六朝初唐人隸書碑版、不啻獲一珍船也、原有查二瞻詩一紙、僅黏附卷端、玆命工重裝入冊、記其顛末如此、己卯仲秋五日、丕烈識、

翁氏手跋曰己卯初夏、郡城黃蕘圃先生、出示舊鈔本何晏論語集解、筆畫奇古、紙色亦古香可愛、此書平曾於錢遵王讀書敏求記中、見其目云、遼海道蕭公、監軍朝鮮時所得、予以重價購之、行間所注字、中華罕有識者、末云、正平甲辰五月吉日、未知正平是朝鮮何時年號、平以高麗史、海東諸國記考之、俱無此號、後見日本年號箋、知正平乃日本割據之年號也、案日本九十六世、光嚴天皇丙子延元元年、有割據稱南朝者、於吉野建都改元、時中國元順帝至元二年、歷世五十五年而終、正平是第二世、自稱後村上天皇、

甲辰是正平十九年當本日九十九世後光嚴天皇貞治三年中國元順帝至正廿四年也夫海外之書槧本寫本所見亦有數種雖格式不同若行間有注字則日本所獨也朱竹垞跋吾妻鏡所謂點倭訓於旁釋之不易是也是則此書斷爲日本所寫無疑不僅紀年之符合也平曾有日本著書目然所見不得十一近日宋槧及宋元舊寫本日少一日此書實係舊寫況又來自海外正遵王所云書庫中奇本而平亦得共賞其奇幸甚幸甚翁廣平識

と、知るべし彼に流傳せしは二跋本の臨寫本にして刊本にあらざるを、然るになほ清人其筆蒭奇古にして、六朝初唐人の隷書碑版の如しと賞贊することスの如し、豈我國の名譽ならずとせんや、而して彼土に傳はる所僅に一部の臨寫本なるを以て、從來一小部分にのみ知られざりしに、其普く世に流布するに至りしは、黎庶昌我國に公使たりし時、單跋本を購得し、之を覆刻して『古逸叢書』（光緒十年刊行）に收め、世に公にせしより以降なりとす、

僧周信著す所の『空華日工集』に

應安三年九月二十二日、唐人刮字工陳孟千、陳伯壽二人來、福州南臺橋人也

支那雕版工の來朝並に當時開版事業の困難

と、これ雕版工來朝の事書に見えし初めにして、當時我國其人に乏しかりしを知るべし、而して當時開版に困難なりし事は、同書永德二年の條に

元亭釋書乃日本高僧傳也云々開版之費賜江州某田地今年開版已成、其版亦燼可惜也、蓋爲再刊之張本故特及之君（義滿）頷之

と、『元亭釋書』一部開版の爲に、特に江州の田地を下賜す、其費用の少からざるを知るべく、當時開版の事業容易ならざりしを察するに足る、

博多版（一に堺版）

斯の如く開版に困難なる時に當りて、異朝漂浪の身を以てし、私財を抛ち千辛萬苦の結果、『月江語錄』『碧山堂集』を初め『李善注文選』『傳法正宗記』『新刊五百家注音辯唐柳先生文集』（俗稱『柳文』）『新刊五百家注音辯昌黎先生文集』（俗稱『韓文』）『春秋經傳集解』等數百卷を翻刻開版せしは、元人俞良甫にして、世に之を博多版と稱し、昔時京阪にては堺版と稱せり、以上列擧せし書中、『柳文』『韓文』及『傳法正宗記』等は、後寬永年間京都に於て活字版に翻刻せられ世に流布せり、世俗或は博多版を以て悉く活字版なりといへるは、この翻刻本を誤つて原版と思惟せしよりの訛傳なり、

翻刻活字版

梓者俞良甫傳

梓者俞良甫、其傳詳ならずと雖も、元明の亂を避けて我國に歸化せしも

五百家註音辯昌黎先生文集卷第三十二

碑誌銘

唐故司徒兼侍中中書令贈太尉許國公神道碑銘

韓曰韓弘新史有傳多本碑詞傳聞有誤處當以碑爲正蓋雅酉之役弘爲行營鄂統公爲行軍司馬其知弘非一日也○今本止云許公神道碑銘

韓姬姓以國氏 住曰世本曰曲沃桓叔成師之子曰韓万万子永伯子子輿子輿子厥遂以韓爲氏故云嚴曰唐韻云韓姬出自唐叔虞之後曲沃桓叔之子万食邑於韓因以爲氏代爲晉卿後分晉爲國韓爲秦滅復以國爲氏出潁川後避王莽之亂居南陽夏音賈 其先有自潁川徙陽夏者其地於今爲陳之太康 祝曰秦滅韓以其地爲潁川郡陽夏隋改爲太

の歟、『柳文』巻末に履歴を自記せる跋文あり、

相在唐山福州境界
福建行省與花路莆田
縣仁德里墓諱訪住人
俞良甫久仕
日本京城皇近幾年勞
鹿至今喜成矣
歲次丁卯仲秋印題

『好古日錄』（藤井貞幹著　寛政九年刊）に『傳法正宗記』の跋文を援き、歳次丁卯は寛永四年丁卯かと疑を存せり、是寛永七庚午年九月吉日『傳法正宗記』を活字版に翻刻せしものを原版と思惟し、夫より年代を逆算せしよりの誤なり、曾て屋代弘賢『柳文』に識して曰く

所謂丁卯後小松院嘉慶元年矣、何以知之、隅東先生曰、嘗於或家見俞良甫所刻柳文、其本邊準之上層有古人之肉書卷末題應永之號焉、據之推考此刻先應永必矣、應永以前歲次丁卯乃嘉慶元年也、俞良甫蓋元人之

避亂而歸化於我邦者乎、桂山先生曰、勞鹿之鹿通、力見『醫書寬政八年仲秋日源弘賢識

とあるにて其年代を知るべし、況んや良甫刻する所、應安三年に『月江語錄』應安五年に『碧山堂集』等ありて、明かに其年月を記せるをや、

博多開版說

現存博多版は悉く嵯峨に於ける開版書

『典籍秦鏡』に博多版の由來を記して

三味線堀御殿醫小島樣說には韓柳文博多版はヤハリ五百家の注本にて所々に黑木の中に白字の所有つる由卷の末の樣なる所に印章の形ありて俞良甫と云古へ良甫といへる者覆刻したる由故に此名有つる版を博多版本と云古へ良甫といへる唐人の版行せし初の由

唐人の版行せし初の由

といへり、然れども古來博多にて開版のこと、書に徵すべきものなきのみならず、現今傳はる所の良甫開版の諸書を見るに、悉く嵯峨の寓居に於て梓行せしものゝみ、人或は應安三年刊『月江語錄』に嵯峨開版の事を記さず、『昌黎先生文集』及『春秋經傳集解』に刊行年代及梓者の姓名を記さゞるを以て、嵯峨來住以前、既に博多にて開版せしものならんと、思惟する者

なきにあらずと雖も、當時筑紫は菊地一族を初め、南朝勤王黨の根據地にして、後醍醐天皇の皇子懷良親王亦征西將軍として博多にましませしかば、同地にては總て南朝の年號を用ひし事、當時の古文書及金石文に徵して明かなり、然るに『月江語錄』には北朝の年號應安を用ひたり、これ嵯峨にて刊行の證なり、而して梓行年代を記さゞる『昌黎先生文集』及『春秋經傳集解』に至りては、『經籍訪古志』（瀧江道純、森立之等編）昌黎先生　文集の條に

> 無序及跋文、編注名氏俱未詳、每半板十行々十六七字、注二十三字、不記刊行時月、然板式雅古絕、與俞本柳文相類、前輩定爲二集合刻者似是、但比柳文々字稍大、界欄亦小異、今行活字刊本、以此本爲原

『典籍秦鏡』春秋經傳集解の條に

> 柳文と等しき板式なり此版も元人俞良甫の嵯峨にて覆刻同時のもの

と記せるによりて、良甫晩年嵯峨にて開版せしものなるや明かなりといふべし、斯く論じ來れば博多版の名稱は殆ど有名無實なるやの觀あれども、又飜て考ふれば良甫久しく嵯峨に住みて開版せし書籍數百卷に上り、

博多版に就ての臆說

當時に在りては世に喧傳せられしと想像せらるゝと雖、其開版の事は固より其事跡の斷片すら未だ古書に記載せし者ありしを見ず、されば博多開版の事も書に徵すべきものなく、其刻本亦世に傳はらざるの故を以て、直に之を非認し去らんは、妥當の見なりと云ふべからざるなり、蓋し當時博多の地たるや、海外來往者唯一の碇泊地にして、異朝の來客は必ず此地に上陸せざるべからず、而して當時博多に元人の居住せし事、『石城遺聞』に正平二十三年即ち北朝應安元年元人陸仁同地に寄寓し、聖福禪寺佛殿の記を作り、碑を建てし事を記載せり、因て思ふに良甫渡來の初め、暫く博多に居住し數書を開版せしが、邊陬の地不便少からざるを以て、後京師に近き嵯峨に移りしにあらざる歟、或は良甫開版する所の書にして、其版式當時博多にて印行せしものに酷似せるの故を以てかく命名せしもの歟、是固より臆說に過ぎずと雖も、古來京阪地方に於て良甫開版の書を堺版と稱せしも、亦博多に所緣なしとせず、當時堺は海內唯一の開港場にして、各地の船舶輻湊し貿易盛に行はれしを以て、博多にて刊行せられし書籍も亦隨て輸入せられ、同港にて取次ぎ賣買せしを以て、時人かく命名せしも

博多と堺と

俞良甫の功蹟

五山開版の衰微と共に泉州堺薩州鹿兒島及防州山口に於ける私版の勃興

のとも稱せらるべければなり、

之を要するに博多版或は堺版の名稱は、古來たゞ巷說に傳はるのみにして、確證とすべきものなし、故に予は寧これを良甫版と改稱し、永く梓者の功蹟を表彰するの擧に出でん事を切望する者なり、良甫刻する所の『李善注文選』跋に「自辛亥四月起刀至今苦難始成」『傳法正宗記』跋に「憑自己財物置板流行」『唐柳先生文集』跋に「幾年勞鹿至今喜成矣」と、異鄉に流寓して自己の財を抛ち、且自から刀を揮ひて版木の雕刻に從事する事數十年、其苦辛慘澹察するに餘りあり、漢籍開版の擧稀なる當時に在りては、其稗益尠少ならざるべく、學界に貢獻せし功偉大なりといふべし、然るに其傳書に徵すべきものなきのみならず、其姓名すら僅に好事家の口端に上るにとゞまり、古來絕て其功蹟を表彰せしものありしを聞かず、嗚呼良甫や遠く異鄉に漂浪して、尙且此有益なる事業を成す、其心事を憶ひ出でゝは、うた た痛惜の情に堪へざるものあり、

應永以降、五山僧徒の開版やゝ衰微すると共に、私人の開版泉州堺を中心として盛に行はれたり、蓋し當時堺の地たるや、沿海の利を占め海外と

阿佐井野家の開版

本朝醫書開版の濫觴

の貿易盛にして、文化の最も發達せる所なり、されば開版の業も當時荒廢して振はざる洛京より一轉して、此新進の地に移りしも亦自然の勢なりといふべし、堺に於ける開版の濫觴は、正平十九年刊行の『論語集解』なりと雖も、其盛なるに至りしは明應以後の事に屬す、就中世に有名なるは阿佐井野家の開版にして、『醫書大全』『東京魯論』等最も世に稱せらる、

『醫書大全』は大永八年の梓行にして本朝醫書開版の濫觴と稱せらる、明版の覆刻にして阿佐井宗瑞捨財刊行せし所なり、而して此書を更に覆刻せしものあり、其体裁、版式毫も原版と異ならずと雖も、同書廿四卷十七葉に、原版には○蟲痛仙氣との如く白圈を冠すれども、覆刻本には◉蟲痛仙氣との如く黑圈に改めたるを以て區別する事を得べし、固より覆刻本には其再版年月を記さざるを以て明かならずと雖も、其紙質、墨色より推考するに、大永を距る事遠からざるものといふべし、

阿佐井野家の開版は、曩に『三體詩註』（大永の頃宗禎再揭）あり、後に『韻鏡』（享祿元年宗仲梓行）あり、更に天文二年に至り『東京魯論』十卷開版せらる、後此版木八十七面傳へて堺南宗寺の什物となり、同寺にて屢摺寫をなせり、世に『魯論』を指

何晏集解

論語學而第一

子曰學而時習之不亦說乎有朋自遠方來不亦樂乎人不知而不慍不亦君子乎有子曰其爲人也孝弟而好犯上者鮮矣不好犯上而好作亂者未之有也君子務本本立而道生孝弟也者其仁之本與子曰巧言令

して南宗寺本論語と稱するは是が爲なり、曾て無名氏『東京魯論』に識して曰く

南宗禪寺所ㇾ藏東京魯論鏤版八十七面、傳云唐人歐陽詢摺本之文、先輩得以摸臨、其字畫明整最可ㇾ奇觀、思其或然、且清博士宣賢所ㇾ記、阿佐井野者名宗瑞、當時府人之巨擘、曾大永中所ㇾ家刻ㇾ醫書大全等今尚存ㇾ于世矣、如其貫齋則邈々、年紀不ㇾ可ㇾ復知ㇾ也、如ㇾ此版之存ㇾ在於南刹、其起由亦無ㇾ明據、大低慶元之際爲ㇾ寺什ㇾ云者、山侶及府人之口碑可ㇾ以認焉

と、然れども『泉州志』南宗寺の條に、元和元年罹ㇾ兵燹ㇾ本寺一空矣とあれば、其寺什となりしは澤庵和尚再興以後の事といふべし、而して阿佐井野氏の傳記に至りては、無名氏識語の如く、其後裔夙く絶え、邈々として今知るに由なしと雖も、開版に許多の費用を要せし當時に在りて、版木を購ひ或は捨財刊行す、富家にあらずんば成し得べき事業にあらず、而して『三體詩註』跋に阿佐井野宗禎購以置ㇾ之於家塾ㇾ也、『本朝醫考』黒川道祐著に宗瑞泉南人也、氏阿佐井（野の字脱歟）曾嗜ㇾ醫術其志在ㇾ濟ㇾ人、於ㇾ茲使ㇾ刻ㇾ剞劂氏ㇾ刊ㇾ明本之醫書大全、偏爲ㇾ救ㇾ世人熟覽ㇾ之也と、富家に人となりて遊逸に流れず、累代濟世救

論語學而第一　何晏集解

子曰學而時習之不亦說乎有朋自遠方来不亦樂乎人不知而不慍不亦君子乎有子曰其爲人也孝弟而好犯上者鮮矣不好犯上而好作亂者未之有也君子務本立而道生孝弟也者其仁之本與子曰巧言令

叔世也蓋唐本有古今之異乎家本有損益之失乎年代寖遠不可獲而測遂撰累葉的本以付屮庶幾博雅君子糾焉

天文癸巳八月上丁亥

金紫光禄大夫拾遺清原朝臣宣賢法名宗尤

本朝朱子新注開版の濫觴

薩摩版

民の志厚くして、或は私塾を開きて鄉黨の子弟を薫陶し、或は醫藥を世人に施し、或は書籍を刊行して學界に貢獻す、其識見時流を拔くものといふべし、惜哉其名埋沒せられて、傳記亦詳ならざる事を、

當時泉州堺と並びて繁榮を極め、文化の最も發達せしを、薩州鹿兒島及防州山口なりとす、蓋し二地は沿海の利を占め、外國との交通盛にして文物輸入の便あるを以てなり、而して共に五山の僧徒を介し、其城主或は國老等の手によりて、漢籍開版の盛擧をなせり、

薩摩に於ける開版の濫觴は、古來文明年間刻する所の『聚分韻畧』なりといひ、夙く『耳敏川』卷二十八にも

大隅吉升鄉に般若寺といふ有此寺に虎關の著せし三重韻をゑりたる板あり文明年中の物也是薩摩にて印本のはじめ也占春先生彼地逗留中此寺に一宿して此板を見いだし大夫にはかりて此寺に米を寄附しかの板をば侯の文庫にをさめられたり

と記せざるも、傳本極めて稀にして今確實なる年代を知る事を得ず、而して文明十三年に至り、薩の國老伊地知重貞、其師五山の僧徒桂庵と謀りて『大

大學之明法外有以極其規模之大而內有以盡其節目之詳者也。三年之徒蓋莫不聞其說而曾氏之傳獨得其宗。於是作爲傳義以發其意。及孟子沒而其傳泯焉則其書雖有而知者鮮矣。自是以來。俗儒記誦詞章之習。其功倍於小學而無用。異端虛無寂滅之教。其禍過於大學而無實。其他權謀術數

伊地知本大學

伊地知重貞と僧桂庵と

學章句』刊行の擧あり、これたゝに我國に於ける『大學』最初の刊行なるのみならず、實に本邦朱子新注開版の濫觴といふべし、世に之を伊地知本大學と稱す、蓋し程朱學は後醍醐帝の朝、玄惠初めて之を講せしより以來、虎關、義堂等の僧徒相繼ぎて斯學を皷吹せしと雖も、開版以て其學を標榜する者あらざりしが、約百六十年後に至りて、其系統をひける桂庵を介して、九州の一隅に刊行せられ、初めて世に流布するに至れり、

伊地知氏は畠山重忠の兄重光より出で、其伊地知を氏とせるは、其祖曾て越前井筒城主たりしを以て、井筒より轉訛して伊地知と稱せしなりといふ、尊氏將軍となるに及び、罪を獲遁れて島津氏に投じ、後國老となれり、重貞は其裔にして深く學事に心を寄せ、會々五山の僧徒桂庵（字は玄樹後に使し、事終るや更に朱子學の蘊奥を極め、文明五年歸朝す、同十年薩州に抵り州主に拠して特に寵遇せられ、寺を其地の海岸に創立せしめ桂樹院と號す、後錫を日向、大隅に飛ばしして安國寺に住せしが、晩年伊敷村東歸庵に籠り、文龜五年六月十五日寂す享年八十二）薩摩に來るや、之に師事して業を受け、遂に相謀りて『大學章句』を梓行して、斯學流布の淵源をなすに至れり、

伊地知本大學一たび梓行せらるゝや、大に世に行はれしか、明應元年に

至り其版漫滅せしを以て、桂庵更に之を桂樹院に於て再刊す、今稀に世に存する所の伊地知本大學は多くこの再刊本なりとす、斯の如く九州文化の中心地たる鹿兒島に於て開版の盛擧あり、桂庵亦近國を巡錫せしより、其風日向、大隅に及び續々開版の擧あり、今世に存する所の『聚分韻畧』（享祿三年日向眞行院所刻）『四體千字文』（天文十九年日向田島庄刊行）等は其一部分に外ならず、

大内版、山口本

山口の文化は沿海の利に起因すと雖も、亦大内弘世城を此地に築き、覇を中國に稱せしより、京師を此地に移し、天子を奉じて四方に號令せんとの野心ありしを以て、市街のさま、神社佛寺の位置、形式に至る迄、總て京師を模せしのみならず、月卿、雲客を初め碩學の僧徒を招聘し、且雕刻、刺繍、染織等苟くも一藝に秀でしものは、厚く之を扶持せしかば、諸藝の發達著しく、自から文化の中心地となれり、加之大内氏代々明國勘合符を管掌せしかば、私に船舶を出し貿易の利を占めしを以て、其富海内諸侯に冠たり、而して義隆城主となるに及び、歴世の饒富を承け、加ふるに父祖の武勇により、中國、九州に覇たる事を得しかば、意やゝ驕り、文學に耽りて武事を講せず、典籍を好むの餘使を明に遣はして書籍を求めしめ、又自から開版し或

明朝印刷說

は紙を明朝に送りて印刷せしめしと稱せられて、今に傳はるもの數種あり、世に之を大內版又は山口本と稱す、『老人雜話』（江村專齋述）寫本に

大內介は西國一の大名なりし周防の山口の城に居て紙を大明へ渡して書物を摺らせて取寄けり、今に至てあり山口本とも大內本とも

いふ

と、これ明朝印刷說唱出の起由する所にして、其名稱も亦玆に發せしものなりと雖も、未だ其書目の何たるやを記さざりしが、『典籍秦鏡』に至り其書目を列擧せるのみならず、其版式をも細叙せり、古來此等の說に對して何人も異說を立てしものなしと雖も、予の觀る所を以てすれば疑點亦少からず、

駁印刷說

從來大內版と稱して傳はりしもの凡六種、即ち『三重韻』（聚分韻略）『山谷詩注』『集千家分類杜工部詩』『首書十八史畧』『五經正文』『四書大全』等にして『三重韻』を除くの外、悉く刊行年代及梓者の姓名を記さざる大本なり、就中『五經正文』の如きは、竪一尺五分橫七寸五分の巨本にして、其版式八行行十五字、一字方寸の大字なり、而して『三重韻』には天文八年義隆開版

東第一 上聲	董第一 上聲	送第一 去聲
乾 東 春方 虹蝀也	乾 董 姓也正也	乾 凍 氷又
凍 冫凌 又 潼 關 蝀 蝀又	氣 孔 姓也 空也	時 棟 屋ー 洞 空ー
潨 水入大水 嵩 嵩高也 宮ー室	蝀 蝀ー 蠓蠛	崠 山名在深 又 瞢 雲 澤赤
穹 高也 蒼 風ー雨 空ー 虛 又	董 姓也正也 支ー 作夢 又	空ー 缺 又
峒 崆山名又 霥 天氣下地不應曰ー又	慟 角 熊ー	霿 天氣下地不應曰ー又
龍 豕所封國 櫳 房室之疏也 檻也	憧 心亂 恫 誰引也又	鳳ー凰 仲伯
蠓 蟲名 霥 雨小 時ー	生ー	食ー
曨 日欲出也又 氣ー	開ー 桶 水ー	支ー 熊ー

本同施敷於世光飾
藝苑潤色詞林則所

東第一上平　董第一上聲　送第一去聲

乾一　東春方虹蝀也　乾一　董姓也正也　乾一　凍氷又

時一　凍冫凌又潼關蝀蝃又　時一　孔姓也穴也　乾一　凍氷又

氣一　潀小水入大水嵩嵩高也崇風一雨空一虛又　氣一　棟屋一洞穴一　氣一　湩乳汁

蝀蝃又蝀一蠓蠛　峒嶂深石又　氣一　蕫雲澤水

峒嶂山名又霥天氣下地不應曰一又　支一　蕫作夢又空一缺又　氣一　霥天氣下地不應曰一又

蠓蠛　氣一　霥天氣下地不應曰一又

戇一角　能一　蠓蠛　氣一　霥天氣下地不應曰一又

龍封國名豐邑名霥雷　時一　憧心亂　生一　蠓蠛　氣一　霥天氣下地不應曰一又

龍日欲出也又　器一　桐木一　食一　鳳鳳仲伯一　支一　戇一

本同施敷於世光飾

藝苑潤色詞林則所

謂徑寸之珠不失寶

於其形之小者也矣

嵗天文八年己亥春

三月日　靈松寺大貳藤原朝臣義隆

して書物を摺らせて取寄けり今に至てあり山口本とも大内本とも

いふ

と、これ明朝印刷說唱出の起由する所にして、其名稱も亦茲に發せしもの

なりと雖も、未だ其書目の何たるやを記さざりしが、『典籍秦鏡』に至り其

書目を列擧せるのみならず、其版式をも細叙せり、古來此等の說に對して

何人も異說を立てしものなしと雖も、予の觀る所を以てすれば疑點亦少

からず、

從來大內版と稱はりしもの凡六種、即ち『三重韻』（聚分略）『山谷詩

注』『集千家分類杜工部詩』『首書十八史畧』『五經正文』『四書大全』等にし

て『三重韻』を除くの外、悉く刊行年代及梓者の姓名を記さざる大本なり、

就中『五經正文』の如きは、竪一尺五分橫七寸五分の巨本にして、其版式八

行行十五字、一字方寸の大字なり、而して『三重韻』には天文八年義隆開版

の跋文あり、其文中に乃復命工新其刊矣の句あれば、斯書山口にて雕版せしものなる事明かなるのみならず、此以前既に開版の擧ありしを知るに足る、然らば專齋等の所謂明朝印刷本とは、刊行年代を記さざる大本を指せるものか、然れども『山谷詩注』『集千家分類杜工部詩』『首書十八史畧』等の版式を覩るに、其我國の雕版たるや疑ふべからず、蓋し『山谷詩注』は宋槧本を覆刻せるものにして、之を支那流布の諸本と比するに其目錄中二葉多きのみならず、各題下に脚注あり、『讀書敏求記』清、錢曾著に

舊刻山谷詩注甚佳、但目錄中宿舊彭澤懷陶合題下注云、舊本自此以上缺二板、以後諸題例之前各題下皆當有注、注脚今詢無、此本姑列各題如右、倘後得之當別補入、今吾家所藏二葉宛在卷首、各題下注脚俱全、前更有紹興鄱陽許尹豫章後山詩解一序、始知淵曾以文藝頻試有司爲四川第一、惜乎刻此書者不及見之、遂令擧世缺此幾葉、宋本之難得遇如此

とあれば、支那に於ては宋以後の諸版悉く數葉を缺きしを知るべし、されば此書我國舊傳來の宋槧本を以て、室町の初期覆刻せしものたるや明かなり、而して『集千家分類杜工部詩』に至りては、『經籍訪古志』に

卷首題東萊徐居仁編、每半板十一行行二十一字、此本無注文、就題目攷之、蓋据千家注分類本單錄出本文者、相其板式當足利氏時所刊

とあるのみならず、『況齋筆記』岡本況齋著に

集千家分類杜工部詩は千家注分類本により其本文を抄出したるものにして支那の諸書目に見る所なし蓋し五山僧徒の所爲ならん歟

とあるを以て我國刊行の證とすべし、たゞ『首書十八史畧』のみ明版を仿するの故を以て、或は明朝印刷本なるやの疑なきにあらざりしが、頃日予之を明版と對照せしに、其版式に小異同あり、即ち後年我國にて翻雕せしものなる事を明かにせり、若夫『五經正文』『四書大全』に至りては、其紙質墨色より推考するに、遙に天文以降梓行のものにして、殊に『五經正文』の如きは、卷末に嘉靖壬子秋九月甲辰諸暨翁溥の跋文あり、嘉靖壬子は即ち我國天文廿一年にして、大内家滅亡の後に當れり、されば此書嘉靖版を慶長前後我國にて覆刻せしものといふべし、よしや一歩を讓りて以上の諸書悉く異朝印刷本なりとするも、當時たゞ邦産の紙を送りて、彼の版木に印刷せしめしものなりといへば、用紙こそ異なれ同書同版式のもの必ず

彼土に傳はらざるべからず、然るにさして年代古からざるに拘らず、現今一として存在せざるは何ぞや、且山口の舊記、大内家の記錄等を調査せしも、『三重韻』の開版より朝鮮金安國に書を寄せて『五經傳記』を求め、更に『朱子新註五經』を望みしと文通を記載せるに、異朝印刷依頼の事に至りては其傳說すら記さざるより考ふれば、專齋說につきて疑なき事能はざるなり、蓋し明朝印刷說は古來專齋一人のみ、他は雷同附加せしに過ぎず、しかも其出所を示さざるのみならず、其書目すら記さず、思ふに專齋異談として人より傳聞せしまゝ、老後漫然述べしものにあらざるか、而して後世射利の徒、其說の有名無實なるを利用し、一見朝鮮本の如き巨大なる『五經正文』『四書大全』を初め、刊行年代及梓者の姓名なき『山谷詩注』『杜工部詩』『十八史畧』等を專齋說に附會し、大内版と私稱せしが轉じて通稱となりしにあらざるか、是固より臆說に過ぎずと雖も、正齋、柳庵等の著書に大内版の由來として專齋說を援き疑を存せしまゝ其書目すら記さず、且校齋を初め訪古志一派の古刻書通等亦以て本朝舊刊本となすに、獨り同時の書僧田口明良の編せし『典籍秦鏡』にのみ其書名を列擧せるのみなら

ず、其版式を詳述せること頗る疑ふべし、

大内版補遺

大内家の開版事業は五世盛見の時既に其端緒を開けり、『得巖記』に應永三十三年丙午理趣分一千卷を印し、卷ごとに百錢を附して諸國の貧僧を施與す云々、『花營三代記』に毎歲造三佛百軀或千軀、又印二佛經神呪或百卷、或千卷一とあるを以て證とすべし、されば義隆の開版は好學に起因すと雖も、亦其祖に負ふ所なくんばあらず、

頃日寺田望南氏より大内版『五經正文』に就ての異說を聞く、曰く明治十年の頃近衞家より書籍賣却ありし時、其中に『五經正文』あり、刊行年代を記さざるも其版式墨色より推するに、享祿以前のものとおぼしく、表紙は頗る韓本に酷似せり、而して其卷尾に此書は當家に於て試刷せしもの一部進上候旨、大内家より近衞家へ宛たる文書を貼付しありしを目擊せり、此書賣買の當時雨森氏の手に歸せしも、其後如何なりけん知らず云々と、本書印刷の期迫りて未だ此書を一覽する事を得ずと雖も、以上の說により推考するに、前條に記せし嘉靖壬子歿の『五經正文』とは全く異なれるものなり、想ふに近衞家舊藏大内版『五經正文』の表紙韓本に類せるが上に、大内家は世々外國との交通頗る盛なりしより推測し、當時既に異朝印刷本にあらずやとの說をなす者ありて、終に『老人雜話』にまで記されたりしにあらざるか、而して其書の傳はるもの極めて稀なるを以て、後世射利の徒其說を利用し、一見韓本の如き慶長前後刊する所の『五經正文』（嘉靖壬子歿）を大内版と私稱せしにあらざる乎、茲に附記して後考を俟つ、

◎當時代開版書跋錄

首楞嚴義疏注經　十帖

師直熟思今生懺尤不可勝計矧是贖劫罪障何以消除因茲謹開此眞詮之板以扳積業之根所冀上報四恩下資三有同出妄想昏域共入楞嚴覺塲

曆應二穐年春中澣　　武藏守高師直敬誌

佛果圜悟眞覺禪師心要　二冊

助緣　僧　興乘

尼　昌一

時曆應四年十月　日　臨川寺刊行

靈源和尙筆語　一冊

時曆應壬午年春下旬　日　　臨川寺刊行

夢中問答　三卷

一日等持古先禪師携此帙以示余曰此乃左武衞將軍古山大居士久參夢窓國師問答之語茲欲方便引導一切在家出家或女流等志於道者或有學無學使其便於觀覽之故乃以日本字書所謂假字者繕之目曰夢中問答國師之參學在家弟子大高伊與太守者以鏤版爾宜着語爲證明歟余曰吁世之不有至人出興以智方便千變万化逆順縱橫以導之不知世之人若之何爲狀耶抑佛爲一切智人然其唯能度彼有緣而不能化無緣也又能以一切譬喩說種々事無有譬喩能說此法以心智路絕言語道斷不思儀故然其所有不盡經敎無非方便以假

名假字聊爲誘引之耳佛不云乎除佛方便說但以假名字引導於衆生此之謂也然此方便之說自佛去後謾有繼其聲者今其是作非佛再來孰能爲哉惜余不能誦其假字以觀其眞義玩其眞味於節角之處爲之撫掌擊節爲恨耳或曰未之能誦然而而何以知其然而輒褒之直以謂佛再來歟余曰天何言哉四時行焉百物生焉是天之道雖聾瞽者莫不知之也唯能知其道之所以者鮮之耳國師之道亦猶是歟吾既知且久矣雖無此書亦莫不知之也況有之哉唯莫能知此道之所以耳又且佛者覺也以其能覺斯道也既能自覺乃能覺人即前所謂導引之說是也所謂以先覺而覺後覺以斯道而覺斯民其揆一耳而斯道也亦大矣哉橫亘十方竪窮三際森々萬有何莫由斯道也所謂人々本具各々圓成物々皆然豈唯國師獨然乎哉其不然者唯覺與未覺一間之耳然而而孰不有哉且夫爾之末始覺也余則指爾而謂之曰爾即是佛當是之時除爾不覺使即覺之則何怪哉其或怪者是未覺而未知之也玆又復何怪哉曰是則信然矣夫然又所謂至人出與者皆聞至人無夢而此至人之書乃曰夢中問答亦何謂也曰爾固皆聞之而爾固未嘗知之也其所謂無者豈所謂有無之無歟以夢非夢也然則爾其無復誥於我也我不爲爾重言矣何則爾其不聞古之諺語乎正所謂癡人面前不可說夢然又如舍利弗問須菩薩云夢中說六波羅密與覺時同別須菩薩云此義幽深吾不能說

此會有彌勒大士汝往彼問若復於玆或有以夢中問答如舍利弗所問余則曰此義幽深吾不能說汝往作禮國師時康永改元歲在壬午重陽後十日中華沙門梵僊書于南禪方丈

余書此書越三載一日法延首座携以誥余曰至哉有是書而書之若是此非佛之與佛異相同心殊途同致彼此相爲表裏以化有情曷有是哉然而師知夫大高伊與太守及所刊此之意否余曰唯知其人是有鼻孔者有年矣而實未知所刊之意如何耳然無過欲利益人耳復何意哉曰因其人如師所謂有鼻孔故然後知其香臭乃欲刊之也始則國師不許高曰或未始有此寫本則已既有之而人々遞相沙錄不啻烏焉成馬毫厘有差天地縣隔否則展々轉々以誤傳誤而又誤本各相不同則乃人々疑惑莫知所歸本欲利人奈何反誤人哉然固是作始爲左武衛將軍一人酬答而已不爲它人也譬如佛說一代時教雖一時說皆爲後世及無邊衆生耳如不結集而又安有今日哉於是國師然其說故刊之由是人皆知歸安行大道不復妄趁邪徑也余曰若是哉々々然亦爾知夫大道顯然三世諸佛諸代宗師皆夢言乎延曰請書以認之余曰是則無妨又添一箇延復爲余曰大高伊與太守者號海岸居士入深法門心大如海殊有淨名之風饒益衆生誠未艾也今年春又遷若狹太守云故幷書之甲申十月初八日寓南禪東堂之東軒梵僊再跋

古林和尙偈頌拾遺　一冊

卷首刊古林和尙拾遺偈頌緒　嗣法比丘　梵僊述

小師海壽侍者一日携巨冊謂余曰昨有如開上座者欲南詢乃附舶而去颿風至耽羅舶破之逗留高麗々々人問其故乃出一巨編以示則皆古林和尙所作中間唯畧間東山空和尙者一二耳開乃錄之以爲得至寶而歸今年復有舶發乃遺於壽之族師兄具艭處而復南也由是壽請之以似師又曰以覩之則皆古林師祖所刊行錄中大段無有者壽欲錄出其未刊者或得便則刊之雖乃師祖所棄之物譬如明珠大貝爲富家所棄貧人得之則受用無窮矣余曰若之言然々余之貧亦不欲明珠大貝唯從所好如何耳壽復曰此抄寫本或落或誤尤甚冀校之勘之余曰曷知其元作爲何而校之歟是大難也然亦强從爾請於是壽編錄之乃爲之校或於落誤之處固不能知實爲何字以意逆之或補或正得二百九十四首後玄璵侍者自九州來見之曰某與如聞同志於高麗獲此本也奈何不即開版耶於是欲募緣復使余作疏余謝之乃乞建仁又復於圓曙藏主處得三十九首幷道皎首座處得題跋五首幷使校之及聞有詰問處就爲之批古語曰校書如掃塵以莫能盡也況此無其本可以考者而又余之不能哉不唯不盡必亦多爲金銀車矣見者毋誚時康永乙酉秋書于南禪東堂之東軒

助緣檀越太上法皇　前權大納言藤原氏忠　權中納言源重資　參議藤原基隆　如來藏院殿　從二位藤原蔭子

院二條　典侍源重子

卷末刊古林和尙拾遺偈頌募緣疏

建仁雪村友梅撰

古林和尙平生語要奚翅充棟汗牛而世得傳者如海一滴耳其殘膏剩馥人得味之如甘露之灌腸沃胃不知厭也瓊侍者昔遊海外傳之而歸意欲鏤板與諸好事者共之其功既繁其費不少輒持短疏遍扣英檀慨然樂施則與夫佛性禪師同一勞侶也

龍象衆集結龍藏於叡山鉢巖中鳳凰臺空傳鳳鳴於扶桑國裏是宜佛祖芳猷之不墜豈非古今作者之同途遺簪墮珥印中提拔楔抽釘機盡妙片言行四海跳出尋常葛藤窠一字直千金喚回多少擔板漢只憑毛錐子扶起金剛幢

（助緣五十六人の名畧す）

妙法蓮華經　八卷

依有夢想之告爲令成就現當二世之願望奉摺寫供養法華經一部八卷所奉納春日社寶殿也

貞和元年十一月十一日　尼觀妙

白氏文集　七十一卷

左右雙邊八行行十六字卷十三の五葉縫心下方に刻工王林の氏名あり此書刊行年代なく應安六年永和元年の識語あり被齋過言に曰白氏文集七十一卷皇國貞和刻云々と何によりてかく推定せしや後考を俟つ元和戊午開版する所の那波道圓の活字本は此書を原とす

咸山雲臥紀談　二冊

貞和丙戌三月吉日　　沙門明超
捨財命工鏤梓流通　板留平岳自快庵中
願一切衆臨生死海　乘般若舟速到彼岸

雪峰空和尚外集（外題東山外集）　二冊

東山和尚自於踈山踏着木蛇遭其一口既
乃其死無幾痛定之後便解拈頸作尾拈尾
作頸正所謂雖是死蛇解弄也活由是叢林
之士鮮有不受其毒氣自爲迷悶如窺其斑
者數百年後流於扶桑有契黨書記如滋其
毒於一切以殘涎剩誅化緣以鋟於梓其事
未畢而輒爾詢而後元圭首座曰奈何有其
頸而無其尾使人胡爲而拈弄也耶於是爲
其續之乃使梵僊爲添此足耳丁亥七月書
于建長方丈
景德傳燈錄　三十卷

玉峯敬書

五家正宗贊　一冊

小師居徑焚香拜手稽首謹書于乳峯
貞和己丑仲冬寓于龜雲居僧妙葩命工
刊行

大般若波羅蜜多經　六百卷

比丘尼妙道　尼藤原如鸞
源　氏　女　平朝臣氏胤
妙彌經阿　清原熊犬丸
妙彌行阿　平氏性如
妙彌道阿　清原慶里丸

大般若經一部六百卷爲宿願開板畢
觀應三年九月十五日
正二位源朝臣尊氏

法華經釋　一帖
正平六年十月　日　開板
大樂金剛不空眞實三理趣經開題　一帖
摩耶般若波羅蜜多
正平六年辛卯十二月七日於金剛峯寺
寬覺書　願主　法眼重信

悉曇字母幷釋義　一帖
正平七年二月十五日
願主　法眼重信

三部經　四帖
正平七年二月十五日
大法師善眞刊之
敎誡新學比丘行護律儀　一卷
近阿州敎興寺住阿一律師三十三年之
忌序遺弟苾芻慧海投錢貨之淨財開金章
之印板橖整懇之行儀以貢尊靈之覺位兼
餘薰所覃法界普利矣
文和元年壬辰十月　日
敎興寺住持慧海

虛空藏菩薩陀羅尼經　一卷
文和二年歲次癸巳正月十三日　開板
勸進沙門　石動山　竹林坊重胤
大願主　同　山　佛藏坊賢海

大般若波羅蜜多經　六百卷
文和二年九月廿二日
爲宿願開板畢　左馬頭源基氏

夢窓國師語錄　三冊
下卷末
先國師語要嘗不許傳于世故吾徒多藏之

而未敢違囑矣然藤原公德叟居士之英烈大夫而旣身爲門弟子其機鋒與所存雖預禪會古之名士輩未必過也輒取語本以命梓且不依所誡亦不令吾徒議之吾則謂先師見之尙不過焉諸方亦必爲勘驗之但妙葩勉後紀以歲月云

貞治四年之歲乙巳五月二十二日　天龍住山門人　春屋妙葩謹書

年譜卷末

子子孫孫　繩繩繼繼

文和三年甲午歲十一月　日　守塔小師比丘妙葩立之

勅脩百丈淸規　四冊

文和丙申王春初吉前眞如明千及法橋永尊雕開

大般若波羅蜜多經　六百卷

爲宿願開板畢

延文二年十一月廿一日　參議左近衞權中將源義詮

源氏女如春

義雲和尙語錄　一卷

時延文丁酉受菩薩戒弟子寶慶大檀那野州太守藤原朝臣如冬發願開版矣所集鴻福上報四恩下資三有者

助緣奉行比丘瑞雄維那

刊字奉行比丘等理藏主

洛陽永興比丘心書字

景德傳燈錄　三十卷

延文三年丙申十一月吉日謹疏　幹緣比丘　宗任

蒲室集　一冊

保壽尼寺檀越菩薩戒尼大友惣持施財命工刊行此版伏願人人肅淸慧目个个開悟靈心思有報資怨親融接延文己亥春

雲居比丘妙葩題

范德機詩集　七卷

延文辛丑仲春　命工刊行

梅山月林和尙語錄　一冊

貞治癸卯夾鐘

前若狹守平正俊命工刊行

論語集解　五冊

堺浦道祐居士重新命工鏤梓

正平甲辰五月吉日謹誌

學古神德楷法日下逸人貫書

元亨釋書　三十帖

大日本國延文庚子六月有旨入毘盧大藏海藏禪院寓居比丘單況等謹募衆緣恭爲今上皇帝祝延聖壽文武官僚資崇祿位國泰民安命工鏤梓與大藏經印板共行一部計三十卷時貞治三年甲辰正月日謹題

五燈會元　十冊

此錄禪徒至寶也禪行我朝莫盛如今未刊行焉誠爲缺典廣化衆緣終成美事貞治甲辰重陽日泉南小比丘彥貞謹識

洛南建仁靈洞法印宗應刊行

禪林類聚　二十冊

貞治六年丁未解制日

幹緣僧希果重刊于京臨川寺

虎丘和尙語錄　一冊

此錄舊板已漫滅玆者命工重刊置于龜山金剛禪院伏願佛種不斷世世建光明憧祖

印親傳人々開無盡藏貞治戊申孟春天龍
住持比丘妙葩題

空華文集　十冊
貞治戊申春　中正叟圓月跋義堂外集

了庵和尙語錄　二冊
應安戊申重刊　京臨川禪寺

南堂和尙語錄　十一卷
嘉興路萬壽山南堂四禪庵師姪比丘祖瀾
募緣入梓日東比丘海壽書天台周東山刊
時至正己亥春起手明年庚子春畢工
（應安戊申重刊京臨川禪寺）

破庵語錄　一冊
此錄舊板已漫滅茲者命工重刊置于龜山
金剛禪院伏願佛種不斷世世建光明憧祖
印親傳人人開無盡藏

應安庚戌孟春　天龍東堂比丘妙葩題

應庵和尙語錄　三冊
應安庚戌佛生日　天龍東堂比丘妙葩命工雕之

無準和尙語錄　三冊
應安庚戌季夏　開版

月江語錄　二冊
良甫自刊月江語錄下集□□板七片紙大
小字該三十張數
應安三年六月初旬謹題
（啟文白字左文字なり）

光元禪師語錄　二冊
此語錄舊板已漫滅茲者命工重刊置于龜
山金剛禪院伏願佛種不斷世世建光明憧

祖印親傳人人開無盡藏
應安庚戌孟冬　天龍東堂比丘妙葩題

妙法蓮華經　八卷
應安五年三月十四日　希果拜書

碧山堂集　一冊
應安五年八月初旬　中華大唐俞良甫學士謹置

圓通大應國師語錄　一卷
時應安五年歲次壬子冬十二月十五日西　大中臣朝臣行廣
京龍翔禪寺住持法孫比丘寶興命工入梓

寧禪師語錄　一冊
此語錄禪徒至寶吾家靑甚本朝未有鋟梓　開板願主　禪忠
者七世孫比丘彥貞募緣雕刻欲使眼中有　此帙者實圓勸進開版之
筋衿子一覽而知臨濟正宗在此耳

應安癸丑仲春　同幹比丘貞柏

大般若波羅蜜多經　六百帖
（三百七卷之慧峯正統庵置大般若印板四百內焉
比丘永清發誠心而化有力命工續造矣宜
哉印文打就衆人模寫以茲功勳普利恩有
者也時應安甲寅仲秋日　幹緣比丘永清造之）

三百十五卷　成正正四位下行左京大夫
三百十六卷　大中臣朝臣行廣
三百五十六、三百五十八、三百六十卷　左衞門平忠顯
二百十一卷　開板願主　禪忠
二百五十二卷　此帙者實圓勸進開版之

李善注文選　六十卷
文選之板世鮮流布童蒙不便之福建道與
化路蕭田縣仁德里人愈良甫頃得大宗尤

袁先生之書於日本嵯峨自辛亥四月起刀
至今苦難始成矣甲寅十月謹題

大般若波羅蜜多經　六百卷
第二九七卷
永和二丙辰五月　日　化緣比丘知感

歷代帝王編年互見之圖　一冊
永和第二丙辰季冬初紘
重刊洛之大用庵

集千家注分類杜工部詩　二十五卷
永和太歲柔兆執徐肅霜
京洛大藏坊法印觀喜重刊

永源寂室和尙語錄　二冊
寂室和尙南遊之後晦跡岩谷與世邈如謝
遺人事絕筆久之晚年因衲子懇請迫不獲
已往々一言半句流落江湖或爭暗誦或私
傳寫烏焉之誤蓋不亦少恐其遺失據本印
行不敢加損望無差誤
時永和丁巳冬節之前三日
釋沙門性均謹白

元亨釋書　二十冊
斯卷者平安城人上池軒主惠芳捐財繡梓
于時永和三祀丁巳九月也

念大休　一冊
永和四年刊行

大般若波羅蜜多經　六百卷
此經板喜捨施入江州佐々木新八幡宮專
爲上酬四恩下資三有無邊法界廣大流通
者
康曆元年己未八月七日幹緣比丘勝源
願主當國大守菩薩戒弟子崇永
開板
比丘尼義選

三〇四、三〇五、三〇六卷　源滿房
三五一卷　沙彌照禪
三五三卷　尾張守源義清
三五五卷　左衞門尉源則光
三六六卷　開板　源康春
二三六卷　開板　蓮性

金剛般若波羅蜜多經註解　一冊
康曆二年庚申八月　日
重刊于臨川寺

洪覺範林間錄　二冊
此錄舊板堙沒久矣爰臨川禪寺重新刊行
庶使佛祖奧旨永傳不朽也
康曆庚申夏五　督工普口誌

摩訶般若波羅蜜多心經　一卷
永德元歲十二月十一日雕刻之了
會　運

佛祖正傳宗派圖　一帖
斯圖之作特以五家同系於馬祖下者蓋據
虎關和尙五家辨以爲證焉仍附其文于后
以備藻鑑云時永德二年壬戌菊節日新刊
于洛之南禪龍興庵
板賃五十錢

佛說大報父母恩重經　一卷
永德三年癸亥九月十七日
願主　道祐謹刊

大方等日藏經　十帖
大方等大集月藏經　十帖
菩薩本業經　二卷
以上三部每卷末に花阿妙性妙禮妙林源
念圓空道慶母明頓母善性等開板施主の
名ありて其跋に
奉安置五部大乘經鏤板江州大禪寺專爲
上酬四恩下資三有無邊法界廣大流通者

永德三年十月十日　願主比丘勝源

大集經　三十帖

開經願主平員幸法名常孝有志趣者爲故靈江永公大禪定門十三回追善乃至法界衆生皆成佛道之故也

永德三年十月　日　願主　道源

元亨釋書　三十冊

至德元年甲子六月重刊

佛德錄

佛德錄禪師二會語幷小佛事題贊偈頌等凡若干編如師子嚬呻似象王蹴踏百怪千妖悉潛其踪於虛盛矣哉大法二千載之後就謂重闢佛國乾坤於扶桑之域乎予昔侍師側久矣今觀此錄若視承其諒諒慈誨後之證悟得入者其可勝計哉必有如古塔主讀雲門錄者也具眼者請辨取焉

至德元年冬至日

相國住持比丘妙葩敬題

傳法正宗記　十二卷

福建道興化路蕭田縣仁德里住人俞良甫於日本嵯峨寓居憑自己財物置板流行歲子甲子孟夏四月日謹題

八方珠玉集　三冊

八方珠玉集　堙沒六十年　勠力以彫鐫永置天池院　令法源流傳　至德乙丑歲　仲秋良月天　謹記之

觀無量壽經　一帖

至德三年正月廿五日印本

願主　法眼慈辨

安樂集　二帖

至德三年正月廿五日印本

願主　法眼慈辨

法華經音訓　一卷

時至德丙寅佛成道日河北善法精舍住持心空謹誌

左京兆通議大夫約齋道儉化移財命工刊行

幹緣行西

新刊五百家音註辯唐柳先生文集　十四冊

祖在唐山福州境界福建行省興化路蕭田縣仁德里臺諫坊住人俞良甫久住日本京城阜近幾年勞鹿至今喜成矣

歲次丁卯仲秋印題

寓樞會要　三卷

三州實相禪寺前住持比丘是一比丘妙明如雲等施長財命工重刊寓樞會要三帙置於東福常樂庵永遠流通所集殊勳上報四恩下資三有法界衆生同圓種智仍將斯功德報薦先考老覺先妣如觀冀超眞如之寶域直至菩提之覺場

嘉慶元年重陽日　比丘是一題

無學和尙眞如寺語錄（一名佛光禪師語錄）

嘉慶戊辰正脈守塔比丘周勛命工刊行大佛頂首楞嚴經會解　五冊

嘉慶二戊辰九月起手入彫至于康應庚午二月中旬而畢工乃板留三會院內

華嚴經普賢行願記　七帖

清凉國師行願品疏一卷圭峯同記六冊諒解纜於普賢之願海嚴臺於毘盧之覺岸然巨唐盛行之後吾朝流傳以降未有鏤版已矣故圓乘學人日贏燕弗之功夜伴蟾影之

競於焉惣深爲專思祖承宣通兼救宗徒辛勤投輕微之涓塵幷與善之錢貨聚多少板木開七軸疏記遂置大東戒壇院者也冀摺寫數本流行萬世時明德辛未七月日戒壇院住持沙門惣融　弟輩比丘惣深謹誌

佛祖正法直傳　一冊

應永丙子孟冬下澣重命工刊行

古今韻會擧要　三十卷

應永五歲姑洗日　幹緣藤氏

權僧都聖壽重刊

三國佛法傳通緣起　三冊

戒壇示觀律師學該乎三藏智辯汗瀾焉空有性相猶庖丁之於牛也且所遺之心書凡千有餘卷焉然不出卷而投諸宗之圍域知三國之傳通者莫若乎斯書也苟從事于此者豈不云乎回千里之迷途者一呼之力也不遇於斯說則吾終昧於大方者邪所恨未約刊所所利不廣仍命工鋟板云爾

應永己卯正月　日　摠深謹書

大光明藏　三冊

應永七庚辰　資助緣　定祐　定覺

新學菩薩行要抄　一冊

新學行要雜事問答者先師貽述作後素爲軌範而末弟明空幸稟師述聊思弘宣勸助侵於同志彰文字於印板廼施盧山敎肆永傳來際學侶耳時應永七年歲次庚辰暮春初五日

幹緣比丘照珍

右筆比丘慧鏡

盧山住持比丘明空敬誌

諸偈撮要幷附錄　一冊

此版留在野州足利行道山淨因庵

應永十一年甲申小春日誌

藏乘法數　一冊

比丘靈通修禪之暇古敎照心嘗患法義有未解了而梶吾口者偶獲遂師藏乘法數若法若義瞭然在目之欲流通是書與天下學者共之今周州大先道雄居士欣然施財命工以壽于梓便覽乃知禪不異敎敎不異禪禪敎雙思而超言數之表寔有補於宗門者也

應永庚寅二月　比丘靈通謹白

無板賃

衆分韻略　五冊

應永壬辰刻梓　洛東　靈源院

大毗盧遮那成佛經疏　二十帖

應永廿一年十月三日於高野山南谷大樂院以左學頭寶性院御本令開版了

金剛資戒範　四五

融通念佛緣起　二卷

右此融通念佛勸進之繪六十餘州悉隨所望詩賦傳之令勸進給之云々此朝尤隨喜之間奉合力令開板者也願以此善願功力及父母六親眷屬同得往生無過群生平等利益矣

明德元年庚午七月八日開板　成阿判

依良鎭上人所望染筆者也

應永廿一年甲午十二月十七日

禪住坊法印權少僧都承盛

虎關和尙續禪支錄　一卷

應永二十二年乙未冬日濟北比丘令在
命工刊行　龍皐寓住比丘桂文筆之
助緣一貫文比丘種善

聖一國師年譜　一冊
應永廿四年十月十七日
主塔遠孫比丘讚岐州岐陽方秀謹識
比丘慧玄書

比丘祖芳摹緣刊于慧日常樂庵

無門和尙語錄　一冊
應永辛丑正月
於土佐國修禪寺書開板了

旱霖集　一冊
大智圓應禪師夢巖和尙編類生平禪定餘
力所作之文名曰旱霖集其徒刊布之蓋欲
使天下禪林咸知前輩立言之必有憑據也
余作一偈以贊其成之編告同志之士以遂
此事則其沽丐後學豈易量哉夢翁文學旱
天霖利物思人所潤深喜見殘骨猶未盡願
留萬古益叢林
應永壬寅佛生日　前南禪周崇謹書

念佛安心大要抄　一卷
應永三十癸卯年正月廿五日
印本右筆　天台隆堯
刻彫檀主　法印良俊

鎭州臨濟慧照禪師語錄　一冊
永享九年八月十五日
板在法性寺東經所

大毗盧遮那成佛神變加持經　七卷
右經王七軸印板膺帥主權僧正十三回之
忌辰鏤梓而置此於東寺西院冀以此無盡

莊嚴之法文資彼三覺圓滿之菩提亦望續
密藏於三會救群生於彼岸矣
時嘉吉元年辛酉六月十五日
權律師覺增謹識

仁王護國般若波羅蜜多經　二帖
東寺西院根本版依朽損文安元年甲子四
月重刊
奉行　權律師覺增

金剛頂瑜伽經　三帖
文安甲子極月　日開板
金剛佛子覺增

地藏菩薩本願經　二帖
寶德四年二月九日開板

般若波羅蜜多心經幽贊添改科
京齋等諸大法師先製溥陽比丘守千添改
寬喜三年辛卯十月日依慈母禪尼性如之
遺言敬彫此模於廻向者併任幽靈所願而
已
願主　藤原氏女

此模奧板一枚失墜之間爲六方沙汰刻彫
之　寬正二年辛巳十月　日

御和讚　四帖
右斯三帖和讚幷正信偈四帖一部者末代
爲興隆板木開之者也而已
文明五年癸巳三月

大學章句　一卷
文明龍集辛丑夏六月左衛門尉平氏伊地
知□重貞命工鏤梓於薩州鹿兒島

大樂金剛不空眞實三麼耶般若波羅蜜多理
趣經　一卷
文明十三年辛丑十月廿五日

梵漢博士權少僧都看範書之七十一
文明十五年癸卯八月十八日

勢州栗眞白子觀音寺常住爲二親菩提
權律師實政開之三十八廻此功德普利
一切衆生界

聚分韻畧　五冊
文明丙午刻梓　　濃之南豐大成

淨土略頌
勸進專心追善志刻彫二藏頌文字欲弘眞
宗聖教故企斯板在淨教寺
文明十九年丁未正月
勸化比丘行譽筆

鎭州臨濟慧照禪師語錄　一冊
延德三年辛亥八月十五日
季恭博士鏤梓捨入濃之正法栖雲院

大學章句　一卷
文明龍集辛丑夏六月左衛門尉平氏伊地
知□重貞命工鏤梓於薩州鹿兒島
延德壬子孟冬桂樹禪院再刊

聚分韻畧　五冊
明應癸丑周陽眞樂軒新鏤板

三體詩註　三冊
明應甲寅之秋新板畢工矣先是舊刻之在
京師者散失于丁亥之亂以故捐貲刊行焉
置板於萬年廣德云
葉巢子敬誌

此書の再揚本には左の文を添ふ再揚の年代を記さゝるも大永の頃なるべし。

此板流傳自京至於泉南阿佐井野宗禎
購以置之於家塾也欲印摺之輩以待方
來矣

妙法蓮華經觀世音菩薩普門品　一卷
右此經者傳敎大師御筆以令開板之
願主御留主總政所座禪院
權大僧都昌源

明應五年丙辰六月

妙法蓮華經（此經板木六十四面甲州都留郡藤波村妙樂寺に在るよし祕藏草に見ゆ）八卷
此卷施主平信長此板留在甲州都盧郡德
藏山妙樂禪寺諸化緣若干人
明應六年霜月　日　　化主源清
豆州三島府住吉久刀

論語集解　五冊
今玆一書夫子之遺書而漢朝諸儒所註解
也寔是五經之軌轍六藝之喉衿也天下爲
民生者豈不仰其德矣哉
明應龍集己未仲秋良日

聚分韻畧　一冊
聚分韻畧啓童蒙之書也然平上去入難卒
分之或列四聲以備一目蓋俾人易解也因
鏤于板置諸東山春雲軒伏冀不即文字不
離以極禪河敎海
永正元年歲舍甲子八月初吉
西周平　武道敬重刊

藥師瑠璃光如來本願功德經　一卷
奉開藥師本願經形木合五枚新藥師寺常
住
右此板木當初雖在于當寺歷年序文字磨
滅不能摺寫依之時々再興之念願歲重而
自去文明年中新彫之事企之雖然貧乏之
至成立不急不覺年月移行頗□本意之間
尙勵再興之懇志拂瓢底遂令終其功畢冀

現世者殊蒙第七誓願當來有示其道路金言不誤自他同往生極樂矣

永正二年二月　日　本願舜清

盂蘭盆經疏新記　二冊

永正乙丑之歲　比丘守懌命工鏤版置

古文尚書孔氏傳　十三卷

此書元亨二年版の覆刻なり沙門素慶跋文の次行に

永正三丙酉年陽月吉旦刊行健齋刀

古文尚書孔氏傳　十三卷

永正十一年　清原朝臣顯言

妙法蓮華經　八卷

發護特正法　利樂有情願　窺盡未來際

彫量法華模　庶衆人摺寫　廣流布諸國

新興法利生　自他共成佛

多武峯絹益寺法花經板木也

永正十六年己卯九月日　願主英宗

醫書大全　十冊

吾邦以儒釋書鏤板者往々有焉未曾及醫方惠民之澤人皆爲鮮近世醫書大全自大明來固醫家至寶也所憾其本稍少欲見而未見者多矣泉南阿佐井野宗瑞捨財刊行彼明本有三寫之謬今就諸家考本方以正斤兩雖一毫髮私不增損盖宗瑞之志不爲利而在救濟天下人偉哉陰德之報永及子孫矣

大永八年戊子七月吉日　幻雲壽桂誌

韻鏡　一冊

韻鏡之書行於本邦久而未有刊者故轉寫

之訛烏而焉焉而馬覽者多困彼此不一泉南宗仲論師偶訂諸本善不善者且從且改因命工鏤板期其歸一以便於覽者且曰非敢擴之天下聊備家訓而已於戲今日家書乃天下書也學者思旃

享祿戊子孟冬初一日　正三位行侍從臣清原宣賢

御成敗式目　一冊

此書廼万代不易之法也故加清家點以重鋟梓矣盖爲俾未愚蒙輩易讀也苟易讀則通理速通理速則犯法者稍少豈非師道少補乎抑鄉有先生村有夫子而時習之學日新予寧爲之哉博雅君子庶幾諒察焉

享祿己丑秋八月　日　從四位下行左大史兼算博士

聚分韻略　一冊　小槻宿禰伊治

作者宥圓

享祿庚寅刻梓　筆者秀篤

日陽眞行院

八十一難經圖（難經俗解）　一冊

越前州一乘谷之艮位一里許有山田高尾其麓有寺人號曰高尾寺寺有堂客以醫王善逝尊像太守日下氏宗淳公俾一柏老人校正熊宗立所解八十一難經之文字白讀而募工鏤梓以置於本堂善醫國救民之意歟

時天文五年丙申九月九日　釋尊藝

論語集解　二冊（此書集解を題すれども本文のみ記せるものなり）

泉南有佳士厥名曰阿佐井野一日謂予云

東京魯論之板者天下寶也雖然而丙丁厄而灰燼矣是可忍乎今要得家本以重鏤梓若何予云善按　應神天皇御宇典經始來繼體天皇御宇五經重來自爾以降吾朝儒家所講習之本藏諸秘府傳於叔世也蓋唐本有古今之異乎家本有損益之失乎年代遠寖不可獲而測遂撰累葉的本以付與庶幾博雅君子糾焉

天文癸巳八月乙亥

金紫光祿大夫拾遺

清原朝臣宣賢法名宗尤

貞永式目鈔　二冊

以祖父常忠御說先年令抄出之處局務外央業資盜取之間重令抄出之以此本爲證一子之外不可許一覽而已

天文三年閏正月廿八日終其功

清三位入道環翠軒宗尤判

此書天文の年號あれど慶長年間の開版なるべし

三重韻（粟分韻畧）　一冊

三韻一覽實於世之書也凡於遊藝工於詞之士未嘗無取焉信手開卷三聲之字條次於一紙之上平仄之異粲然於一目之中古之人五行俱下十行並下之說未必有蹤此不亦快乎余平素有意於勸人蓄之故不待其桐梓之朽腐乃復命工新其刊矣庶爲是州廳本乎然而小其字於舊板冊子亦短其紙盖所以備於勤于熟覽者之藏於巾箱携於袖間也若夫與舊本同施敷於世光飾藝苑潤色詞林則所謂經寸之珠不失寶於其形之小者也矣

時天文八年己亥春三月　日

正四位下太宰大貳兼兵部權大輔

周防介臣多々良朝臣義隆

四體千字文　一冊

夫附言增廣古文眞草行凡四千字爲誨童蒙合他力刻諸梓以傳世矣

紫陽日州田島莊弓削雅樂入道交雲居士謹置

天文十九庚戌歲秋八月望日

淨土略名目圖　一卷

夫名目圖者去永正着雍執徐雖鏤梓遭世亂雜灰燼焉爰先師肇譽上人觸三十三回之忌辰而爲報恩攸重刊已矣遺弟比丘洛陽東山知恩第廿七世主翁燈譽八十一載書于時天文二十一年壬子南呂望書

大樂金剛不空眞實三摩耶　般若波羅蜜多理趣經　一卷

爲現當來世悉地圓滿師長父母六親眷屬七世四恩一切含識平等無差也

願主　和州釜口成就院舜範開之

天文二十四年乙卯七月十五日

韻鏡　一冊

享祿版の重校正本にして原版跋次に頃間求得宋慶元丁巳張氏所刊之的本而重校正とありて

永祿第七歲舍甲子春壬子

と白字にて記せり

金剛頂經金剛界大道場毘盧遮那如來自受用身內證智眷屬法身異名佛最上乘秘密三摩地禮懺文　一卷

禮懺廿卷奉寄進八幡宮理趣三昧中者也

右志趣者相迎悲母妙壽禪定尼卅三廻忌

仐摺寫此眞文處如件

元龜四曆癸酉六月六日

施主　惣持院英海

四體千字文書法　一冊（眞草篆隸四體千字文）

此板泉州大鳥郡堺南庄石屋町住石部了冊入道新刊巧極妙字迫眞奇哉

于時天正二年六月吉辰

宿蘆齋書焉

庭訓往來　四帖

右四冊者爲本嶋與一手跡稽古染拙毫者也

天正八年暮秋　彌與門板

三敎指歸　一帖

爲奉報高祖鴻恩閣諸事開此印板耳

天正庚辰仲秋日　勸進　沙門高野山榮泉

辨證配劑醫燈　二冊

斯一冊予既及頽齡故强勉而啓秘記要而即爲門生以老音爲泉州松山好春公詳使講授焉終一覽而染老筆畢

于時天正十二年秋日　洛下翠竹院　一溪溾道三

此書天正の年號あれど其刊行は慶長年間なるべし

三部經音義　二卷

天正十八歲次庚寅暮春上澣　和州之住侶鎭西汲流野僧珠光草錄

此書天正の年號あれど其刊行は慶長年間なるべし

仁王護國般若波羅蜜多經　二卷

天正十八年三月　重梓

節用集　二冊

右此板木者泉州大鳥郡堺南庄石屋町經師屋有是石部了冊

于時天正十八年庚寅履端吉辰

和風安心抄　二冊

于時天正廿年二月二日進上之

越前國大原山西福寺三五世道殘

此書天正の年號あれど慶長年間の刊行なるべし

○五山版書目　附刊年不詳博多版書目

室町時代開版の書籍にして開版の年月を記さざるもの頗る多し世俗之を總括して五山版と稱す蓋し是等書籍の大部分は京都臨濟の五大寺並に其系統をひける諸寺の開版にかゝるを以てなり今俗稱に從ひて特に此題目を置き刊行年月を記さざるも當時代に梓行せられしと推定せらるゝ書名を列擧し其版式を略記する事とせり

毛詩鄭箋　二十卷

卷首毛詩卷第一周南關雎詁訓傳第一毛詩國風鄭氏箋と題す序跋共になし左右雙邊界長六寸四分餘幅四寸二分毎半版六行行十六字注雙行行十六字

音注孟子　十四卷

左右雙邊界長六寸一分毎半版　行行十八字注雙行行二十七字宋槧本の覆刻に

して桓徽等の文字に闕筆あり

爾雅　三卷

晉郭璞注界長七寸五分幅五寸四分毎半版八行行十六字注雙行行二十一字宋槧本の覆刻にして書中敬弘玄朗貞等の文字に闕筆あり

注千字文　三卷

經籍訪古志に首題「新板增廣附音釋文千字文注」其注與「前諸本（舊鈔本ふ云）」不「同疑宋元間人所「撰相「板式」當「是應永前後刻本」開崇蘭館藏元刊本恐是本所「原」とあれど未だ見ず

增修互註禮部韻畧　五卷

元至正乙未の刊本を覆刻せるもの第五卷の欄外に日本永春刀と彫工の署名あり

新編排韻增益事類氏族大全　十卷

四周單邊界長六寸幅四寸毎半版十六行行二十八字

歷代帝王編年圖　一卷

卷首熙寧九年會稽鄉貢進士虞云の序あり四周雙邊界長六寸三分幅四寸一分毎半版九行或十行字數一定せず宋槧本の覆刻にして書中殷匡敬等の文字に闕筆あり

又一本

序並に版式行款闕筆に至るまで前書と異ならずたゞ欄外に本朝の年紀を標記せるの差あるのみ

立齋先生標題註釋十八史畧　七卷

卷末明正統辛酉孟夏書林余氏新刊の記あり即ち明版を覆刻せるもの毎半版十二行行二十四字界長七寸三分幅六寸

唐才子傳　十卷

西域辛文房撰左右雙邊界長七寸幅五寸毎半版十二行行二十二字

重新點校附音增注蒙求　三卷

卷首薦蒙求表及李華の序卷尾龍歲甲丙季日孟榮拜題謹置誌之とあり左右或四周雙邊界長五寸七分幅四寸一分毎半版十行題目及本文は併二行大書注毎行二十字

韻府群玉　二十卷

卷首滕賓姚雲趙孟頫陰竹野等の各序及陰復春陰勁弦等の二序目錄末に元統甲戌春梅溪書院刊木記あり界長六寸九分幅四寸四分毎半版十行行十五字注雙行行二十九字

列子鬳齋口義　二卷

卷首列子序（劉向校上記）次に列子小傳を附す左右雙邊界長六寸四分幅四寸一分毎半版十行行二十一字

冷齋夜話　十卷

左右雙邊界長六寸二分幅四寸二分餘毎半版九行行十八字卷八末に陰文魚鳥の圖あり

聯新事備詩學大成　三十卷

四周雙邊界長六寸五分幅四寸一分毎半版十三行字數一定せず卷之一末に至正乙未孟春翠巖精舍新刊記あり

北磵詩文集　十九卷

卷首嘉定丁丑張自明の序卷尾應永甲宍僧祖應の跋あり左右雙邊界長七寸四分幅四寸九分每半版十四行行二十四字

重刊 貞和類聚祖苑聯芳集　十卷

卷末編者釋周信の跋あり左右雙邊界長六寸七分幅四寸八分每半版十二行行二十三字

皇元風雅集　十二卷

卷首至元二年虞集伯生の題辭あり界長五寸六分幅三寸八分每半版十三行行二十一字

増注 唐賢三體詩法　三卷

左右雙邊界長六寸七分幅四寸五分每半版十行行二十二字是を正統元年刊の朝鮮本と比するに其體式行款毫も異ならざるより見れば同韓本を覆刻せしものなるべし

唐朝四賢精詩　四卷

每半版十一行行二十字界長五寸六分乃至八九分幅三寸六七分版式宋槧本に似たり

中州集　十卷

卷末編者元好問の跋あり左右雙邊界長六寸六分幅四寸二分每半版十五行行二十八字

新板廣增附音釋文 胡曾詩注　一卷

盧陵胡元質注界長五寸八分幅四寸一分每半版十行行十六字注單行行二十字

碧山堂集　五卷

左右雙邊界長六寸四分幅四寸一分每半版十行行二十字

集千家注批點 杜工部集　二十卷

卷首大德癸卯劉將孫の序あり目錄末に雲衢會文堂戊申孟冬刊木記あれば元槧本を覆雕せしや明かなり每半版十四行行二十四字或五六字界長七寸二分幅四寸六分

集千家類分 杜工部詩　十五卷

卷首東萊徐居仁編と題す每半版十一行行二十一字千家注分類本により本文を單錄せるものなり

王狀元集百家注分類 東坡先生詩　二十五卷

左右雙邊界長六寸六分幅四寸三分每半版十一行行十九字元槧本の覆刻なり

山谷詩注　二十卷

卷首紹興乙亥鄱陽許尹の叙あり左右雙邊界長七寸二分幅五寸四分餘每半版九行行十六字注雙行行十六字宋槧本の覆刻なり

魁本大字諸儒箋解 古文眞寶後集　十卷

左右雙邊界長五寸六分乃至八九分幅三寸六七分每半版十一行行二十一字明初刊本の覆刻なり

鐔津文集　二十卷

四周雙邊界長五寸八分幅四寸八分每半版十行行十八字宋槧本の覆刻歟

翻譯名義集　七卷

卷首大德辛丑普洽所述普潤大師行業記及紹興丁丑周敦義の序あり四周或左右

雙邊每半版大字五行小字十行行二十字

興禪記　一卷

卷首幹線比丘瑞川記あり左右雙邊界長六寸二分幅四寸一分每半版十行行十八字

僧寶正續傳　七卷

左右雙邊或四周單邊界長五寸五分幅三寸七分每半版十行行二十字

釋氏要覽　三卷

釋道誠撰天禧四載崔育材の序及卷首に功德主仙林住山壇主愚極卷尾に杭州仙林寺彫造記あり左右雙邊界長六寸四分幅四寸九分每半版大字七行行十一字小字十四行行二十二字

勅修百丈清規　一卷

至元四年撰者德輝の自跋あり左右雙邊界長七寸幅四寸八分每半版十三行行廿三字

祖庭事苑　八卷

左右雙邊或四周單邊界長五寸九分幅四寸二分每半版大字五行注雙行行十六字

禪門寶訓集　二卷

左右雙邊界長五寸六分幅四寸九分每半版十一行行二十四字

人天寶鑑　一卷

卷首詔定庚寅劉棐の序及詔定三年編者沙門曇秀の自序あり四周或左右雙邊界長六寸七分幅四寸八分每半版十行行二十字

續叢林公論　一卷

釋梵僊撰卷尾助刊僧居迪等外十人の名を列す左右雙邊界長六寸一分幅四寸四分每半版十二行行二十二三字

感山雲臥紀談　二卷

左右雙邊界長六寸一分幅四寸三分每半版十一行行二十字貞和二年刊本と比するに全く異版なり

佛果圓悟禪師碧巖錄　十卷

卷首抗州北橋北街東嶼中張氏書隱印行及本朝濃州路瑞龍禪寺新刊記あり次に建炎戊申普照の序外三種卷尾宣和乙巳關友無黨の後序外四種あり每卷尾嶼中張氏書隱刻梓とあれば此書元槧本を室町末期美濃國瑞龍寺にて覆刻せしものなるべし四周單邊又左右雙邊界長六寸幅三寸八分每半版十一行行二十一字

禪儀外文集　一卷

卷首康永元年編者虎關和尙の自序あり左右雙邊界長六寸四分幅三寸九分每半版十一行行二十二字寬永活字本の藍本なり

獨庵外集續藁　五卷

卷尾獨庵の識語あり四周雙邊界長六寸三分幅四寸五分每半版十一行行二十一字

大慧普覺禪師宗門武庫　一卷

卷首淳熙丙午李詠の序あり左右雙邊界長六寸二分幅四寸七分每半版十一行行二十字

藏叟摘藁　一卷

左右雙邊界長六寸四分幅四寸四分毎半版十一行行十八字

一山國師語錄一名大雲錄　一卷

文保元年後宇多帝御製の跋並に元亨元年虎關和尚の行記あり左右雙邊界長五寸九分幅三寸八分毎半版十一行行二十字

運庵和尚語錄　一卷

左右雙邊或四周單邊界長六寸三分幅四寸二分毎半版十行行十八字

雲谷和尚語錄　一卷

四周單邊界長六寸四分幅四寸三分毎半版十行行二十字戊辰九月無名氏の序あり

虛堂和尚語錄　一卷

四周雙邊界長七寸五分幅五寸七分毎半版八行行十七字

大明禪寺開山月庵和尚語錄　一卷

左右雙邊界長六寸四分幅四寸六分毎半版十一行行二十字卷尾明德二年幹緣比丘正鋭記及應永十年月庵和尚行狀記あり

枯崖和尚漫錄　三卷

咸淳八年紹隆及陳叔震の序あり四周雙邊界長六寸六分幅四寸毎半版十行行二十字

兀庵錄　一卷

覆元本四周雙邊界長六寸四分幅四寸二分毎半版十一行行二十字卷尾小師景用命工鋟板と移刻せり

松源和尚語錄　二卷

卷首嘉泰三年回庵譙令憲の序卷尾嘉泰癸亥孟獻及慶如の後序あり左右雙邊界長五寸九分幅四寸毎半版十行行十九字

聖一國師住東福寺語錄　一卷

卷首元德三年釋師練の序あり左右雙邊界長六寸六分幅四寸七分毎半版十一行行二十字

笑隱和尚語錄　一卷

左右雙邊或四周單邊界長六寸三分幅三寸九分毎半版五行注雙行行十六字

石谿語錄　一卷

四周單邊界長六寸一分幅四寸毎半版十一行行二十字宋槧本覆刻

全室和尚語錄　三卷

四周雙邊界長五寸九分幅三寸九分毎半版十一行行二十字卷之二末に比丘絶海助刊記あり

大川和尚語錄　一卷

宋槧本覆刻左右雙邊界長六寸幅四寸毎半版十行行二十字

天目中峯和尚普應國師法語　一卷

左右雙邊界長五寸五分幅四寸七分毎半版十行行十八字

北磵和尚語錄　一卷

淳祐十二年劉震孫等の序及秋房樓治の跋無年記應安三年無名氏の跋あり四周雙邊界長六寸七分幅四寸三分毎半版十行行二十字

密庵和尚語錄　一卷

卷首淳熙十五年張鎡の序卷尾參學約齋居士助錢壹佰貫開版の記あり左右雙邊界長五寸九分幅三寸八分每半版十一行行二十字

明覺禪師語錄　三卷

開禧元年雪竇寺德雲の序あり四周單邊或左右雙邊界長六寸幅四寸一分每半版十一行行二十字

察病指南　三卷

卷首淳祐丙午趙崇賀の序及淳祐改元施發の自序あり每半版十行行十九字界長七寸五分幅五寸六分宋槧本覆刻

○博多版

春秋經傳集解　三十卷

左右雙邊界長七寸幅五寸每半版八行行十七字注雙行其體式韓文に等し

五百家注音辯昌黎先生集　四十卷

左右雙邊界長七寸二分幅五寸七分每半版十行行十八字注雙行行二十三字其體式柳文（嘉慶元年會貞甫所刻）に等し

○桃山及江戸時代

○征韓役と印版界の新事業○本朝活字版の濫觴に就ての異說○支那活字版の創造及其沿革○朝鮮活字版の沿革○朝鮮より活刷法の傳來及其年代○本朝活字版の濫觴——古文孝經○後陽成帝の勅版○後水尾帝の勅版○勅版銅活字○駿河版（一に駿府本）——伏見開版の木活字版——圓光字活字——開版監督者閑室和尙傳——駿河木活字版と慈眼と——駿府開版の銅活字版——大藏一覽開版始末——羣書治要開版の部數——南葵文庫現存書治要開版始末——羣書治要開版の勃興並に慶長私版の先驅をなせし銅活字○開版事業の沿革——易林本節用集——節用集開版の沿革二書——南庵版彙求——易林本節用集——節用集開版の沿革——易林と朝山意林庵と——饅頭屋本節用集——饅頭屋の家系○直江本——本朝銅活字版の濫觴○要法寺版○角倉本（一に嵯峨本又光悅本）——角倉素庵傳——角倉本書目——角倉本と下村時房と——角倉本の版下——本朝書籍中冊子に日本畫を挿入せし濫觴並に平假名を用ひし和文書籍開版の濫觴○本朝繪畫印行の沿革○和文書籍開版の沿革○和文書籍開版の隆盛と共に活字版の衰微○當時代開版書跋錄

天文以降、足利氏の衰微に乘じ、英雄四方に割據し、中原の鹿を爭ひしも、

秀吉、信長に代りて、天下の政權を掌握せしより、世は所謂桃山の豪華時代となり、征韓の師を起し、大に國威を發揚せし時に當りて、印版界にも亦空前の新事業現れたり、卽ち活字版の實施これなり、

本朝活字版の濫觴につきての異說

本朝活字版の濫觴については、古來異說少からず、『日本書紀通證』例言（谷川士清著　延享五年刊）に

或曰、本邦印板起于元久中、而皆活板、如今刊板、則自慶長末年始

『和訓栞』（谷川士清著　安永年間刊）に

うゑじ　活板をいふ植字の義なり　土御門の元久年より始るといふ

と、これ貝原益軒の『大和事始』印板の條に基き、『學海雜談』（享保五年寫本）の印板の事其始詳ならず　土御門院元久の比かとよ　法然上人の選擇集を板に印せるよし　山門の申牒に見えたり　又夢窓國師多く佛書を印板すこともいへり　又高武藏守師直が板せし佛書もあり　其書には跋文あり　此外所々の禪刹にて刻る語錄詩集等もあるものなり　近世の印板は慶長末年節用集等に始る

とある近世の印板云々の末句を整版の始と解し、其以前は總て活版なりと誤推せるに起因せしものにして、其說の幼稚なる今より見れば一笑話柄たるに過ぎずと雖も、當時此說意外に勢力ありしと見え、『撈海一得』（鈴木喚痴著　明和八年序）に

書を板行ニスル事ハ（中略）吾國ハ土御門帝元久元年ヨリ始ルト始メハ活板ナリ

『橘庵漫筆』（田宮仲宣著　享和元年刊）に

本朝にて印板せしは法然上人の選擇集を元久の頃板行せし由山門の申狀に見へたりとかや　足利學校の活字板往々に見へたり　夢窓國師の書を高師直板行せしも活板なり　今の板行は慶長の末より始りて連綿たり

との繼承者を出せしのみならず、博學なる山岡明阿彌をして本朝にて書籍を印板せし事は元久の比に始るされども活板にて有しを刊板の始りしは慶長の末よりこそ始りしといふ此說今思ふにしからず　淺明が家に藏る古本の韻鏡あり　享祿元年戊子孟冬初一日とあれば今年明和元年に至りて二百四十年なり　後奈良帝の卽位の

明年迄室町家は義晴公の時にあたれり慶長元年丙申までは六十九年先の事なり元久は謙倉の時なればいまだ定かなる事考へず『類聚名物考――書籍』

と疑惑せしむるに至れり、此僻説に比して、やゝ研究的なるは、吉田篁墩の『活版經籍考』なりとす同書に活字版の由來を叙して

本朝に活版の行はれしこと殊に久しくして盛なりき其始て造りいだせしことはいつの時にやあるべきいまだ考ふるところあらず但室町家の中葉の頃より盛にはなりたるべし其一證をいはゞ應永の初歸化の明人某なるものありて京師にて五百家注韓柳文集を活字に刷せし本あり其ことは跋に載せたれども支干のみを題して何れの年なること知がたし予が藏に見し一本に應永七年博多僧某なるもの〻校點して題字ありし本あり是によりて七年より遡り考ればその支干正に應永三年にあたりき是中華にて明朝洪武の季年にあたれりされば前に載せたる元明に活版の事ありしを其遺法を得たる明初の人本朝に歸化して此集を刷せしぞ吾邦の權輿とやいふべき

に似たれども是よりさき南朝の正平中に和泉州堺浦道祐居士といふもの論語集解を刻せり其本中華へも傳へ至りて清の錢曾が讀書敏求記にも載せし其末に堺浦道祐居士重新命工鏤梓正平甲辰五月吉日謹誌と題す其本字畫行款第二卷に記せし六行絲欄大字の活版本と分毫を差へずこれによるに道祐自ら跋して重梓とす知るべしこの活版本は道祐が原本たることをかくのごとくむば室町氏の世より猶さきだちて起れりといふべしもしくば北條氏の時北條顯時等がごとき學を好み武州金澤の地に書院を開建し經師を延て業を講じ文庫を造置して廣く四部の籍を儲へ藏めし時の擧に出でたるもしるべからずこの活版の論語殊に多く闕左の地に存せるをもて知るべしこれを後に道祐が泉南に重鐫せし處なりやとおもへりされども確證の徴とすべきを得ずたゞこの活版が正平本の原たることは疑べくもあらざれば時をもて考ふるに北條氏の時に出たるは違べからず活版醫書大全の跋にこれよりさき儒籍を印せしかど未だ醫書を印するに及ばず醫書を印することは此書をもて始とすと

みえし是大永の頃なりきすべて是を合せ考ふれば活版は北條氏の世に起原し室町氏の時に滋盛なりとすべし猶後の考據し得るところあるを俟つ

と、而して其正平本の原本といへる六行絲欄の活字本とは、同書第二卷に

論語何晏集解十卷四册、凡二通、一通筆畫奇古稍帶徐浩李邕風格、經中道千乘之國、道字作導、注中包氏作苞氏、每葉六行、界欄間搨雲母牋者、或是金澤書院所刻成、後正平年間、道祐居士覆刻泉南之原本也、活版中是爲第一古籍矣、每卷末有經注字數、一通小字本、予昔年所見尚有數本、今不能一々記、俟續考之

と記せるものこれなり、然れどもこの原本と稱せるもの、恐らくは道祐の跋文を削去せし無跋本を活字本と誤認せしものといふべし、狩谷棭齋同書に頭書して

卿雲按六行大字本の論語は整板にして活字に非ず且此本を以て正平板の原板とするは大に非也後に正平板の顯名を削去して印出したるもの也板今傳在日本橋書肆千鍾房就檢削去顯名之鑿跟現然可見矣

『右文故事附錄』に

舊本大字者漢宦藏弆即正平道祐本也、唯無年號題名爲異、板後歷鑱去者、或據道祐重梓字以無題爲原本、有題者爲翻雕本、未詳就是、其板則全同

『正平本論語札記』に

吉田學士誤以無跋本爲正平原本、其所輯論語攷異稱舊板大字本者是也、然無跋本印板殘缺尚存于世、跋二行削去之痕隱然、則知無跋本爲後出無疑也

と、先輩既に其非を論せり、而して良甫刻する所の『柳文』及『韓文』の活字本に至りては、既に博多版の條下に於て記せしが如く、後世の翻刻にかゝる、然るに『經籍考』の文中、予が嚮に見し一本に、應永七年博多僧某なるものゝゝ校點して題字ありし本ありと記せり、これ正しく原版を指せるものにして、なほ活字版なりといふ、頗る怪むべしと雖も、思ふに篁墩所藏のもの翻刻の活字本なるより、嚮に見し原版も『經籍考』を著すに當りて記憶

を脱し、原版、翻刻版の二版あるを知らざるの結果、所藏の活字本を原版と誤認し、かく記せしものなるべし、若夫大永版『醫書大全』に至りては、筱齋の頭書にも、大永本醫書大全阿佐井野宗瑞刻にして、是も活字に非ず整板なりと駁せしが如く、明版覆刻にして整版たること寸毫も疑ふべからず、是をしも活版なりといはゝ、何をか整版といふべき。

『經籍考』につぎて、狩谷棭齋、近藤正齋等、文祿五年刊『補注蒙求』を以て本朝活字版の權輿とせし以來、皆此說に同じ、維新以後に至るまで殆ど定說となれり、

蓋し活字の起原は、支那宋朝慶曆年間に發す、畢昇の創造する所、其法『夢溪筆談』に詳なり

支那活字版の創造並に沿革

板印書籍唐人尙未盛爲之、自憑瀛王始印五經、已後典籍皆爲板本、慶曆中有布衣畢昇、又爲活版、其法用膠泥刻字、薄如錢唇、每字爲一印、火燒令堅、先設一鐵板、其上以松脂蠟和紙灰之類冒之、欲印則以一鐵範置鐵板上、乃密布字印、滿鐵範爲一板、待就火煬之、藥稍鎔則以一平板按其面則字平如砥、若止印二三本、未爲簡易、若印數千百十本、則極爲神速、常作二

鐵板印刷一板已自布字、此印者纔畢、則第二板已具、更互用之、瞬息可就、每一字皆有數印、如之也等字、每字有二十餘印、以備一板內有重復者、不用則以紙貼之、每韻爲一貼、木格貯之、有奇字素無備者、旋刻之、以草火燒、瞬息可成、不以木爲之者、木理有疎密、沾水則高下不平、兼與藥相粘不可取、不若燔土用訖、再火令藥鎔、以手拂之、其印自落、殊不沾汚、昇死、其印爲予群從所得、至今寶藏

と、文中不以木爲之者云々の句あるにより て考ふれば、畢昇初め木活字を作りしも、水に沾せば則ち高下平らざるの失敗に終り、更に經驗を重ねて膠泥活字を創造せしものなるべし、然るに此便法の發明せられしに拘らず、製法の困難なるが爲か、將た毀損し易きが爲か、世に流布して盛なるに至らず、宋元兩朝を通じて微々として振はざりし事は、該活字を以て刷せし書籍の今傳はるもの極めて稀なるを見ても明かなり、而して明朝に至り畢昇の法を利用し、初めて銅活字を製作せり、『夢餘錄』明、唐鎔著に

近時大家多鑄活字銅印、頗便于用

『金臺紀聞』明、陸深著に

近日毘陵人用銅鉛爲活字視板印尤巧便而布置間訛謬尤多

『說郛』序に

近在錫山華會通先生家翻刊銅板活字盛行於世

と、其創造者の名逸して今明かならずと雖も、弘治九年『說郛』序に近とあり、弘治十八年著作の『金臺紀聞』に近日とあれば、明朝中期成化、弘治年間に初めて製せられしが如し、而して銅活字は膠泥活字に比して、遙に永久に耐へきものなるを以て、以來世に行はれ、清朝康熙年間に至り『古今圖書集成』一万四卷の如き大部の書籍すら印行せらるゝの盛運に會し、益々隆盛の域に入らんとするの際、不幸にして活字鑄錢の厄に遭遇し、爲に一頓挫をなすに至れり、其事情は『武英殿聚珍板』五言十韻詩史臣註に

康熙年間編纂古今圖書集成刻銅字爲活版排印藏工貯之武英殿歷年既久銅字或被竊缺少司事省懼于咨適值乾隆初年京師錢貴遂請毀銅字洪鑄從之所得有限而所耗甚多已爲非計且使銅字有則今之印書不更事半功倍乎深爲惜之

とあるにて明かなり、

朝鮮活字版の沿革

木活字は夙く宋朝慶曆年間に造られしと雖も、失敗に歸して久しく中絶せしが、清朝初期に至り更に工夫を積みて、製作使用せし事は、『居易錄』（清、王士禎著康熙年間に）

慶曆中有畢爲活字版用膠泥燒成今用木刻字銅板合之

とあるにて明かなりと雖も、未だ以て治行するに至らざりしが、銅活字の一頓挫により、乾隆帝『武英殿聚珍版叢書』開版の擧あるや、輕便を主とし木活字を採用せられ、二十五万字を刻せしめ、活字版の名稱雅ならずとて、聚珍版と改稱せられしより、後益々盛に行はれて今に及べり、

飜て朝鮮活字版の變遷を見るに、其濫觴は宋畢昇の法に基くと雖も、膠泥活字の永久使用に耐へざるを以て、高麗の末葉既に銅活字の鑄造あり し事は、『高麗史』百官志に

恭讓王四年置書籍院掌鑄字印書籍有令丞

とあるを信ずべしと雖も當時國家の擾亂甚しきを以て、成功を見るに至らざりしが如し、而して太宗位に即き、永樂元年に至り内帑を出して銅活字鑄造の擧あり、韓版『大學衍義』の跋に

永樂元年春二月殿下謂左右曰、凡欲爲治必須博觀典籍、然後可以窮理正心而致修齊治平之效也、吾東方在海外、中國之書罕至、板刻之本易以殽缺、且難盡刊天下之書也、予欲範銅爲字、隨所得必就而印之、以廣其傳、誠爲無窮之利、然其供費不宜斂民、予與親勳臣僚有志者共之、庶有成乎、於是悉出內帑（中略）又出經筵古註詩書左氏傳以爲字本、自其月十有九日而始鑄數月之間多至數十万字」

と、これを支那銅活字創造の年代と比較するに、約百年以前に當れり、されば銅活字は朝鮮を以て嚆矢とすべきなり、而して朝鮮活字の沿革に至りては、韓版『陳簡齋詩集』卷尾、新鑄字跋に詳記せり、

活板之法、始於沈括、而盛於楊惟中、天下古今之書籍、無不可印、其利博矣、然其字率皆燒土而爲之、易以殘缺、而不能耐久、百載之下、誕運神智、範銅爲字、以貽永世者、其權輿於我朝乎、恭惟太宗恭定大王作之於始、而世宗莊憲大王述之於後、於是乎鑄字之精工、殆無以加矣、成於永樂癸未者謂之癸未字、成於庚子者謂之庚子字、其字本乃經筵古註詩書左氏傳等書也、今已無存焉、成於宣德甲寅、謂之甲寅字、其字本亦經筵

孝順事實爲善陰騭論語等書也、成於景泰乙亥者謂之乙亥字、姜希顏之所書、成於成化乙酉者謂之乙酉字、鄭蘭宗之所書、今方並用焉、甲辰秋八月我殿下傳旨于承政院若曰、甲寅乙亥字、極爲精好、然而字體差大、所印之書、簡帙繁重、且已歲久散落將盡、雖補鑄而用之、不類其初、乙酉字則其字不端、不可用、予欲別鑄新字、令細大疎密適宜、以印諸書、以布四方、何如、遂出內藏歐陽公集列女傳爲字本、命行上護軍臣李有仁、都承旨臣權健監其事、典籍臣李世卿、別座臣李玏、前判官臣劉用平、博士臣柳廷秀、學正臣安潤德、正字臣金石精、分左右以掌之、字之不足者、使下行司猛臣朴耕、補寫之、自是月二十四日始事、至乙巳三月日畢功、爲字大小共三十餘萬、用之以印書、明正妍妙、纍纍若貫珠焉、臣竊惟、吾東方自箕子以來、世爲文獻之邦、而與中國隔遠、典籍鮮少、幸賴我朝之列聖創物之智、用鑄字印書、凡經史子集無家不有、然而物久則壞、理之當也、癸庚之字、既不復有、甲乙之字又將刓弊、所以變通更鑄之命、不得不待於今日也、將見排印之易流布之廣、倍蓰於舊傳之千載纘而不刊也、無疑矣、嗚呼我聖上右文興化、繼述燕翼之規模其至矣哉、成化二十一年三月日嘉善大夫吏曹參判兼同知

朝鮮より活刷法の傳來並に其年代

經筵成均館事臣金宗直謹跋

と以て其一斑を知るべし、

かくの如く活版の法支那に起り、後朝鮮に傳はりしが、更に朝鮮より我國に傳來せり、即ち勅版『錦繡段』慶長二年刊跋文に

錦繡段者東皐天隱之所ㇾ編、而未ㇾ有ㇾ刊行、玆悉取ㇾ載籍文字、鏤ㇾ一字於一梓、基布諸一版印一紙縵改基布、則渠祿亦莫ㇾ不ㇾ適用、此規模頃出ㇾ朝鮮、傳達天聽、乃依ㇾ彼樣使ㇾ工摹寫焉

と以て其證左とすべし、而して其傳法の年代に至りては、『錦繡段』跋に

頃出ㇾ朝鮮

『遺老物語』小瀬甫庵著永祿以來出來初の事秀吉公御代の條に

本朝活字版の濫觴

一、一字板これは高麗入ありし故なり

と、一字版は『補註蒙求』跋にもある如く當時活字版の稱呼にして、高麗入云云は征韓の師ありしが故に、其法初めて本朝に傳來せしをいふなり、是等によりて考ふれば、文祿の役に際し、其法初めて我國に傳來せしや明かなりといふべし、而して其法に倣ひ本活字を製し、初めて印刷せられしを、文

祿二年勅版『古文孝經』一卷なりとす、『時慶卿記』に

文祿二年閏九月廿一日禁中御觸折紙アリ雖ㇾ當番ㇾ則參上候ハン考ノ字ヲ十一兩人ニ仰付撰候廿二日善衞門出候禁中參上文字ヲ撰事如ㇾ昨日ㇾ廿三日如ㇾ昨禁中へ參上板考ノ字ヲ撰及ㇾ薄暮ㇾ退日野ハ不參也廿四日如ㇾ昨禁中へ字撰ニ參候泉長老被ㇾ召文韵ヲ被ㇾ引候及ㇾ黃昏ㇾ退出十一月六日於御湯殿上六條ト兩人ニテ板校ノ字其類々ニ撰集候直ニ仰也十六日禁中請取番ニ參候內也書物ノ事雖ㇾ仰重而無ㇾ其儀ㇾ候（中略）伯飛中將西園寺等語候古文孝經ノ板出來候上ヨリ被ㇾ見下候十二月八日自禁中孝經印本拜領長橋迄御禮ニ參上今度板校ヲ被ㇾ起候本也

と、これ實に本朝活字版の權輿といふべし、然れども此以前に於て密に活刷法の傳來せし事なきに非ず、現に『論語』『韻鏡』等の活字本にして文祿以前刊行のものと推定せらるゝものあり、而して尙孝經を權輿といふ以上の事其年代、事跡、書に徵すべからざるを以てなり、

『右文故事』に『錦繡段』を以て慶長勅版の權輿とせるは、其以前に『古文孝經』の開版ありしを知らざりしよりの誤なり、されば名は慶長勅版といふ

爲爾惜居諸　恩義有相奪　作詩勸躊躇

命工毎一梓鏤一字慕布之一版印之

此法出朝鮮甚無不便因茲摸寫此書

慶長二年八月下澣

後陽成帝の勅版

へども實は文祿に發せるものにして、『古文孝經』は本朝活字版の濫觴たると共に又慶長勅版の權輿といふべし、

後陽成帝天資英敏、頗る意を文學に注ぎ給ひ、典籍の流布少きを慨して梓行の叡慮あり、朝鮮より活刷法の傳來せしを機とし、其法に倣ひて木活字を製せしめ、侍臣及僧侶に命じて『古文孝經』を初め『錦繡段』『勸學文』『日本書紀神代卷』『職原鈔』『四書』『五妃曲』『陰虛本病』等を梓行せしめ給ふ、是等の書や、開版部數各二百部を超えざるを以て、今傳はるもの極めて稀なり、されば世に慶長勅版本と稱して、好事家に十襲珍藏せらるゝもゆへありといふべし、

勅版中『神代卷』は、其題簽後陽成帝の宸筆なりといふ、『好古日錄』藤井貞幹著寛政九年刊に

神代卷二冊俗傳テ勅版ト稱シ元龜帝ノ刻マセ玉フト云アリ正保帝ノ下鴨鴨脚某ヘ恩賜ノ本モ此印本ナリ今ニ其家ニ傳フ簽ハ即元龜帝ノ宸翰也

と、此說非なり、元龜帝は即ち正親町天皇にして、文祿二年に崩じ給ひしな

爲爾惜居諸　恩義有相奪　作詩勸蹔躋

命工每一梓鏤一字基布之一版印之

此法出朝鮮甚無不便因茲摸寫此書

慶長二年八月下澣

勅版神代巻題簽 傳云後陽成帝宸筆

新刊
日本書紀 神代 上下

九年刊に
神代巻二冊俗傳テ勅版ト稱シ元龜帝ノ刻マセ玉フト云アリ正保帝
ノ下鴨鴨脚某へ恩賜ノ本モ此印本ナリ今ニ其家ニ傳フ簽ハ即元龜
帝ノ宸翰也
と、此說非なり、元龜帝は即ち正親町天皇にして、文祿二年に崩じ給ひしな

れば、慶長四年梓行の『神代巻』を刻ませ給ふ理由なく、且俗傳へて勅版と稱すとあれど、其俗傳ならざる證は同書跋に陛下遂命鳩工と見え、慶長十五年三白が重刊本にも、右の跋を載せて首に御本と題し、尾に以勅本版行とあるを以て證とすべしと、正齋の駁せしは至言といふべし、而して題簽を元龜帝の宸翰といへるは、元龜帝の刻ませ給ふと思惟せしより起りし誤謬なり、又『慶長勅版考』近藤守重著に

長恨歌琵琶行合刊一冊　守重云此本又彫造の歳月序跋なし世に後陽成帝の勅版と云傳ふ

とあれど、こは慶長八年『白氏文集』中より上陽人、陵園妾、李夫人、王昭君詩、長恨歌傳等の五種を選跋し給ひ、『五妃曲』と命名し梓行せしめ給ひしものを誤りしなり、『慶長日件錄』慶長八年の條に

正月廿一日戊寅朝微雪晴巳刻參內白氏文集之中上陽人陵園妾李夫人王昭君詩四五首長恨歌傳等五妃曲ト名テ被選拔以一字板百部被新摺細工之衆ニ予申渡者也

『言經卿記』慶長八年の條に

四月一日丁亥天晴禁中ヨリ白氏五妃曲（上陽人李夫人陵園妾長恨歌傳王昭君等也）一冊被拜領了忝者也

とあるにて知るべし、

後水尾帝の勅版

後水尾帝先帝の叡旨を繼ぎ、元和七年に至り銅活字を鑄造せしめ、『皇宋事實類苑』十五冊を開版せしめ給ふ、此書や宋本廡沙版（『通雅』に廡沙印本之（初出未レ精者也、『天祿琳琅書目』卷首御製に、二坊私版官三舍と、其注に祝穆云建寧崇化廡沙、二坊號圖書之府、今所レ藏有二建本廡沙本一、蓋宋時坊書其藍本則官版也）を翻刻せるものにして、勅版銅活字版の濫觴たると共に、其最後の開版にかゝるものなり、凡銅活字は木活字の如く毀損腐朽の虞なきを以て、永久に使用するの目的に出づるものなり然るに事是に反し『類苑』を印刷せし銅活字のみならず、駿河版中『大藏一覽』『群書治要』を印刷せし銅活字も、皆一度にして廢棄せらるゝに至りしは、正齋說の如く單に使用の不便なるが爲のみにあらざるべし、蓋し『皇宋事實類苑』は勅版の最終なるとひとしく、『大藏一覽』『群書治要』も亦駿河版中最後の開版なり、若し單に銅活字使用の不便なるに止まるとせば、木活字或は整版を以て之に易るも可なり、然るにこの一擧手の勞をなさずして、以後絶て開版の擧なきより考

勅版銅活字

れば、慶長以來勅版及駿河版開版の擧に刺激せられたると、時代の要求とにより、坊刻盛に行はれたる結果、典籍流布の目的より起りし勅版及駿河版は、今や其必要を認めざるを以て、かく廢棄せらるゝに至りしものといふべし、

かく廢棄せられし『類苑』使用の銅活字は、明和年間迄現存せし事は、『橘窓自語』（橋本經亮著に

官庫に銅版の活字版あり（原）如此のかたちなり寶永の火事までは俵に入て御春屋とて米藏ありそこに收めて有しが寶永にやけたりしかど銅版なれば燒損せざればとり集めて長櫃にをさめて文庫に入られたり我おぼえて取いだされて大學論語などを摺されし事あり伏原宣光卿ものし給ひしにかゝづらいて字をうゑし事有しなり

『類聚名物考』（山岡浚明著、寫に

後水尾院の宣旨にて銅の活字をつくらしめ給ひて是もなにくれと摺らせ給ひき是は駿河のよりは文字小し今の世にも二ツながらたまたま殘りて有事ぞかし皇朝類苑などにも有ものなり或人の云こ

の活字今は京の賀茂に有て祭の時の出鉾の下のおもりにすといへりかますといふ物にいくらばかりとや有しといひきが忘れたりよくきゝ正すべし

とあるにて明かなれども今其所在詳ならず、

駿河版（一に駿府本）

家康幕府を江戸に開きしより、天下を治むるには文學奬勵の必要なるを感じ、伏見に學校を興し、閑室和尚をしてこれが主宰たらしむると共に、後陽成帝の叡慮を繼述し、木活字十万餘を刻せしめて學校に下賜し、『孔子家語』『六韜』『三略』『貞觀政要』『東鑑』『周易』『七書』等を開版せしめしが、晩年更に駿府に於て、道春崇傳等を監督として銅活字を補鑄せしめ『大藏一覽』『群書治要』等開版の擧あり、世に之を駿河版或は駿府本と稱す家康晩年駿河靜岡の居城に在りしを以てなり、

伏見開版の木活字

『圓光寺由緒書』に

一當寺開山閑室佶長老は別號三要と申候元來足利學校之住職相勤候處東照宮樣被召出於京都幷伏見御側にて御用被仰付慶長年中於伏見圓光寺新規に御取立被遊上方之學校に被仰付寺領貳百石山城

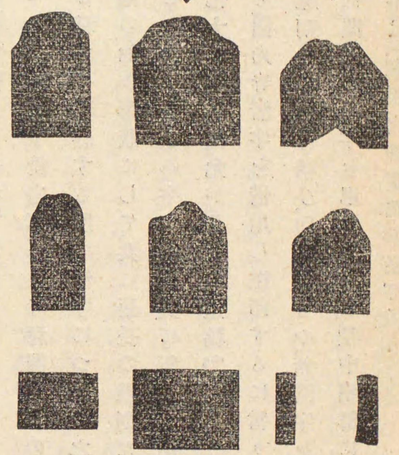
國朱雀村同吉祥院村之内にて被下置則御書判頂戴幷植字判木拾万字餘拜領仕以上意孔子家語貞觀政要武經七書等之書籍開板仕候事

一蒙東照宮樣上意上方寺社奉行三要勤候其後伏見より京都相國寺境内へ寺引移候爲地子相國寺へ高九石三斗被下置借地にて有之候事

圓光寺活字

一從東照宮樣御書籍二百部被下置候事

と、此活字今尙傳へて京都府下愛宕郡一乘寺村圓光寺の庫裏に在り、世に之を圓光寺活字と稱す、今現存する所の活字につきて之を見るに凡二種あり、內一種は左圖の如き形狀にして、共に慶長の雕刻たる事明かなりと雖も、他に一種形こそ異ならざれ、字體木質共に新しく、遙に後代になりしものあり、これ文化十二年皆川允が先考の遺稿『淇園文集』『遷史戾柁』等を開版せんとして、圓光寺活字を借用し撫印するに當り、文字の不足甚しきにより、新たに雕刻して之を補ひ、印刷終るや、新活字を混入して返納せしによる、世俗或は圓光寺活字を以て、文祿の役中朝鮮にて捕獲せしものといふ、其非なる事は『東照宮御實記附錄』に



貞觀政要孔子家語武經七書等を海內にひろくほどこされんとの盛慮にて十万餘の活字を新たに彫刻せしめて三要に給はりて刷印せしめらる

『慶長記』に

貞觀政要孔子家語武經七書ヲ梓ニ鏤メ世ニ弘ムベキ旨仰アッテ一

十万字ノ梓ニ彫セテ則閑室三要ニ給ル

『孔子家語』跋に

刻二梓文字數十万一而賜レ予

とあるにて、其說傳なるを知るべし、

駿河木活字版開版監督者閑室和尙は、肥前國小城郡の人なり、名は元佶一名三要、世に佶長老と稱す、幼にして洛の圓通寺に祝髮す、學內外を兼ね頗る奇才あり、命を以て足利學校第九世の庠主となる、嘗て東照宮の寵遇を得、金地院本光國師傳長老と共に諸寺諸社の事を總管す、五山を歷て紫衣を賜ひ、又南禪に昇り栄邑を賜ふ、關ヶ原の役に從ひ軍中に在り、常に蓍策を執て占事を告ぐ、後功勞を以て地を京師に賜ひ、寺を建て圓光と號す、以て養老の地となし、附するに田地二百石を以てす、嘗て鄉里に歸りし時、州主鍋島氏大に歸依し、爲に三岳寺を建て、閑室を以て開山とし、附するに貳百石を以てす、慶長十七年五月二十日駿府に寂す、歲六十五、

近時駿河版中『孔子家語』『貞觀政要』等を指して慈眼版と稱するものあり、これ該書末に慈眼刊之とあるより唱出せしものなるべしと雖も、慈

閑室和尙傳

駿河版と慈眼と

駿府開版の銅活字版

眼は開版者にあらずして上總產の刻版僧なり、而して卷尾に刊之と記名せるは、猶後世木版書末に彫工何某或は剞劂師何某と記せるが如し、されば此活字刻僧の名を以て是等の書に冠するは當を失せるものといふべし、若し强て異を樹んと欲せば、寧閑室版と稱し、開版監督者の功を表彰するにしかざるなり、

伏見に於ける木活字版の開版に關しては、其顚末今詳ならずと雖も、晩年駿府に於て銅活字を以て開版せしめし始末に至りては、詳細なる記錄の今傳はるを以て、明かに之を知るを得べし、蓋し駿府に於ける開版は、『大藏一覽』『群書治要』の二書にして、書中共に印行の年月を記さず、と雖も、前者は慶長二十年三月、後者は元和二年六月の開版にかゝる、之を勅版銅活字版の先頭たる『皇宋事實類苑』の開版年代と比するに、正に六年以前に當れり、『右文故事』には此『大藏一覽』を以て本朝銅活字版の權輿なりといへども誤なり、蓋しこれより先き慶長十一年に直江兼續銅活字を以て『六臣注文選』を開版せり、されば『大藏一覽』は駿河版中銅活字版の濫觴と稱すべきも、未だ我國銅活字版の權輿なりとはいふべからざるなり、

駿河（木活字版七書　慶長十一年刊）

孫子卷上

始計第一

孫子曰兵者國之大事死生之地存亡之道不可不察也故經之以五事校之以計而索其情一曰道二曰天三曰地四曰將五曰法道者令民與上同意可與之死可與之生而不畏危也天者陰陽寒暑時制也地者遠近險易廣狹死生也將者智信仁勇嚴也法者

駿河（銅活字版羣書治要　元和二年刊）

系ト七

羣書治要卷第一

孫子卷上

始計第一

孫子曰兵者國之大事死生之地存亡之道不可不察也故經之以五事校之以計而索其情一曰道二曰天三曰地四曰將五曰法道者令民與上同意可與之死可與之生而不畏危也天者陰陽寒暑時制也地者遠近險易廣狹死生也將者智信仁勇嚴也法者

羣書治要卷第一

周易

乾元亨利貞文言備也象曰天行健君子以自強不息九三君子終日乾乾夕惕若厲無咎處下體之極居上體之下純修下道則居上之德廢絕修上道則處下之禮曠故終日乾乾至于夕惕猶若厲之也九五飛龍在天利見大人不行不躍而在乎天故曰飛龍也龍德在天則大人之路亨也夫位以德興德以位叙以至德而處盛位萬物之覩不亦宜乎上九亢龍有悔彖曰大哉乾元萬

『大藏一覽』開版の始末は『駿府記』及當時開版監督者たりし崇傳の『本光國師日記』に詳なり、『駿府記』に、

慶長十九年八月六日大藏一覽傳長老獻之仰曰此書重寶也百部歟貳百部可開版幸銅字廿万字（本光國師日記には銅字合八万九千八百十四字前方より百箱に入て有之分也とあり茲に廿万とあるは其大數をいふものなるべし又云此活字は文祿役中朝鮮にて捕獲せしものなるべし）有之由被仰出云々同廿年三月廿一日今日大藏一覽版行之儀被仰出道春奉之

『本光國師日記』慶長二十年條に

大藏一覽の板行被仰出候に付物書衆六七人入申由に候貴寺臨濟寺ゟ可申旨御諚に候臨濟寺には折節無人にて漸一人從被遣由に候貴寺衆僧五六人可被成御越候則從今日奉待候爲其申入候恐惶謹言

三月廿二日　　金地院

拜呈清見寺侍衆閣下

猶々御本城西ノ丸ゟ可被差越候

請取申御扶持方之事

一合壹石八斗者
右是者大藏一覽はんぎの衆上下十八人三月廿一日ゟ同晦日迄の御
扶持方也但每日一斗八升ツヽ以上
慶長廿卯
三月廿六日

校合　壽閑在判
字ほり　台林在判
同　半右衞門在判
うへて　二兵衛在判
同　五兵衛在判
同　理兵衛在判
すりて　清兵衛在判
同　與七在判
字木切　喜左衞門在判

畔柳壽學樣參
〔うら書〕如右之面無相違八木御渡可被成候已上
慶長廿
道春

三月廿六日
畔柳壽學老

金地院

先刻得尊意忝存候然者板木者共之御扶持方之手形進候間御裏判被
遊可被遣候各忝可存候無左候得者ともまわり不申此等之者共も勇
不申候間乍御六ツヶ敷被遊候而尤存候猶以參上可申上候恐惶謹言
三月廿六日
道春在判

金地院樣
人々御中

態以次飛脚申入候此書狀東福寺之藤長老ゟ早々可被遣候物之本一
冊可參候又次飛脚にて可被成御下候是は今度當地に而大藏一覽板
被仰付候に付此方に有之本一冊字ども消候而見へ不申候故取に遣
候間爲御心得申入候次に廿八日之長持參着不申候早々可被成御下候恐惶謹言

三月晦日

板　伊州様人々御中

金地院

急度令啓達候大藏一覽貴庵に有之由返答被申候左様に候ば五之卷一冊可有御下候於當地板被仰付候此方之本五卷字共亂脫候故爲校合申入候万一貴庵に無之候ば五岳中御才覺に而可被成御下候公儀御用に候間御油斷有間敷候爲其伊賀殿迄次飛脚可申越候恐惶謹言

三月晦日

金地院

拜呈不二丈室侍衆閣下

如此認上野殿へ遣候次飛脚に而京へ遣之壽閑に西之丸に而此如かゝせ候左にあり即壽閑書を切紙にして狀に添候而不二へ遣す

大藏一覽集卷第五

自善惡門作立報應品一冊　如此

四月六日次飛脚に而伊賀殿四月三日之狀來不二四月二日之返書來大藏一覽五卷一冊來

一大藏一覽五一冊に狀添是は道春へ遣ス同月廿一日道春十六日之狀駿府ゟ來伊賀殿ゟ被屆摺手之事得上意なり同廿三日駿府道春へ狀遣ス板木之衆下候便宜

『駿府記』慶長二十年の條に

六月晦日大御所出御前殿金地院南光坊僧正智積院勸學院以下伺候今日道春新板大藏一覽十部自駿府持參御覽之處文字鮮明諸人稱美之是今度於駿府以銅字數十万（本光國師日記には銅字新舊合せて十万百八十二字とあり玆に數十万とあるは其大數をいへるものなるべし）板行百廿五部所被仰付也仰曰每一部押朱印可寄進諸寺八月十七日今日鴻巢不殘上人來府出御前大藏一覽一部拜領之

とあるにて其一斑を知るべし、而して遙に浩瀚の書なるを以て、其開版の規模亦從て大なり、『本光國師日記』元和二年之記に

急度令啓達候仍群書治要板行之儀被仰出候然ば役者御書立被仰出早々可被差下候爲其以次飛脚申入候恐惶謹言

正月十九日

板倉伊賀守殿人々御中

道春
金地院

群書治要板行に付役者人數之書立
二人木切三人彫手十人植手五人摺手三人校合以上貳拾三人
右之分被仰付早々可有御下候以上
正月十九日

道春在判
金地院在判

板倉伊賀守殿

一二月七日板伊賀殿正月晦日之狀來板木之者共以上廿人來ル也

今度板木彫可差下由被仰越候則刊手摺手之者木切以上廿人之分二

月朔日京都を罷立候然ば校合仕候者之事色々相尋候得共京都に無之由申候道春能々如存知去年も無之而不罷下候由申候不及是非候隨而道春も申候此者共罷下り候路錢無之而不成者共之儀候去年も路錢壹人に付銀貳拾匁ツヽ請取候由申候間唯今も如其申付相渡候其心得可被成候猶樣子は此者共可申候尚期後音之時候恐惶謹言

正月晦日

板　伊賀守

金地院
道春老

態以次飛脚申入候大御所樣御氣相彌被爲得御快氣候公方樣當地被成御座御機嫌能御座候御心安可被思召候仍群書治要板行之儀最前被仰出候通諸役者下府之儀被仰付候由先度御報之旨得其意存候其段令言上候此中は御煩に付而其沙汰無之處昨六日之御夜詰に重而被仰出候校合人は五山衆可呼下旨被仰出候段一山二人宛下向候樣に五山可被仰渡候板器校合之儀に候條大老も又若輩も可爲難儀候

西堂平僧之内にて其寺々にて吟味候而差下候様に被仰渡尤候恐惶謹言

二月七日　　道春判

板倉伊賀守様人々御中　　金地院判

右之狀折紙御城にて相認板倉内膳殿ゟ渡す

覺

一銅大字五万八千六百四十六
一同小字三万千百六十八
合大小字八万九千八百十四
是は前方ゟ百箱に入候而有之分也
一銅大字八千八百四十四
一同小字千五百十四
一同丁付字十
合大小壹万三百六十八
是は駿府にて大藏一覽板器之時仕立候て前方之百箱之内に加入申候
一銅卦長短合百五十四本
此内八十三本は前方ゟ有之七十一本は大藏一覽之時仕立申候
一すりばん十三面
此内五面は前方ゟ有之八面は大藏一覽の時仕立申候
一つめ木四十八本
此内貳十四本は前方ゟ有之廿四本は大藏一覽之時仕立申候
一以上罫四十四本
大藏一覽之時仕立申候
一紙打々板五枚　同斷
一木硯四ツ　同斷
一字木箱四ツ組字木入何もふたなし　同斷
一字木たんす一ツ　同斷

但字木大小五千八百八十九入
一篇返シ板八ツ　同斷
一をしごう一ツ　同斷
一すり鉢四ツ　同斷
一のみ一ツ　同斷
一かなつち一ツ　同斷
以上

右是は群書治要板器被仰付候時駿府西之丸御納戸方取出し於二三之丸一改相渡申候者也仍如レ件

元和二年丙辰
二月廿三日

畔柳壽學老㊞

群書治要板行の間御法度

一朝は卯時々罷出晩は酉刻已後可レ有二休息一事
一高談付口論等一切有レ之間敷事
一各互に勵相不レ可レ有二油斷一事
一御座敷舞臺樂屋に而私之細工仕御座敷中あらし申間敷事
一人々私之知人引に見物など入間敷事

右相定所如レ件

元和二年
三月廿三日

畔柳壽學判
道春判
金地院判

一群書治要板行之間奉行人役者衆之外無用衆出入有間敷者也

秋元但馬守判
板倉內膳正判
松平右衞門佐判
本多上野介判

二月廿三日

壽學代 都築安右衞門印
金地院內 春藏主
道春

急度令二啓達一候今度群書治要板行被二仰付一に付而鑄字之儀五官に被仰付候然ば役者三四人京ゟ呼下度由五官申候間被仰付可レ被二差下一候様子は五官以二書付一可レ申上一候次に先年圓光寺鑄字被二仰付一候時後漢書之切本殘可レ有之候間弟子衆に申可レ被下旨被二仰出一候御穿鑿候而是又可レ有二御下一候爲二其令一啓達一候恐惶謹言

二月廿五日　　道春

板倉伊賀守様人々御中　　金地院

請取申御扶持方之事

一合貳石八斗也

右是は群書治要板器之時京諸職人被下四十八二月廿三日より同廿九日迄日數七日之分は御扶持方なり但一日に一人に付而白米一升ツヽ被下候以上

元和二年　　台林判

辰二月晦日

道春印　　順唐判

金地院代　　宗運判

松首坐　　清玄判（此外已上廿人も名判有之）

仁兵衛判

喜左衛門判

源十郎判

〔うら書〕右之面々可レ有二御渡一候

畔柳壽學様

久右衛門上被申候間一書令二啓上一候

一大御所様御氣色逐日御驗氣御坐候併いまだ御膳常のごとくに上り不レ申候故おの〳〵氣遣仕候（中略）公方様御氣遣外様並下々迄も氣遣不レ大方一候（下略）

一三之丸能之芝居に而板行被仰付候廿三日ゟ取かゝり候五山衆達し御座候由唉止に御坐候片時も早く下着候様にと存候臨濟寺實大寺衆拙老同宿共も不殘出し書せ申候（下略）

二月廿九日　　金地院

板伊州樣人々御中

一二月廿九日東福寺艮西堂勝西堂下板伊賀守殿二月廿一日の狀來板器校合人早々下候との狀なり令披見道春之遣す

一三月三日板伊賀守殿二月廿九日の日付に而金地院道春之の宛所にて返事來五官より申上ヶ候鑄字の者聽て可下由の書中並圓光寺の時被仰付候鑄字の後漢書切本卅七冊是又聽て可下由の書中也何も板倉內膳より於御城夜詰の時被屆右則返書遣す

板器の衆宿の儀昨日申入候所宿見立可申入候由被仰越候彼衆今日見立申候間案內者を御添御渡候而可被下候皆々迷惑仕日々訴訟申候間御渡奉願候恐惶謹言

三月五日　　畔壽學在判

彦坂九兵衞殿　　道春在判

金地院在判

一三月十二日板伊賀殿三月六日之返書來鑄字の者五官指圖次第申付下由の書中也漢書の切本圓光寺ゟ申以上卅七冊下由也

一書令啓達候律令並群書治要貴殿被成御所持候哉從拙老內證可相尋旨御諚に候御報に示預候者御前ゟ可申上候恐惶謹言

三月十日　　金地院

直江山城守殿

道春より上意の間折紙可遣旨書狀來候間此折紙遣すなり

一書令啓達候仍群書治要四冊御同宿衆ゟ被仰付書寫候て可有御越

候今度板行被仰付候卦積八行行十七字にて候則卦料紙相添進候點も頭書も入不申候字積相定板之字植申用心迄にて候間其御心得にて急度被仰付可有御進上候爲其令啓達候恐惶謹言

三月十七日　　金地院

清見寺

道春より清見寺臨濟寺寶泰寺へ書寫に遣候樣にと書狀來候間十一、四十二、四十三、三冊臨濟寺四十四、四十五、四十六、三冊寶泰寺四十七、四十八、四十九、五十、四冊は清見寺へ遣す清見寺へ右の折紙遣す臨濟寺寶泰寺へは使僧にて申遣す道春書狀札を付目安箱へ入置

請取申御扶持方之事

合拾七石七斗は

右是は羣書治要板器付書寫校合被仰付候時被下候御扶持方也三月朔日より卯月廿九日迄日數五十九日壹人に付一日に三升宛請取申

候仍如件

元和二年

卯月廿六日

畔柳壽學老

〔うら書〕右之表可有御渡候以上

道春印　　金地院松首座印

請取申銀子之事

合壹貫目は　但大黑丁銀也

右之銀子は群書治要板行被仰付京都職人爲作料被下候也仍如件

元和二年辰四月廿五日　　台林廿人

畔柳壽學老

〔うら書〕右之表可有御渡候以上

東福寺　肖西堂　同長西堂
建仁寺　同智藏主　同保首座
相國寺　崇首座　同玄西堂
天龍寺　仙首座　同洪西堂
南禪寺　堅首座　同圭西堂

請取申銀子之事

合三百五拾目は　但大黒丁銀也

右是は　聖書治要板器之時銅字數大小壹万三千鑄立申爲御作料被下候也仍如件

元和二年辰　卯月廿六日

庄兵衛
唐人
林五官

畔柳壽學老

〔うら書〕右之表可有御渡候以上

道春印　金地院　崧首座印

當月廿三日の御連署同廿六日合拜見候板器近日相濟可申旨珍重此中各御苦勞無申斗候御次ての刻御前え具に可申上候隨而各直に可有御歸京か當地之可有御越かと御尋我等分別に御異見難成候但此度之儀は其元隙明候は先一統に御歸京も可然候哉一人二人懸拔に御下向之儀は如何と存候何樣にも於其地道春老え可被仰談候恐惶謹言

五月晦日　　金地院

拜呈　眞桑院　南昌院
勝樂軒　如天西堂
寅二堂　各位下

當月廿三日之御狀同廿六日合拜見候從是も廿四日に以書狀申入候參着可申と存候三冊不足之處先書に如申定て御年寄衆可得上意候間樣子可得仰入と存候隨て板器校合之五山衆其方又當地え可有參上御尋候拙老も差圖は難成候ケ樣之儀得上意候事不被成候儀にて先存寄の所は當年に候間各被相替候由候其上碩學衆又は先年詩文之衆と申候も今度板行校合之御人數なれば一統にても自餘の役者衆も直に被申上候得ば猶以其通に先其地方歸京候て可然候哉存候

唯今在宿之衆下向候得ば最前の番の衆殘多可レ被レ存候哉貴老御下向候て各精入候通被レ仰上レ候は其上にて仰出も可レ有レ之哉但貴老御分別次第に候恐惶謹言

五月晦日　　金地院

道春尊老　人々御中

猶以板校之衆の内二人三人ぬけがけに下向の事は猶以相殘衆のおもはくも如何候事哉御思案候て可レ被レ成二御異見一候以上

一六月十二日道春畔柳壽學六月九日之狀來候板器之諸職人廿人上候傳馬の儀如何に申來る則返書遣案左に有レ之

六月九日之御飛札同十二日令二拜見一候板器之諸職人廿人罷上に付傳馬之儀被二仰越一候最前も御年寄衆え被二仰越一候我等えの宛所も御塵候故令二披見一候只今又閑齋永喜迄も被二仰入一由に候永喜は爲二御使一御上洛之由に候定て閑齋が樣子可レ被二申入一と存候拙老儀此二三日腹中以之外相煩平臥之式に罷居候間御年寄衆え相談申儀不罷成閑齋より返書可レ有之候間可レ被レ得二其意一候此中は永々板木之儀御苦勞と奉レ察候定て當地え可レ爲二御參上一候條以面上一可レ得二御意一候恐惶謹言

六月十二日　　金地院

道春尊老

壽學尊老　尊報

一六月十三日圭西堂駿府より六月八日狀來板器頓て濟候間上洛可申との書中也

羣書治要開版の部數

と、蓋し『羣書治要』の原本とせしは、慶長十五年金澤文庫本を鎌倉の僧に謄寫せしめられしものにして、元和二年正月十九日に至り開版の命ありしが、其竣功の年月は記錄に明記なしと雖も、前記『本光國師日記』中に六月十三日（元和二年）圭西堂駿府より六月八日狀來板器頓て濟候間上洛可申云云とあれば、家康薨去二ヶ月の後に至り漸く摺板終了せしものといふべし、而して其開版の部數に至りては、古書に徵すべきものなきを以て明かならずと雖も、『寛政年間紀伊家呈案』に

羣書治要五十一部（但每部四十七册）大藏一覽五十五部（但每部十一册）右書物目錄肩書に駿河御藏より出と相認有之何頃拜領被致候哉と之儀不相分候得共駿河御藏より出と有之候得ば御讓筋と相見え申候

『有德院殿御實記附錄』に

東照宮駿府にまし〳〵ける頃興文の神慮をもて新に銅字を製せられ活字版の書籍數部を印行せられし事あり升天の後字子は紀伊家に賜ひ印本は尾紀の兩家に傳へらる公大統をつがせ給ふ後御文庫の典籍をあらためしめ給ひしに彼活字の書なかりしかばかねて紀伊家に傳へられし活版の群書治要大藏一覽をめされ御文庫に秘藏せらる

とあるより考ふれば、家康薨去倉卒の際、摺板竣功の『羣書治要』は、擧げて紀伊尾張の兩家へ讓與せられしものなる事は、『右文故事』に

尾張本考例中頒宗戚親臣ト云ヘバ今モ宗戚親臣ノ家ニ傳本アルベキニ更ニ現存スルモノヲ聞カズ

とあるのみならず、元文年間に至る迄、楓山文庫にすら一部の貯藏なきに

ても明かなるべく、而して讓與の際、恐らく紀尾兩家へ折半せられしものなれば、呈案に現存五十一部とあるより推測するに、『大藏一覽』開版の部數とひとしく、恐らく百廿五部を超えざるべし、

『治要』及『一覽』印刷の銅活字は、家康薨去後、紀伊家へ讓與せられ、駿河版開版の盛擧も茲に全く廢絕するに至れり、『御文庫書籍傳來志』に

活字の便なるを以て又新たに鑄銅活字數万を製せられ後に紀伊家に傳與せらる今に現存す

『有德院殿御實記附錄』に

升天の後字子は紀伊家に賜ひ

『紀伊家呈案』寛政年間に

一銅字印員九万餘有御讓筋之由申傳御座候

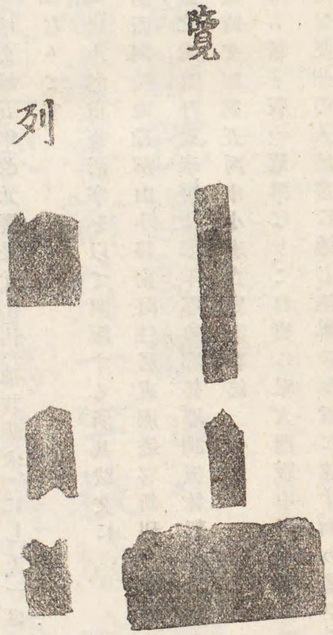
と、現今南葵文庫に傳來する所の銅活字大千餘箇、小五千五百餘箇は、即ち當時遺物の一部分に外ならず、

南葵文庫に現存せる銅活字を見るに、凡二種あり一は『本光國師日記』に所謂銅字合八万九千八百十四字、前方より百箱に入れてある分にして、

修
列
貞

書に明記なしと雖も、恐らく文祿役中朝鮮にて捕獲せしものなるべく、貞
臣の字に缺筆あり、一は『大藏一覽』及『群書治要』開版の際、林五官、庄兵衞等
に命じて補鑄せしめしものにして、其字本は共に韓版後漢書の文字を切
取りて使用せり、而して其銅質は銅と鉛と混合せる青銅（唐金）にして、其目
方大字一箇六匁、小字一箇三匁ありといふ、插圖中大藏一覽の四字は聯合
活字にして、同書の柱書に用ひしものなり、
斯の如く『群書治要』開版の竣功せしは、不幸にも家康薨去倉卒の際に

大藏一覽



列

在りしを以て、世に流布するに至らざりしが、天明元年に至り尾張大納言
宗睦之を慨し、同年六月廿五日楓山文庫に納る所の金澤文庫本を借用し、
活字本と對校せしめしものを原本とし開版を命せられしが、同五年に至
り功畢つて諸家親臣に分與せらる、而して寛政八年に至り此書唐土に亡
佚せるの故を以て、時の長崎祇役近藤重藏に五部を送り、之を唐土に送致
せん事を命ず、重藏即ち時尹中川忠英に謀りて、其の一部を長崎聖堂に、一
部を諏訪社に納め、三部を唐商館に托せり『知不足齋叢書』中、鄭註孝經序

新刊徐狀元補注蒙求卷下

相如題柱　終軍棄繻

前漢司馬相如字長卿蜀郡成都人也少好讀書學擊劍名犬子既學慕藺相如之為人更名相如以訾為郎事景帝為武騎將軍非其好也病免家貧無以自業及卓文君從奔後卓王孫分與財物為富人久之武帝召以為郎即拜為中郎將建節往使西南夷還拜相如中郎將建節往

蕭何攜撥秦治

蒙求下　九一

開版事業の勃興並に慶長私版の先駆なせし二書

甫庵版蒙求

嘉慶七年に群書治要凡五十卷唐魏鄭公撰其書久佚僅見『日本天明刻本とあ
清錢侗
れば、唐商館に托せし『治要』三部彼地に渡りて、學界に稗益を與へし事を
知るべし、

慶長以來、勅版及駿河版開版の盛擧に刺激せられたると、時代の要求と
により、印刷事業俄に勃興し、私人の開版頗る多く枚擧に暇あらず、就中世
に有名なるは、直江本、要法寺版、角倉本(一に嵯峨本又光悦本)、饅頭屋本等な
れども、此より先き駿河版開版以前、既に私人開版の先駆として現れしも
の二種あり、一は文祿五年(改元慶長元年)刊『補註蒙求』にして、一は慶長二
年刊『節用集』なりとす、

『補註蒙求』は小瀬甫庵活字を以て開版する所、其跋文に

桑域洛陽西洞院通勘解由小路南町住居甫庵道喜、新刊一字板繡此書、
以應童蒙之求也、呼嗚未弁芋耶羊耶魚耶魯耶澗愧林慙冀博覽人諒郢
斤多幸、惟時文祿第五丙申小春吉辰道喜記

と、一字板は即ち活字版の舊稱なり、これ實に私人開版中活字版の權輿と
いふべし、甫庵は尾州の人、經書に通じ、韜晦の奥旨に達す、初め豐臣秀次に

新刊徐狀元補注蒙求卷下

相如題柱　終軍棄繻

前漢司馬相如字長卿蜀郡成都人也少好讀書學擊劍名犬子既學慕藺相如之為人更名相如以訾為郎事景帝為武騎將軍非其好也病免家貧無以自業及卓文君従奔後卓王孫分與財物為富人久之武帝召以為郎即拜君妾請使西南夷拜相如中郎將建節往長聞南夷到漢通得賞賜多頗為内臣

蕭何攐擾秦治

新刊徐狀元補註蒙求卷下

桑域洛陽西洞院遍勘解由小路南町住居甫庵道喜新刊一字板繍此書以應童蒙之求也哼鳴未辨芋尊羊耶魚耶魯耶濶愧林懃藁悖覧人運鄙斤多幸

惟時文禄第五丙申小春吉辰道喜記

仕べしが、秀次亡びて後、出雲の堀尾吉晴に仕へ、松江築城を董す、晩年加賀前田侯の聘に應じ、祿百五十石を食みしが、寛永十七年歿す歳七十七

甫庵『補註蒙求』開版の時は、跋文に明記せるが如く、京都西洞院勘解由小路南町に住居せし際にして、舊主秀次の滅亡を距る事僅に二年の後に在り、されば甫庵未だ出雲の堀尾氏に仕へざる以前、浪人せし時の擧なりしを知るべし、而して當時開版の事業は頗る困難にして、許多の費用を要するの際に當り、一浪人の身を以てして、獨力開版の難事を遂げしは偉なりといふべし、人或はいふ、甫庵朝鮮役中諸將の捕獲せし活字を借用して印刷せしものなりと、然れども跋文に新刊二一字版」とあり、刊は即ち刻にして開版の際新たに雕刻せしめし事明かなるのみならず、其字體全く朝鮮活字と異なるを以て、其説の非なるを知るべし、

『補註蒙求』開版の翌年即ち慶長二年に至り『節用集』二冊活刷せらる、平井休與の開版する所にして、世に之を『易林本節用集』と稱す、蓋し易林

易林本節用集

節用集開版の沿革

『節用集』の誤謬を訂正し、其跋文を記せしを以てなり、

『節用集』は饅頭屋宗二の著す所にして、其初めて開版せし時代詳なら

易林と朝山意林庵と

すと雖も、天正以前に在りし事は『堺版節用集』天正十八年刊の巻末に

右此板木者泉州大鳥郡堺南庄石屋町經師屋有是石部了册

『群書一覽』に文龜二年活版節用集ありといへど、未だ見ねばこゝに擧げず）

とあるにて明かなれども、此印本誤謬多きのみならず、戰國時代に梓行せられしを以て、世に流布するに至らざりしが、文祿以降世の小康につれ、久しく埋沒せし文學のやゝ其芽を萌さんとするの時に當り、易林其誤謬を正し、休與之を開版したるを以て、盛に世に行はれしより、やゝ晩れて卷尾の平井休與開版の顯名を削去して再揭せる後摺本、慶長十五年、天地の界欄を縮め、卷尾を小山永次開版之と改めたる覆刻本、其他慶長十五年易林本を增減し字體を草書に改めたるもの、又同十六年更に眞草二行に改め烏丸二町上ル町刊之と跋せし飜刻本等續出したるを以て、後世誤て易林本を以て『節用集』の祖と稱するに至れり、

『節用集』訂正者易林は『清水物語』の著者にして、當時民間に在りて學和漢に通ぜし唯一の人物たる、朝山意林庵素心の假名なるべし、申齋隆德の

『反古つかみ』に

朝山意林庵素心は大佛邊に住す節用集を手つたいし人なり

とあるを以て證とすべく、其『節用集』跋に易林と記名せしは、易林と意林國音相通ずるを以て、一時の戲號となせしものなるべし、

『節用集』は饅頭屋宗二が作なる事は既にいへり、而して其證は『本朝書籍目錄』寛文十一年刊行に

林逸抄五十四卷道遙院殿ヨリノ傳ニテ饅頭屋宗二作宗二南都人林和靖之後也ト云節用集モ此人ノ作也

『橘庵漫筆』に

饅頭屋先祖を宗二といふ初て節用集を著述せし人なり元本を見侍りしが奥書に明應二年とか有しが

とあるにて知るべし、而して其著述の年代に至りては『比古婆衣』伴信友著に之を考證して

さてかの林逸抄の奥書の中に所謂于牡丹花肖柏也また後人の奥書に此聞書宗二方正齋之抄云々と見えたり肖柏が世に在りし頃をも

て推考するに逸はおほよそ文明より明應の比は世に在りけんとおもはるるに尾崎雅嘉が群書一覽に此節用集の古寫本を得て藏り卷末に明應五年五月三日と記し花押ありといへり其は逸が著せる原本なるにか然らずば其を直に寫せる本なるべしいづれにまれ件の年月は逸が自ら識せるものなる事しるければ此書を撰れる比推はかりつべし

と記せるによりて畧推定する事を得べし、而して此『節用集』や、著作以來久しく寫本にて傳はりしを以て、傳寫の誤頗る多く、時に無名氏の恣まゝなる增補、刪除の厄に逢ひ、元龜天正に至り開版せられし時には、僅に原本の面影をとどむるのみ、加ふるに魯魚の誤頗る多く、且件名に足らざる所あるを以て、慶長二年易林之を訂正增補し、其排列の順序を變更せしかば、茲に全く原本の面影をも失ふに至れり、而して慶長の中葉に至り明應の原寫本をいさゝか增減し、美濃判二ッ切の横本一冊（九十八葉）とし開版せられしが、後卅六葉以後の版木毀損せしを以て、之を補刻し再版となせり、補刻本卅六葉以下四周單邊を改め雙邊となせしを以て其別を知るべし、世に

節用集 以

天地

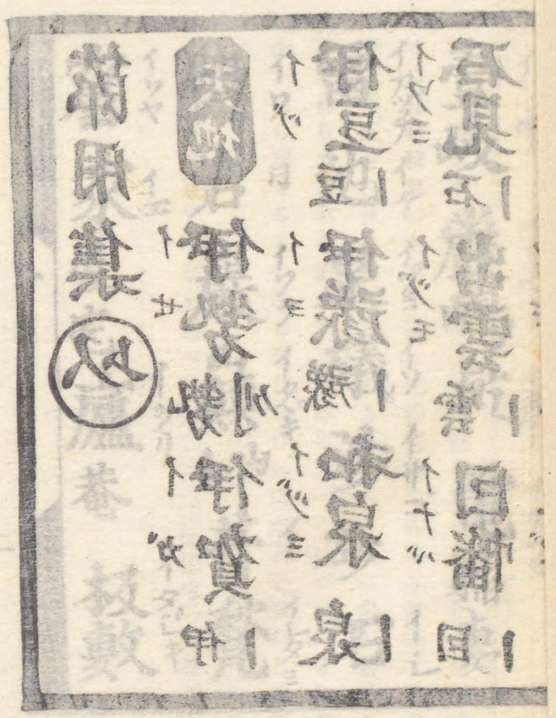
伊勢（イセ）　伊賀（イガ）　伊予（イヨ）　伊豫（イヨ）　伊豆（イヅ）　伊勢川（イセガハ）　伊賀川（イガガハ）　伊豫川（イヨガハ）　伊豆川（イヅガハ）　伊勢海（イセノミ）　伊賀海（イガノミ）　伊豫海（イヨノミ）　伊豆海（イヅノミ）　石見（イハミ）　石出（イヅモ）　石清水（イハシミヅ）　石川（イシカハ）　石原（イハラ）　石田（イハタ）　石井（イハヰ）　石倉（イハクラ）　石垣（イハガキ）　石壇（イハダン）　石橋（イハバシ）　石門（イハト）　石屋（イハヤ）　石家（イハヤ）　石宅（イハヤ）　石庵（イホリ）　石敷（イタヂキ）

壹岐嶋（イキノシマ）　壹岐嚴（イキノイハホ）　壹岐巓（イキノタケ）　壹岐山（イキノヤマ）　壹岐井（イキノヰ）　壹岐泉（イキノイヅミ）　壹岐磯（イキノイソ）　壹岐沙（イキノイサゴ）　壹岐砂（イキノイサゴ）　壹岐石（イキノイシ）

雷池（カミノイケ）　雷池泉（カミノイケノイヅミ）　雷池磯（カミノイケノイソ）　雷池沙（カミノイケノイサゴ）　雷池砂（カミノイケノイサゴ）　雷池石（カミノイケノイシ）

盤岩（イハホ）　盤岩嚴（イハホノイハホ）　盤岩巓（イハホノタケ）　盤岩山（イハホノヤマ）　盤岩井（イハホノヰ）　盤岩泉（イハホノイヅミ）　盤岩磯（イハホノイソ）　盤岩沙（イハホノイサゴ）　盤岩砂（イハホノイサゴ）　盤岩石（イハホノイシ）

富家（トミノイヘ）　富家屋（トミノイヘヤ）　富家宅（トミノイヘ）　富家庵（トミノイホリ）　富家敷（トミノタヂキ）



之を『饅頭屋本節用集』と稱す、蓋し他に開版せし所の『節用集』は、增補、刪除せられて宗二の原本を距る事遠く、殆ど別種なるやの觀あれども、此饅頭屋本は最も原本に近しとの意を寓して、時人かく呼びしものなるべし、

饅頭屋宗二は實名を林逸といひ、其祖は支那より歸化せしものなりといふ、世々南都にて饅頭を鬻ぎて業とせしを以て此名あり、『比古婆衣』に其家傳を叙して

奈良の饅頭屋鹽瀨氏の家傳を聞くに家祖は林淨因とてもろこし宋世の林和靖が後なるが曆應四年建仁寺の僧榮西がもろこしに渡て歸る時に伴ひ皈來て奈良に住て饅頭を製りて業とせり氏を林字の訓に從ひて波也志と呼び後に家號を鹽瀨とも號ひ字を宗二と云へり林逸は其が孫にてまた字を宗二といひ號を方正齋と稱へり逸は名なり歌物語の好にて西三條逍遙院實隆公また牡丹花肖柏に從ひ學びたりとぞ今も其子孫家業を相續て奈良に住來れりとぞこゝに家傳といふは其が家の事を聞書せるものに見えたるをとりすべて云へる也

直江本、會津本

『西州投化記』小宮山昌秀著に寫本

林淨因者林和靖之後也、建仁寺僧龍山嘗如『宋及元』、至正元年東歸、淨因從之、來『居奈良』、製『饅頭』、稱『鹽瀨氏』、淨因多『子』、長爲『僧』、學『龍山』、在『建仁寺中』、創『兩足院』、次某居『京師烏丸』、今稱『鹽瀨』者之先也、又稱『林氏』

雍州府志世事談綺、按喜光寺過去帳曰、一說淨因、晚年歸來、又曰、淨因三子、一人爲『僧』、建仁寺中兩足院無等以倫是也

とあり、其祖の支那より歸化せしものなる事首肯すべしと雖も、之を林和靖の後裔といふに至りては遽に信じ難し、既に『群書一覽』尾崎雅嘉著享和二年刊にも

清の褚稼軒が堅瓠集に曰く林可由みづから和靖七世の孫と稱す和靖が娶らざる事は既に梅聖俞が序中に見えたり姜石帚詩を作つて嘲りていはく和靖當年不『娶』妻因『何七世有『孫兒』非『鶴種』幷梅種』、定是瓜皮塔『李皮今の通譜亦瓜皮李皮に塔といふべし

と記せり、思ふに宗二が祖歸化するに當り、林姓なるより其宗を尊くせんが爲に、和靖が後裔と誇稱せしに非る歟、

『易林本節用集』開版に晩るゝ事九年、慶長十一年に至り『六臣注文選』

本朝銅活字版の濫觴

六十一卷開版せらる、米澤上杉侯の臣直江山城守兼續、銅活字を以て印行せしものにして、世に之を直江本又は會津本と稱す、會津は上杉家の舊領地たりしを以てなり、是を從來銅活字版の濫觴と稱せし駿河版『大藏一覽』の開版年代と比するに、正に九年以前に當れり、實に本朝銅活字版の權輿といふべし、

兼續武家に生れ戰場に人となりしも、能く文事を解し、兵馬倥傯の際常に典籍を蒐集し珍藏せし事は、駿河版『群書治要』開版の時、直江家に異本を採訪せられしを見て知るべし、而して其『文選』を開版せんとするや、費用を惜まず特に銅活字を採用せしは、思ふに腐朽毀損の虞なきを以て、永久に開版使用せんとの志望ありしによるものといふべし、然るに事志と反せしか、終に『文選』以外絕えて開版の擧なかりしは頗る惜むべし、

『文選』開版の場處は、兼續が領地に非ずして京師に在り『羅山文集』林羅山著に

文選有『李善註本』、其六臣註本中、又有『就『善本』而加『五臣』者、有『就『五臣』而添『善註』者、今此者就『五臣』而添『善註』者也、此本近歲米澤黃門景

勝陪臣直江山城守兼續開『版于要法寺、余請『秋元但馬守泰朝』而後泰朝
告『景勝』而以寄『余

と、思ふに米澤は邊陬の地、開版に不便少からざるを以て、洛京要法寺に於て印行せしものなるべし、

要法寺は日蓮宗にして、上京二王門通にあり、『山州名跡志』に

○要法寺（無山號）在『妙傳寺南二條北、宗旨同上云々、當山開基日尊上人、是即日蓮上人孫弟日目上人弟子也、正和元年所『開也、元地醒井通綾小路南也、今尚號『要法寺町』

とあれど、寶永年間更に今の地に引移りしなり、

當時要法寺に於て開版せしは、直江本のみに止まらず、『論語集解』十卷『法華傳記』十卷等あり、共に活字本にして刊行年代を記さずと雖も、慶長年間の印行たること疑ふべからず、世に之を要法寺版と稱す、要法寺版は何人の開版せし所なるや明かならずと雖も、之を直江本の版式と比するに全く別種なり、思ふに要法寺の住職文事を解せしにより、依賴に應じて校合、印刷、監督の勞をとりしか、或は自ら諸方を勸進して開版せしか、其事

要法寺版

跡今書に徵すべからざるを以て絶て知るに由なし、

文祿二年勅版梓行の擧あるや、活字版を採用せられしより以來、駿河版を初め其他の開版皆之に倣ひ、慶長中葉に至る迄刊行する所殆ど活字本ならざるはなし、而して慶長十三年に至り角倉素庵『伊勢物語』を初め、和漢の典籍數百卷開版の際整版を採用せしより、世亦此風に同じ整版の復活すると共に、活字版の衰微を來すに至れり、

角倉本の版式は、一見活字版の如しと雖も、全く整版なり、唯『史記』及『龍花傳書』のみ活版を用ひたり、而して是等の二書は、角倉開版中最後のものにして、元和寛永頃に刊行せられしものなれば、古刻書としての角倉本は、悉く整版なりといふを憚らず、

角倉本（一に嵯峨本、光悦本）

角倉素庵傳

角倉素庵は吉田氏にして、近江佐々木の支族なり、其角倉と稱せしは、五代の祖德春鄕を出て、嵯峨の角倉に居を定め、世々茲に住せしを以てなり、素庵通稱與一郎（又與市）名は光昌字は玄之、薙髮して三蘇庵と號す、若年豪膽を誇り、危險を侵して死地に陷りし事三度なりしも、幸に生を得たるを以て此號あり、後百事素に歸すと悟り素庵と改めしといふ、素庵年尚若き頃

より、父子以を助けて、大堰川を初め富士川、天龍川、高瀬川等を開鑿して功あり、父歿後其家業を継ぎ、毎年巨舶を南洋へ遣し、盛に貿易して巨利を博せしのみならず、常に運送船数百艘を所有し、大阪冬夏の両陣には、關東の兵器及軍糧を運輸せしかば、役後其功により永世嵯峨の地税を免せられ、淀川運船の税を與へらるゝ、されば其富鉅万を重ね、當時の大名高家をも凌ぎしといふ、

素庵家業の餘暇學を藤原惺窩に受け、詩歌を能くせしのみならず、又書を光悦に習ひ、其隨一と稱せられしが、後自から一流を創む、後世角倉流又は與市流と稱するものこれなり、寛永九年六月廿二日歿す、行年六十有三、

素庵曾て典籍の世に流布するの少きを慨し、有益の古書を開版せしめしもの頗る多く、其部數凡二十餘種數百巻に上れり、而して其書目は『辨疑書目錄』（中村富平著　寶永七年刊）に

角倉本書目

謠本　觀世流百番本

此ノ書ヲ以テ角ノ倉本ト云フ、或ハ光悦本ノ謠ト モ云フナリ、又本紙ニ雲母ヲ引五色摺ノ書ニ品アリ、又表紙ニ染色多シ則雲母ヲ以テ艸花鳥獣虫ノモヨウヲ摺込、此ノ書ヲ以テ、或數寄者床ノカサリ本ニスルコトナリ

伊勢物語二冊

此ノ二品ハ上ノ謠本ト仕出シ同コトナリ

古今集二冊

無言鈔三冊

長明方丈記一冊

此ノ四種ハ本紙ニ雲母モヨウヲ摺込、此ヲ以本トス、亦常紙ノ書モアルナリ、此レモ又牀ノカサリ本ニヨシ

源氏物語五十四帖

文章達徳録（無點本）十冊

謠亂曲二冊

此ノ源氏ハ本紙ニ雲母ノモヨウ摺ノ書ナリ、又亂曲ハ雲母引ノ紙ヲ以テ本トス

伊勢肖聞（牡丹花作）三冊

歌仙一冊

平家物語十二冊

徒然卿二冊

清少納言七冊

能花傳書（植字本）八冊

二十四孝一冊

とあるにて其一斑を知るべく、同目錄に漏たるものは『撰集抄』（雲母引本、素紙本の二種あり）『古今銘盡』『扇草紙』『犬たんか』（以上雲母引本）『史記』（素紙本）等にして、世に之を角倉本、嵯峨本又は光悦本と稱す、蓋し前二者は通稱と地名とにより、後者は本

角倉本の版下

角倉本と下村時房と

阿彌光悦其表紙模様を描き或は『古今集』『歌仙』等の版下を書せしとの傳説により、後人の命名せしものなり、以上の開版書中『伊勢物語』『伊勢物語聞書』(一名肖聞抄)を除くの外は、悉く刊行年代及序跋を記さず、而して其刊行年代を記せるは『伊勢物語』等の二書に至りても、たゞ也足軒(中院通勝)の跋文を記せるのみにして、角倉素庵開版の事に關しては毫も記せしものあらず、殊に『平家物語』下村時房刊行とあるを以て、近時之を下村版と稱し、角倉以外の如きは、卷末に他に開版者あるもの丶如く解せるもの少からず、然れどもたゞ刊之とあるのみを以て、時房は其開版者とするは誤れり、刊は即ち刻にして、時房は素庵の命によりたゞ之を雕刻せしに過ぎざるなり、たゞ之を雕刻せしに過ぎざるの人名を以て、其開版の書に冠するの不可なる事は、猶駿河木活字版中慈眼刊之とあれど、其開版者は家康にして之を監督せしは三要なり、慈眼はたゞ三要の命を受けて之を雕刻せしに過ぎざるを以て、之を慈眼版と稱するの妥當ならざるが如し、

世或は『伊勢物語』『源氏物語』『古今集』『歌仙』等を以て、素庵自筆の版下

角倉本伊勢物語　慶長十一年刊

角倉本伊勢物語 慶長十一年刊

字版中慈眼はたゝ三要の命を受けて之を雕刻せしに過ぎざるを以て之を慈眼版と稱するの妥當ならざるが如し、

世或は『伊勢物語』『源氏物語』『古今集』『歌仙』等を以て、素庵自筆の版下

本邦書籍中冊子に日本畵を挿入せし濫觴並に平假名を用ひし和文書籍開版の權輿

本邦繪畵印行の沿革

なりとし、或は光悦の筆なりといへども遽に信じ難し、蓋し嵯峨本の版下は悉く同筆になるを以て、一は以て素庵とし、一は以て光悦の筆なりと區別する事能はざればなり、思ふに素庵開版の際其門下をして版下を書かしめしものに非る歟、曾て之を盬定家に聞く、角倉本は光悦の書にもあらず又素庵の筆にもあらずと雖も、其筆意を受けしもの〻筆なる事は疑ふべからずと、

角倉本中最も早く世に出でしは『伊勢物語』にして、慶長十三年開版する所なり、而して此書一たび出で〻印版界に一新紀元を開くに至れり、即ち本邦書籍中冊子に日本畵を挿入せし濫觴なると共に、平假名を用ひし和文書籍開版の權輿として、從來漢文書籍に獨占せられし印版界の單調を打破し、近世俗文學書開版の先驅をなせしを以てなり、

蓋し本邦繪畵印行の最も古きは『下野國志』に日光山大權現本地佛馬頭觀音木版、本宮別所藏、承和十一年甲子正月日、とありて、裏には辨財天像並に大黒天、茶枳尼天を彫付たり、とあるものなるべし、次で『山槐記』治承四年三月廿一日の條に、摺寫塔の事を記し、『殿暦』承久元年二月六日の條

和文書籍開版の沿革

に、五大力圖繪及皮堂十一面形木摺の事を載せ『玉海』承安五年九月五日の條に、愛染王像毎日三百體摺寫の事見ゆと雖も、是等は俗に所謂一枚摺にして、書籍と何等の關係を有せず、而して室町時代初期に至り、春日版『大方廣圓覺修多羅了義經略疏』の如き、其首尾に佛畫を挿みしもの刊行せられしと雖も、繪畫とはいへ僅に其形體を現はすに過ぎずして、本邦書籍に挿畫の萌芽をなすにとゞまれり、かくて應永廿一年に至り『融通念佛緣起』二卷開版せらる、清涼寺の什物にして、繪畫は土佐守行廣、兵部少輔入道寂濟、民部卿法眼隆光、備後守光國、大夫法眼永春、修理亮行秀等の六名、詞書は後小松院を始め以下十二名の筆になる着色の繪卷物を覆刻せるものなりこれ實に本邦書籍に繪畫を挿みしもの權輿といふべし、然れども是等は皆卷子本にして、其冊子に繪畫を挿みしは、五山版『十牛圖』に始まり、江戸時代に至り『帝鑑圖說』慶長十一年刊出でゝ、多く繪畫を挿入せしも、前者は宋槧本、後者は韓本を覆刻せしものにして、其日本畫工の筆になり、やゝ見るに足るものは、實に『伊勢物語』を以て初めとす、

翻て之を和文書籍開版の歴史を見るに、其最も古きは元亨元年開版す

和文書籍開版の隆盛と共に活字版の衰微

る所の『黒谷上人法燈錄』にして、五山版『夢中問答』康永年間刊之に次ぎ、文龜以後に至りては『節用集』を先頭として、『徒然草壽命院抄』『太平記』等續出せしと雖も、悉く片假名にして『伊勢物語』開版以前、未だ冊子にして平假名を用ひし書籍の開版せられしものを見ず、これ曩に五山の僧徒等日用の事を記すに當りても、なほ片假名のみを使用せしかば、其餘風當時の學者に及びし結果に外ならざるなり、

角倉本『伊勢物語』は、恰も勅版及駿河版の盛擧を見て、私版の將に勃興せんとするの時に出でゝ、爲令悦稚童眼目而已と其跋文に記せしが如き趣旨により、多く繪畫を挿入せしのみならず、平假名を用ひ整版に刷して公にせし以來、其風を受けて和文書籍の刊行絶えず、從來印版界の覇王たりし漢文書籍を壓倒し、元和以降に至りては、たゞに古書飜刻のみに止まらず、頻に新作の草紙を刊行し、益々出版界の隆盛を致せり、而して是等の草紙も亦童蒙教諭の趣意になるを以て、多く繪畫を挿入し、漢字には振假名を施さざるべからざるにより、茲に活字版の不便を感じ、以後好事家の時に印行するの外、全く整版となるに至れり、

○當時代開版書跋錄

古文孝經　一冊（活版）

文祿二年十一月勅版

新刊徐狀元補註蒙求　三冊（活版）

桑域洛陽西洞院通勘解由小路南町住居甫庵道喜新刊一字板繡此書以應童蒙之求也呼嗚未辨芋耶羊耶魚耶魯耶淵愧林甑糞博覽八運郢斤多幸惟時文祿第五丙申小春吉辰道喜記

天台四教儀集解　三冊（活版）

各卷末文祿乙未曆十一月廿四日

此書文祿の年號あれど元和頃の梓行なり

錦繡段　一冊（活版）

錦繡段者東皐天隱之所編而未有刊行玆悉取載籍文字鏤一字於一梓基布諸一版印一紙纔改基布則渠祿亦莫不適用此規模頃出朝鮮傳達　天聽乃依彼樣使工摹寫焉　叡思辱在擬周詩六義敎以化之家藏人誦傳之不朽云

慶長第二歲在丁酉夷則下澣

臣僧南禪靈三誌焉

節用集　二冊

有客携鉅卷曰此節用集十字九皆贋也正諸於韻會禮部韻諸則命工刻梓焉如愚夫弄麞何辨字書之誤哉惟取定家卿假名遣分書伊爲越於江惠之六隔段以返之云

洛陽七條寺內平井勝左衛門休與開版

時慶長二丁酉易林誌

闕疑抄　四冊（活版）

此闕疑抄幽齋老新作之所也旨趣見奥書予又衣草之時侍几下沙衣免許書寫深秘遂底莫出窓外耳

慶長第二孟冬十五日也足叟素然在判

此書慶長二年とあれど開版は慶長末年なるべし

日本書紀神代卷　二冊（活版）

日本書紀歷代之古史也　元正天皇養老年中一品舍人親王太朝臣安麻呂奉勅撰之吾朝撰書迄　奏覽以是爲權輿者耶君臣共以莫不窮此書矣按　應神天皇以還至繼體天皇御宇異域典經多以雖來朝不解其義徒經三百有餘歲矣　推古天皇御宇聖德太子察三才之源達三國之起故始以漢字附神代之文字傍於于爰吾邦人浸得識量典經之旨非至聖誰敢成此緯哉蓋神道者爲萬法之根柢儒敎者爲枝葉佛敎者爲花實彼二敎者皆是神道之末葉也雅以枝葉顯其本原然則異曲同工者歟頃學儒佛者膠而知神書者鮮矣物有本末事有終始何棄本取末焉於神國爭疏神書乎萬機之政尙以神事爲最第一但神代事理既幽微非理不通欽惟　陛下寬惠叡智之餘後世惜其流布之不廣遂命鳩工於是始壽諸梓矣舊本頗純駁不一求數本考正之去其駁而錄其純用之國而及之天下則以成黜皡之治以紹神尊之統保瑞穗之地千五百秋將必有賴於斯焉

慶長己亥姑洗吉辰

正四位下行少納言兼侍從臣清原朝

臣國賢敬識

職原鈔　一冊（活版）
慶長己亥季夏刊

四書　六冊（活版）
慶長己亥刊行

孝經　一冊（活版）
慶長己亥刊行

元亨釋書　十冊（活版）
于時慶長四年月日
日東洛陽　如庵宗乾模行

孔子家語　四冊（活版）
世際季運而學校敎將廢也維時內府家康公于文于武得其名故興廢繼絕爲後學刻梓文字數十萬而賜予退爲謝公之恩惠初開家語此書是聖人與義治世之要文寔非小補也刊字列盤中則明本家語以數本考正焉或板行有訛謬或文字有顚倒以亡加之以余删之雖如此有帝虎鸛鶴誤者必矣只願待博雅君子改制焉也謹跋
慶長第四龍集己亥仲夏吉辰
前學校三要野衲於城南伏見里書焉
慈眼刊之

三畧　一冊（活版）
右三畧依內府家康公命刻梓焉板行誤明本講義改正者也
于時慶長四龍集己亥仲夏吉辰
庠主三要野衲書之

六韜　二冊（活版）
維時內府家康公以刊字數十萬賜予即開六韜六韜是文武備書也吾公治世不忘亂

謂乎
慶長四龍集己亥仲夏吉辰
前學校三要於伏見城下書焉

三畧　一冊（活版）
右三畧依　內大臣家康公命刻梓焉板行誤以講直兩部改正者也
于時慶長五龍集庚子孟夏吉辰
前龍山元佶叟於伏見城下書之

貞觀政要　十冊（活版）
唐太宗文皇帝者創業守成一代英武之賢君也千載之下仰其德慕其風者今之內大臣家康公是也故今前學校三要老禪校訂貞觀政要去歲開家語於板今歲刻政要於梓遒聖賢前軌而作國家治要宜也豐國大明神降辭下土之日受命嗣秀賴幼君賢佐遺命爾來寬厚而愛人聰明而治衆不異周勃霍光安劉氏輔昭帝也矧又海內弘此書而協和士民之心則爲明神不忘舊盟爲幼君盡至忠者其用大矣哉
慶長五年星輯庚子花朝節
前龍山見鹿苑承兌叟謹誌
慈眼久德刊之

法華經傳記　五冊（活版）
唐僧祥公不知其氏族博聞達識之人而記法華之應驗誘愚昧之徒殊載出傳譯等之科目該括一化之始終實維甚奇甚妙也故盛行于世爲談者之資矣然轉寫誤於豕亥剩有差脫不可稱計予嘗披僧史傳幷衆經錄等忽覺此記傳之有本據愈考愈質輒命工鏤梓學者幸勿惑焉時

慶長庚子載季春望日洛陽釋圓智誌

元祖蓮公薩埵略傳 蓮公大師年譜

慶長第六辛丑歲季冬下浣三日

本地院中板行

徒然草壽命院抄 二册 (片假名交活版)

此抄者壽命院立安法印凌醫家救療之暇廣見遠聞而漸終篇予披覽最奇之餘揮知毫聊錄事狀耳

慶長第六辛丑孟冬九日

也足叟素然

四體千字文 一册 (鏤文)

慶長壬寅刊 金宣開板

太平記 四十册 (片假名交活版)

慶長癸卯 富春堂新刊

五妃曲 一册 (活版)

此書刊行年代なしと雖も慶長八年の開版なり

徒然草壽命院抄 二册 (片假名交活版)

慶長九曆閼逢執除姑洗良辰

日東洛陽如庵宗乾刊行

大廣益會玉篇 五册

此書是蕭梁顧野王先生所選爾牟支桑見卷於美墻者也雖然厥板行少于世童蒙者明々若昏迷焉故道本祖轉兩翁傾心信鏤於梓正運純孝兩匠盡力旣工畢矣藏置諸京師四條云伏希庚鹿無疑寸陰昜輝如之白日蒐蒐可感萬年永鄭胸之春天矣

慶長九甲辰夏五月日

鐵山叟宗純謾書其後

法華玄義科文 十七册

惟時慶長九曆甲辰五月日於比叡山延曆寺東塔月藏坊令刊摺之畢

三畧 一册 (活版)

右三畧依 征夷大將軍家康公命刻梓焉板行誤以講直兩部改正者也

于時慶長九龍集甲辰仲冬吉辰

前龍山元佶叟於伏見城下書焉

四體千字文 一册 (鏤文)

慶長甲辰孟春日 下洛涸轍堂新槧

書札禮事 一册 (活版)

慶長玄默困敦夾鐘刊之

弘安禮節 一册 (活版)

慶長玄默困敦夾鐘刊之

東鑑 五十一册 (活版)

夫人之處世也言行之善不善不可不記焉得一善記之則百世善其人得一惡記之則百世惡其人言行寔君子樞機也可不愼乎

左氏記春秋而作萬代之龜鑑得良史名者難矣哉東鑑一書者自治承四年至文永三年八十七載之間傍羅曲探以大抵記之不知記者名爲遺憾久歷年代其名湮滅耶深隱山林其名埋沒耶抑又謙退以不著其名耶見此書則言行之美惡如指掌也吾大將軍源家康公治世之暇翫弄此書見善思齊焉見不善內自省也凡人主之所趍向天下隨之如風草形影也以東鑑名之者非無由殷以夏爲鑑周以殷爲鑑詩曰殷鑑不遠在夏后世今也刻梓以壽其傳後世能先此書辨別淄澠則非啻東州明鑑豈不作四方鑑戒乎書之爲跋

慶長十稔星集乙巳春三月日

前龍山見鹿苑承兌叟

元亨釋書　十冊

慶長乙巳歲仲夏日　下村生藏刊之

周易　六冊（活版）

古今學儒書者排斥佛經學佛經者排斥儒書是世之常而共不辨眞理也釋尊生中國設敎則如周孔周孔生西天設敎則如釋尊儒釋元來不涉二途如鳥兩翼似車兩輪也如閑室大禪師者壯歲入東關讀四書六經而品論之講說之既稱學校者有年于玆暮齡到洛陽傳中峯法要位空門極品僉曰儒釋兼幷也頃蒙　大將軍源家康公鈞命印行周易其志要弘聖道於萬年能校正舛差而加陸德明音義於王輔嗣注集而大成者乎古德曰鷲嶺拈華伏羲初畫少林面壁文王重爻然則於禪門亦不可不究盡易道予於禪師其情如骨肉因需跋其後不獲固辭謾書焉也

慶長十年星集乙巳孟夏初五日

鹿苑西笑叟承兌

玉篇　三冊

斯玉篇者以禮部韻會龍龕手鑑等校合旃書寫者也

時慶長旃蒙大荒落褚月日夢海謹記

周易　二冊（活版）

關東下總住正運刊焉

時丁乖拱之運無長無少入學志道也其所謂道者何也耶仁義禮智是也又推諸於則元亨利貞乃天之德也豈不學乎哉予壯歲遊學在關東日雖希宣尼之三絕慕劉安之

九師僅闚其戶牖不到其奧也雖然以所希慕之厚欲鋟梓以廣其傳日奄去歲之秋獲自一而六王氏註之自七而九韓氏註之到畧例之十唐學士刑璹傳之又加陸氏之音釋於其註下之唐朝一本而兼用本朝外史局之善本而參攷訂議漫璧甚而梓行以成矣嗚呼卷中舛謬且待博雅君子而已庶幾元亨之德日新而無所其終仁義之道擴充而永行于世矣

慶長乙巳季夏日

東下洛涸轍子祖博謹識

七書　七冊（活版）

夫兵書古今雖多諸家說凡以七書爲樞機孫子以兵書見於闔盧闔盧知孫子能用兵爲將破彊楚是孫子力也吳起學書於曾子事魯君後事魏文侯擊秦拔五城所以吳起爲將也穰苴齊景公時文能附衆武能威敵景公聞爲將尉繚以天官時日決勝而已三畧老人授子房書也是漢代平均基乎太公以文武龍虎豹犬傳於文王興起周代八百餘歲者乎太宗問李靖々對曰先仁義後權譎可謂文武兼並也前大將軍家康公以文安人以武威衆天下萬民咸歸服雖周漢不能過忽隨　公鈞命記七書於梓以講直正之畢矣予爲令知太平於後人跋其後也

慶長十一龍集丙午初秋念又一日

紫陽閑室元佶叟書焉

四體千字文　一冊

慶長丙午歲　春枝開板

四體千字文　一冊

慶長丙午歲　　金宣開板
四體千字文　一冊
慶長丙午歲　　讃　開板
帝鑑圖說　六冊（活版）
慶長拾壹稔星集丙午春三月日
豐光老衲承兌
六臣注文選　三十一冊（活版）
慶長丁未浩洗上旬八黃　板行畢
御成敗式目　一冊
慶長十二丁未曆九月日
韻鏡　一冊
慶長戊申中春良日
下洛涸轍書院新栞
職原鈔　二冊
官位職員科目備令條雖載之上古風儀輒
難識量多端也而今此抄者外題除書之體
內含令式之義而摸周與之職配唐官之名
又述自中古覃當時諸家昇進旨趣如指掌
也是以桃華禪閤被加格言尤可謂官位職
掌之龜鑑者也爰中原職忠欲鋟梓之余需
校讐因聚考數本從其宜而已並可便覽者
七八科附其後
于時慶長戊申夏四月蚯蚓出日
吏部少卿清原秀賢誌
五家正宗贊　六卷
慶長十三戊申仲秋吉辰
西京　花園一枝軒板行之
伊勢物語　二冊
伊勢物語新刊就余需勘校抑京極黃門一
本之奧書云此物語之根源古人之說々不

同云々如今以天福年所被與孫女本正之
然而猶有訂校之遺闕也更圖書卷中之趣
分以爲上下是雖不足動好女人情聊爲令
悅稚童眼目而已
慶長戊申仲夏上浣　　也足叟
伊勢物語聞書　三冊一名肖聞抄
右抄者肖柏老人所傳之作也仍號之肖聞
然依後土御門院仰手自書進之云々爾降
世皆異之猶元凱注左氏也彼翁者予祖之
餘流庶弟也今爲校讎亦有故者乎新刊之時作三策々
慶長己酉季春上浣　　也足叟素然墨書
古文眞寶　二冊
慶長十四己酉年陽月下旬
室町通近衛町本屋新七刊行
論語集解　二冊
慶長十四年己酉九月日
洛汭宗甚三板
友傳刻
伊勢物語　二冊
抑京極黃門一本之奧書云此物語之根源
古人之說々不同云々故去慶長戊申仲夏
之比中院也足軒素然以天福年所被與孫
女本正之幷加書圖卷中之趣分以爲上下
行于世矣余亦以其印本正之再令流布世
而已
慶長庚戌孟夏日
節用集　二冊
于時慶長十五年庚戌仲春如意吉辰釜座
衝貫三條松屋町小山仁右衛門永次開板

之

節用集　二冊

慶長上章閹茂仲春上澣洛下

太平記　四十冊（活版）

慶長十五暦庚戌二月上旬日春枝開板

日本書紀　十五冊（活版）

此寫本者當初安貞二年兼賴校讎諸本正應之中神祇權大副卜部兼方筆之收于石室以來永仁正四位下行神祇權大副兼山城守卜部仲季嘉元甲辰沙彌蓮惠康永壬午神祇權大副兼員轉書之云々永正之頃內大臣實隆公以件本親賜書訂朱墨點今據內相公本鏤梓廣傳于世恐活板之徒多誤及刀陶陰矣庶幾莫貽請於余焉

慶長十五庚戌仲夏念八　洛汭野子三白誌

倭玉篇　三冊

慶長庚戌仲春日

又一本於洛陽二條通二王門町開版と附記せるものあり蓋し前書を覆刻し開版云々の顯名を入木せしものなるべし

八卦圖會　一冊

于時慶長十六辛寅年林鐘吉日

比丘六物圖私鈔　三冊

右此私抄者京都僧衆一兩輩拜依塲衆所望講談之次而披集諸抄畢定多謬歟若少分者當其理是身幸而已然則生々不離三衣持戒世々不捨寶器廣利有情矣

于時慶長十六年六月九日於南都傳香寺寶圃照珍和尙御講之時寫之也

節用集　二冊

慶長十六年九月日

洛下烏丸通二條二町上之町刊之

年代紀畧　一冊

此書開版年代を記さずと雖も卷末は慶長十六辛亥年△百九今上皇帝即位聖壽萬歲々々萬々歲にて終りたれば同年の刊行なるや明かなり

重撰　倭漢皇統編年合運圖（年代記）　二冊

此書刊行年月を記さずと雖も卷首大日本帝系畧圖に第百八今上皇帝万々歲とあり卷尾慶長辛亥にて終りたれば慶長十六年の開版なるや明かなり

雲門匡眞禪師廣錄　二冊（活版）

慶長癸丑歲仲春月　洛陽宗鉄重刊

大藏目錄　三帖

慶長十八癸丑年九月吉日於洛陽梓之

徒然草　二冊

這兩帖吉田兼好法師燕居之日徒然向暮染筆寫情者也頃泉南亡年處士箕踞洛之草廬而談李老之虛無說莊生之自然且以暇日對二三子戲講焉加之後將書以命於工鏤於梓而付二三子矣越句讀清濁以下俾予糾之予座好其志忘其醜卒加校訂而已復恐有其遺逸也

慶長癸丑仲秋日　黃門光廣

倭玉篇　三冊

慶長癸丑仲冬日開版之

明德記　二冊

今世好事者保元平治平家物語皆以費梓工矣於是承久兵亂及明德記及應仁記不幸而免如予閑人幸而得之屢爲日之便時時以古本校訂之漸畢其功忽補其闕雖然不獲其全也庶幾後人就有是而正焉而已